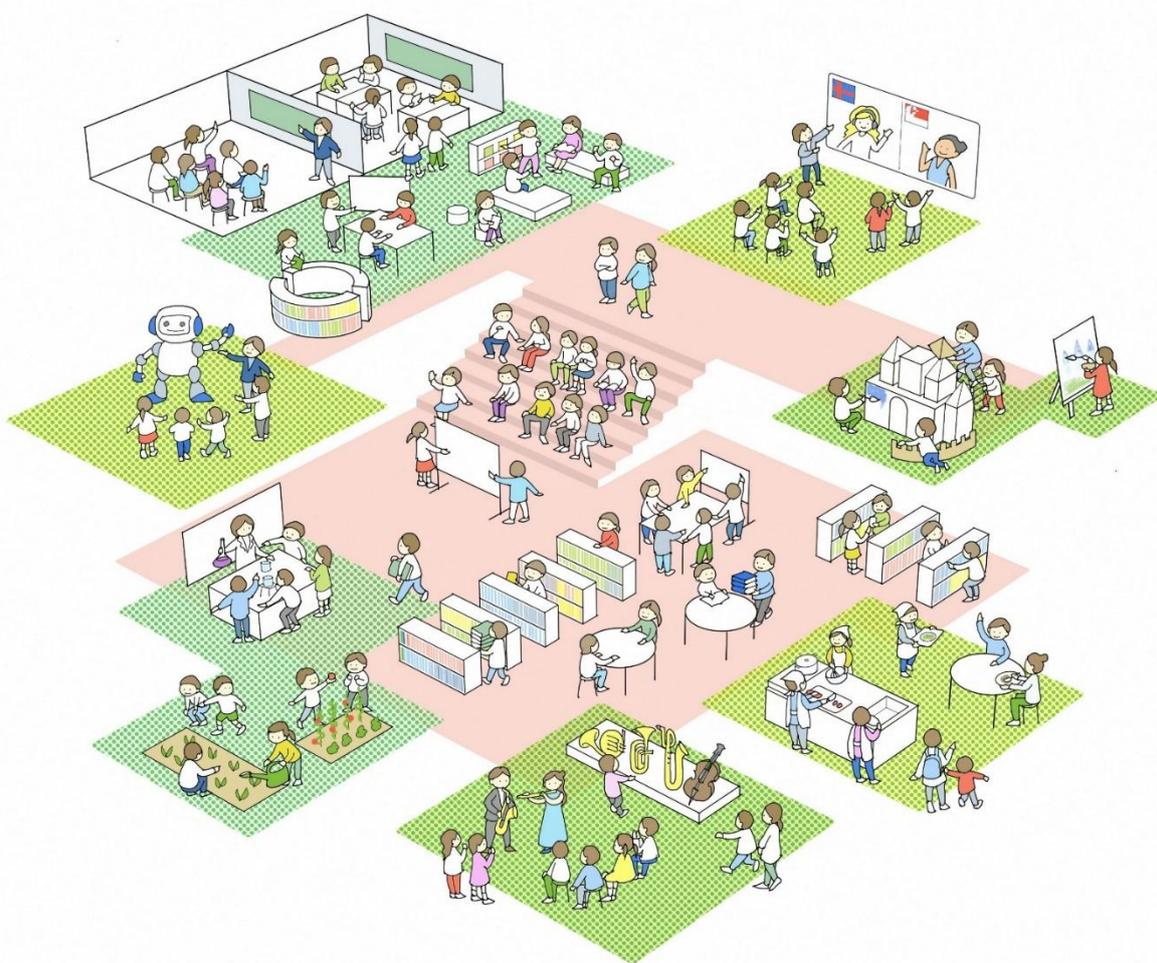


行田市忍・行田・埼玉・太田中学校区 義務教育学校(仮称)基本構想(案)



令和8年●月
行田市教育委員会

目次 CONTENTS

第1章	基本構想の趣旨及び位置づけ	
	1. 基本構想の背景と目的.....	2
	2. 上位計画との関連.....	3
第2章	新校開校に向けた基本的な考え	
	1. 新校で目指す学校教育.....	8
	2. 学校を整備・運営する上での考え方.....	13
	トピックス1 【アンケート調査の概要】.....	21
第3章	施設規模等の検討	
	1. 施設形態の検討.....	24
	2. 施設規模の設定.....	25
	3. 階数の検討.....	32
	トピックス2 【ワークショップの概要】.....	32
第4章	新校の設置場所及び配置・平面計画	
	1. 敷地選定に係る諸要件の整理.....	36
	2. 新校の敷地選定.....	37
	3. 新校の配置計画.....	39
	4. 新校の平面計画（ゾーニング）.....	41
第5章	施設整備方針	
	1. 防犯・安全計画.....	44
	2. 防災計画.....	46
	3. 環境配慮計画.....	47
	4. 構造計画.....	49
	5. 設備計画.....	50
	6. ICT環境計画.....	52
第6章	計画の実現に向けて	
	1. 概算事業費.....	54
	2. 財源の検討.....	54
	3. 30年間のライフサイクルコストについて.....	55
	4. 事業手法の検討.....	57
	5. スケジュール.....	61
-資料編-		
	1. アンケート集計結果.....	64
	2. ワークショップ報告.....	76

第1章

基本構想の趣旨及び位置づけ



1 基本構想の背景と目的

(1) 背景

本市の児童生徒数は想定を上回るスピードで減少しており、これに伴い、子どもたちが多様な人間関係を構築し、社会性などを身に付けていく機会の低下や、1校あたりに配置される教員数が減ることから、学校の教育活動を実施する上でも支障が生じています。

こうした状況を踏まえ、より良い教育環境を整備し、質の高い教育を実現するため、令和6年度に「行田市義務教育学校設置に向けた再編計画〈骨子編〉」を、令和7年度には「行田市義務教育学校設置に向けた再編計画〈個別編〉」をそれぞれ策定しました。

再編計画では、市内の小学校12校、中学校8校を再編し、新たに3校の義務教育学校の設置を目指しています。



ここがポイント

PICK UP!!

アンケートで「再編後の学校に期待することは何ですか」という質問に対して、

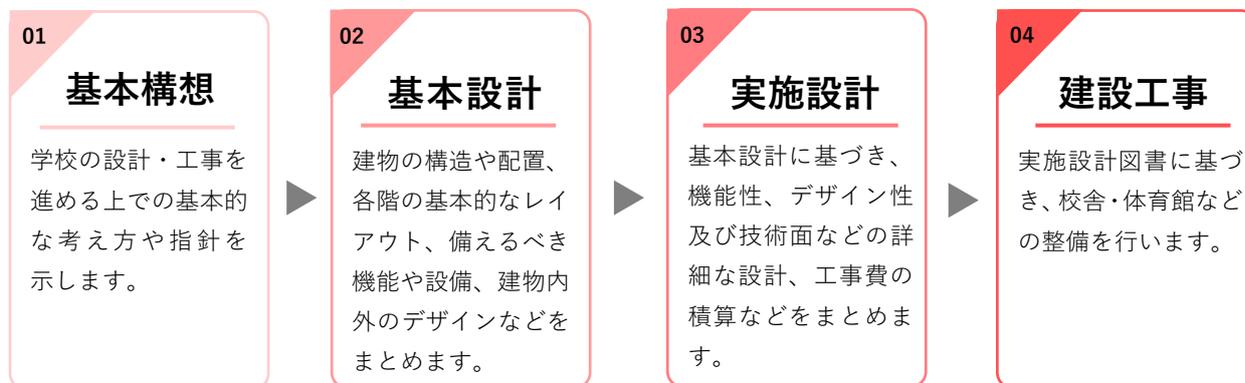
- ・「子どもたちが多様な価値観に触れることで社会性を養うこと」は、保護者・地域1位、教職員1位
- ・「特色ある教育の実践を通じて子どもたちの資質・能力を伸ばすこと」は、保護者・地域2位、教職員3位
- ・「魅力的な教育環境の整備による学びの充実」は、保護者・地域3位、教職員2位という結果となっています。

(2) 目的

再編計画〈個別編〉では、忍・行田・埼玉・太田中学校区を通学区域とする義務教育学校（以下「Bブロック新校」という。）を令和12年度に開校することを目指しています。

本基本構想は、Bブロック新校の整備に向け、設計や工事を進める上での基本的な考え方や指針を示すものです。

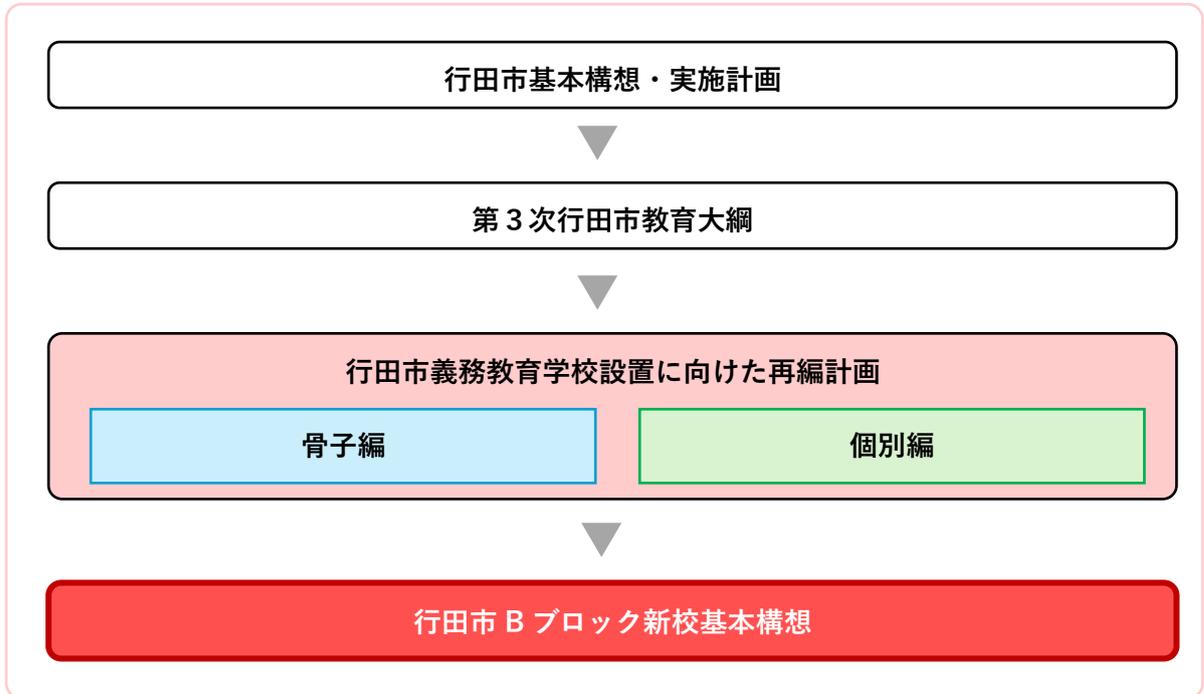
図1 基本構想の位置づけ



2 上位計画との関連

(1) 関連する上位計画における位置づけ

本市の上位計画との位置付けや関連性について、以下のとおり示します。



(2) 関連する上位計画の概要

ア 行田市基本構想・実施計画

市政運営の総合指針として、市が今後長期にわたって目指す将来像を描き、その実現に向けて重点的に進める政策を示しています。

第3章では、新しい行田の将来像として、子どもたちが義務教育学校に通い、多くの友達と切磋琢磨しながら学びを深めている姿が描かれています。

また、第4章では、将来像を実現するための重点政策として「子育て支援の強化と教育の充実」を掲げ、児童・生徒、保護者及び教員にとって望ましい環境の実現に向けて、学校再編の取組みを着実に進めることとしています。

イ 第3次行田市教育大綱

教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の目標や方針について定めたものです。

第3次行田市教育大綱では、子どもたちの「生き抜く力」を育むため、小中一貫教育の取組みを加速させるとともに、英語教育やAIをはじめとしたICT教育など特色ある教育に取り組むことを掲げています。

また、子どもたちの「アイデンティティの確立」を支えるため、本市の豊かな教育資源を生かした

体験学習や学年を超えたグループ学習などにより、自己認識や自己理解を深めるとともに、様々な価値観に触れ視野を広げる機会を充実させていくことを示しています。

これらに加え、「通いたい・通わせたい」と思える学校づくりに向けて、施設一体型の義務教育学校への再編を目指すとともに、ICT環境の充実を図るなど、安全で快適な学校環境の整備を進めることとしています。

ウ 行田市義務教育学校設置に向けた再編計画〈骨子編〉

再編計画「骨子編」は、今後の学校再編の方向性を示す計画であり、令和16年度までに、小・中学校20校を再編し、3校の義務教育学校の設置を目指しています。

再編を進める上で、「子どもたちのウェルビーイングを向上させる学校再編へ」をキーコンセプトに掲げ、以下の4つの基本方針（図2）に基づき、取組みを進めていきます。

図2 学校再編に向けた基本方針



出典：行田市義務教育学校設置に向けた再編計画〈骨子編〉

また、基本方針の内容を踏まえ、「新たな学校は義務教育学校とすること」、「新たな学校の規模は1学年3学級以上とすること」、「新たな学校の通学区域は、現在の中学校区単位をベースとして定めること」といった考えに基づき再編を進めることとしています。

エ 行田市義務教育学校設置に向けた再編計画〈個別編〉

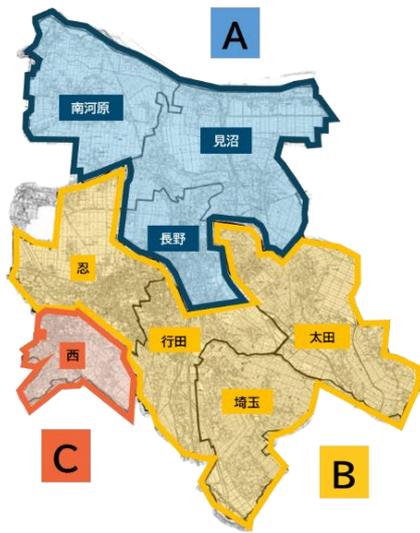
再編計画「個別編」は、骨子編を踏まえ、再編後の学校の候補地をはじめ、新校開校までのスケジュール、本市がこれから目指す学校教育や施設整備の考え方などについて示しています。

具体的には、義務教育学校での特色ある学びとして、「外国語」、「ふるさと学習」、「教育DX」を推進する中で、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させた授業を実践し、知識や技術だけでなく、行動できる子どもを育てます。

また、施設の面では、1人1台端末と高速ネットワーク環境を前提とした新しい時代の学びを実現できるよう、柔軟で創造的な空間づくりに向けて、「未来志向」で整備します。

なお、各通学区域における新校の候補地及び開校目標年度を次頁の図3のとおり整理しています。

図3 各通学区域（A・B・Cブロック）における新校の候補地及び開校目標年度



【Aブロック】

- 候補地：長野中学校の敷地または長野中学校区内の新しい土地
- 開校目標年度：令和14年度

【Bブロック】

- 候補地：佐間地区内の新たな土地または行田中学校の敷地
- 開校目標年度：令和12年度

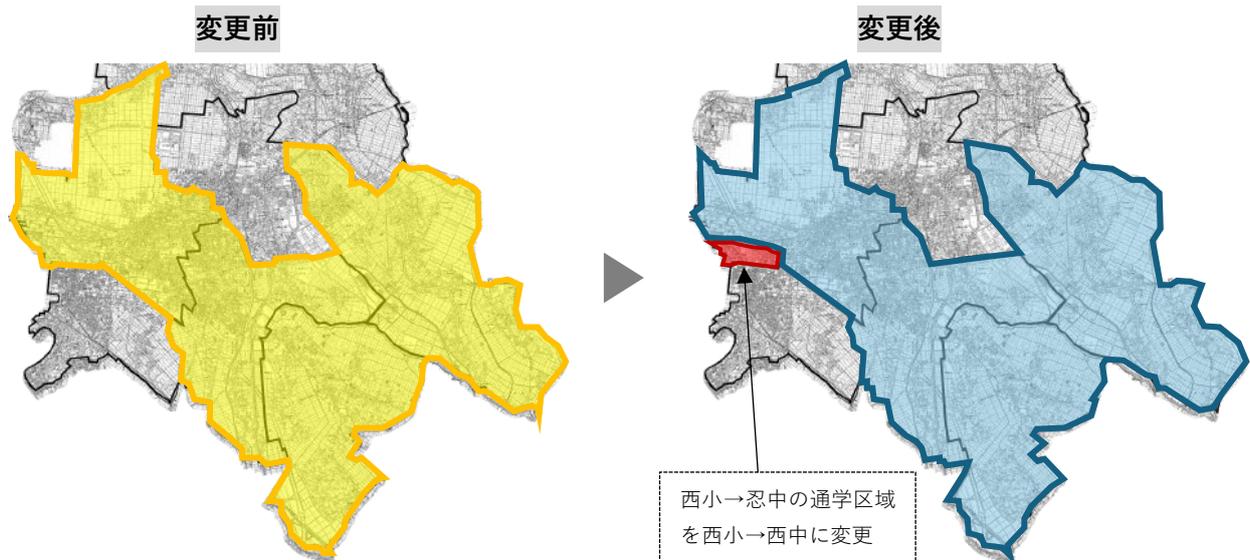
【Cブロック】

- 候補地：西中学校の敷地または泉小学校の敷地
- 開校目標年度：令和16年度

Bブロック新校の通学区域について

骨子編では、新たな学校の通学区域を現在の中学校区単位で定めつつ、学校の位置により、通学区域を一部変更する必要があることを示すとともに、1つの小学校から複数の中学校に分散進学となっている学校は、この状況を見直すこととしています。

西中学校、忍中学校へ分散進学となっている西小学校については、Bブロック新校への通学距離も考慮し、西小学校児童は、全て西中学校に進学するよう通学区域を変更する予定です。これにより、Bブロックの通学区域を下図のとおり変更することとしました。



第2章

新校開校に向けた 基本的な考え



1 新校で目指す学校教育

行田市教育大綱を踏まえ、子どもたち一人一人の能力を開花できるよう、「生き抜く力の育成」・「アイデンティティの確立」・「『通いたい・通わせたい』と思える学校づくり」を進め、知識や技術の習得だけでなく、主体的に行動できる子どもを育成します。

これらを実現していくため、義務教育9年間の学びを一体的に捉えた小中一貫教育を実践するとともに、「外国語」、「ふるさと学習」、「教育DX」を柱とした特色ある教育活動を実施します。

(1) 生き抜く力を育む小中一貫教育

ア 学年段階の区切り

いわゆる中1ギャップの状況や、発達段階に応じた学習内容及び指導体制などを踏まえ、学年段階を「4（1～4年生）－3（5～7年生）－2（8～9年生）」の3つのまとまりに区切り、子どもたちに効果的な指導を行います。

具体的には、1～4年生は「学びの基礎期」とし、学びへの興味・関心や挑戦する意欲を高め、学習習慣を確立します。1・2年生のときには、あいさつ・時間管理・準備など学校生活全般における基礎を身に付け、その後、基礎学力の定着や体力の向上を図ります。併せて、総合的な学習の時間などを活用した課題解決型学習への取組みも始めます。

5～7年生は「学びの活用期」として、基礎的な知識・技能を活用して課題解決する力を育成します。

8・9年生は「学びの応用期」とし、義務教育課程の仕上げに向けて、これまでの学びを振り返りつつ、自身の進路を見据えた教育活動の充実を図り、自己実現に向けた基盤を構築します。

イ 指導体制

●学びの基礎期（1～4年生）

子どもたちが学校生活に慣れ、土台を築く段階です。そのため、心理的負担を軽減し、安心した環境の中で基礎的な学びを支えられるよう、「学級担任制」を基本とし、教師と子どもたちが信頼関係を築きながら学習指導と生活指導を一体的に行います。

●学びの活用期（5～7年生）

子どもたちの心身の成長が著しく、中学校段階へのスムーズな移行に向けた準備が必要です。7年生では、教科担任制が完全実施となることから、5・6年生で段階的に「部分教科担任制」による指導を取り入れるとともに、「相互乗り入れ授業」を実施し、抽象的な思考力を育てます。

●学びの応用期（8・9年生）

各教科の専門的な指導を強化し、学びを深める段階であることから、「教科担任制」による指導を実施します。

表1 4-3-2の学年段階の区切りにおける指導の重点と指導体制のイメージ

学 年	前期課程（小学生）				後期課程（中学生）					
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
段 階	学びの基礎期				学びの活用期			学びの応用期		
指導の重点	基礎的な生活習慣の確立 基礎学力の定着、基礎体力の向上 発達段階に合わせた体験を通じた 学び				自主的な学習態度の育成 身近な社会に視点を置いた 学習の充実			自律的な学習態度 の育成 より広い視野に 立った学習の充実		
指導体制	学級担任制				部分教科担任制			教科担任制		
					相互乗り入れ授業					

ウ 異学年交流

児童生徒が豊かな人間関係を築き、互いに学び合いながら成長するとともに、学校全体が一体感を高められるよう、異学年交流を実施します。また、こうした活動を通じて、子どもたちのリーダーシップやフォロワーシップを育成していきます。なお、各段階における目的は、以下のとおりです。

表2 異学年交流の各段階における目的

段 階	目 的
学びの基礎期 (1～4年生)	○ 学年間のつながりや支えを感じることで、協力や助け合いの基盤をつくる
学びの活用期 (5～7年生)	○ 上級生からリーダーとして資質を学び、下級生をリードすることで、自己肯定感を高めるとともに主体性を育む ○ 下級生を導く力や上級生と協働する姿勢を育み、多様な人間関係を構築する
学びの応用期 (8・9年生)	○ 下級生を指導・支援する機会を増やし、責任感、リーダーシップ、他者と円滑に関わる力を高める ○ コミュニケーション能力やチームワークなどの社会性を高め、将来に役立つ対人関係スキルを身に付ける

どの段階においても、上級生が下級生をサポートする場面を設定し、責任感や相手を思いやる心を伸ばす教育活動を実施していきます。

(2) 行田ならではの特色ある教育活動

再編計画「個別編」では、行田ならではの特色ある学校をつくるため、「外国語」、「ふるさと学習」、「教育DX」を柱にした教育を実践していくことを示しています。その後、次期学習指導要領における検討状況や、本基本構想の作成に向けたアンケート調査の結果も踏まえ、「グローバルコミュニケーション」、「STEAM（スティーム）教育」、「情報活用能力の育成」として再整理しました。

ア グローバルコミュニケーションを育む教育

グローバル化の進展は、国境を越えた交流にとどまらず、経済活動の活性化や異文化交流による新しい価値観の創造など、私たちの生活に大きな影響を与えています。このような社会の中で、子どもたちがたくましく生き抜いていくためには、「世界を見る窓」として英語を活用できる力を身に付け、世界における多様性への理解、幅広い視野、異文化間で協力する態度を育てていく必要があります。

そのため、新校では幼少期から切れ目のない英語教育を推進するとともに、子どもたちが国籍や文化、価値観の違いを理解し、尊重しながら意思疎通を図ることができるよう「グローバルコミュニケーション」を育む教育を実施します。



ここがポイント

PICK UP!!

アンケートで「これからの学校でどのようなことを学んで（学ばせて）みたいか」という質問に対して、

- ・「英語を使って海外の人と交流したり、世界のことを知る学び」は、保護者・地域2位、教職員3位となっています。

英語教育では、オールイングリッシュによる活動を基本とする

- 歌やチャンツ、アクティビティ中心で英語に慣れ親しむ
- 【1・2年生】短時間の複数回指導による集中した学習を実施
- 【3年生】副読本を活用してアルファベット文字を認識する学習を開始

- 全授業に外国語指導助手（ALT）を配置*
 - AI英語学習アプリの活用開始*
 - 学級担任や英語教師、ALT、AIのベストミックスによる授業の実施*
- ※9年生まで継続

- 4技能測定テストの実施
- オンラインや海外からの訪問者の受け入れによる国際交流
- オラトリカルコンテスト（英語弁論大会）の実施



図4 グローバルコミュニケーションを育成するプログラムのイメージ

イ STEAM (スチーム) 教育

AIなどのデジタル技術の急速な進展をはじめ、地球規模の気候変動や国際情勢の急激な変化など、社会は目まぐるしく変化し続けています。こうした予測困難な時代において、経験したことのない課題に直面したときに、異なる分野の知識を組み合わせ、創造的に解決策を導き出す力が必要となります。

そこで、新校では様々な教科を横断して探求的な学習を実施するSTEAM教育を導入することにより、子どもたちの知的好奇心や探究心を引き出し、新たな価値を生み出す創造力を育成します。

その上で、実践的な取組みとして、行田の歴史・自然・産業・環境・文化などを体験的に学ぶ、「課題解決型学習 (PBL: Project Based Learning)」を繰り返し実施し、子どもたち自ら課題を設定、情報収集・分析を行うとともに、仲間と協力することや地域の皆様などとの関わりを通じて、課題解決能力を高めます。



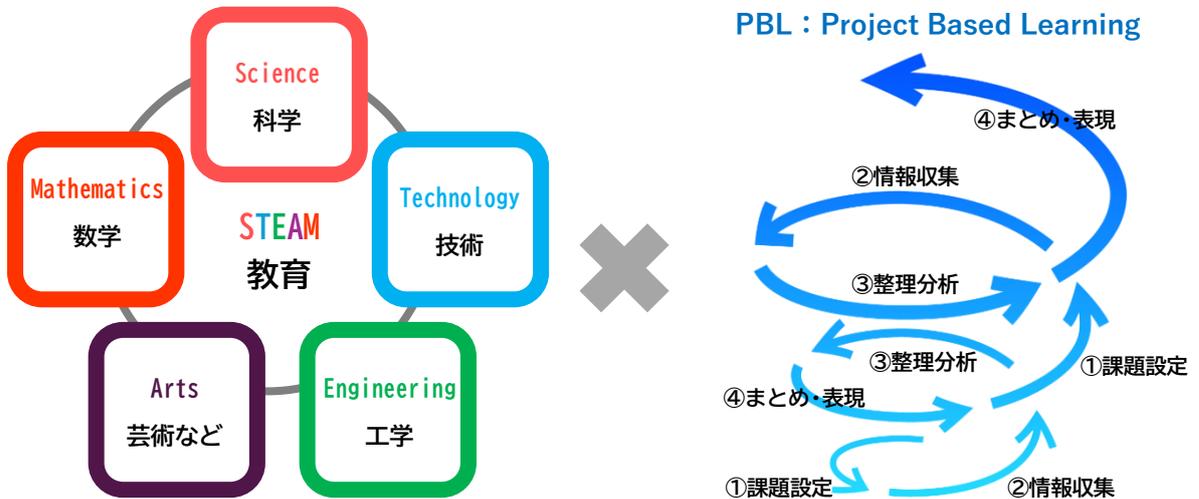
ここがポイント

PICK UP!!

アンケートで「これからの学校でどのようなことを学んで(学ばせて)みたいか」という質問に対して、

- ・「科学やものづくりなど未来につながる学び」は、小学生1位、中学生3位
- ・「地域や歴史を知ったり、見たりすることで、大切にすることを育てる学び」は、教職員1位
- ・「社会やお金の仕組みを知り、これから役立つ知識を身に付ける学び」は、中学生1位、保護者・地域1位という結果となっています。

図5 STEAM教育と課題解決型学習を関連させた教育活動のイメージ



STEAM教育での取組例

- ・企業や教育機関と連携し、「科学」や「ものづくり」をテーマとした体験型の探求学習
- ・二酸化炭素の増加や地球温暖化に関して課題探求し、フィールドワークによる環境学習
- ・地域の産業や文化をテーマとした探求学習を展開し、関係機関と連携した体験活動

ウ 情報活用能力を育む教育

情報活用能力とは、必要な情報を適切に収集・整理・分析し、それを活用して課題の解決や自己の考えを形成する力であり、現行の学習指導要領において、学習の基盤となる資質・能力の一つとして位置づけられています。

各教科の特性や子どもたちの発達の段階に応じて、プログラミング学習や生成AIなどの先端技術を適切に活用し、発表やプレゼンテーション、グループワークなどの活動を通じて、情報を精査し、使いこなす力を育成します。

PICK UP!!



ここがポイント

アンケートで「これからの学校でどのようなことを学んで（学ばせて）みたいか」という質問に対して、「**プログラミングやAIについて知り、時代にあった技術を身につける学び**」は、小学生2位、中学生2位、保護者・地域3位、教職員1位となっています。

表3 情報活用能力を高める教育活動のイメージ

	前期課程（小学生）	後期課程（中学生）
基本的な操作	<ul style="list-style-type: none"> ・キーボード入力 ・電子ファイルの保存・整理 ・インターネットの閲覧 	<ul style="list-style-type: none"> ・情報処理の仕方の工夫
課題解決・探求における情報活用	<ul style="list-style-type: none"> ・文章編集や図表作成 ・AIで文字や画像を収集・比較 ・調べたものの発表 	<ul style="list-style-type: none"> ・AI活用による効果的な情報収集 ・情報の比較・検討及び信頼できる情報の選択 ・受け手に分かりやすい発表や表現の工夫
プログラミング	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な学習活動でプログラミング体験を導入（ゲーム、アニメーション、ロボットなどの作成） 	<ul style="list-style-type: none"> ・プログラミング技術を用いた課題解決型学習
情報モラル	<ul style="list-style-type: none"> ・情報発信による影響の理解 ・ネットワーク上のルールやAI利用のマナーの理解 ・自他の権利の理解 ・誤情報や危険な情報への理解 ・健康を害する行動への理解 	<ul style="list-style-type: none"> ・ネットワーク利用上の責任に関する理解 ・基本的なルールや法律、違法性に関する理解 ・情報に関する権利への理解 ・トラブルの対処方法に関する理解 ・基礎的な情報セキュリティ対策の理解 ・健康を害する行動への理解

2 学校を整備・運営する上での考え方

これまでに示した新たな教育を実現し、誰もが利用しやすく、心地よい魅力的な空間となるよう、次の基本的な考え方を踏まえ、新校の施設整備を行います。

本市で初の義務教育学校となる新校では、義務教育9年間の学びをつなぐ小中一貫教育の良さを引き出し、質の高い教育を実現します。

また、多くの仲間たちや保護者・地域の皆様、教職員をはじめとする多様な他者とのつながりを感じ、子どもたちが主体的に行動しようとするモチベーションを高められる創造的な学習空間を整備することで、未来志向の学び舎として相応しい学校づくりに取り組みます。

「みんながつながり 心が動く 未来志向の学び舎」

(1) 学校空間を考える際のキーワード COMMON (コモン) と Well-being (ウェルビーイング)

これからの時代に即した学校施設には、学びの内容や個別学習、協働学習、探求学習など多様な学び方に対応できる柔軟かつ可変的な学習空間が必要となります。この他、異学年交流や地域の皆様をはじめとする多世代交流など、学年の枠を超えた活動が行えるよう、自由度が高く、多目的な利用が可能な空間の他、安心して居心地よく過ごせる環境も求められています。

併せて、子どもたちだけでなく、地域との連携にも対応できる「オープンな学びの場」としての役割も期待されています。

そのため、新校の整備に当たっては、「共有スペース」や「みんなで使える場所」を指すCOMMONと、「幸福」、「健康」、「充足感」を意味するWell-beingの考え方を軸にして、様々な検討を行っていきます。

ア COMMON (コモン)

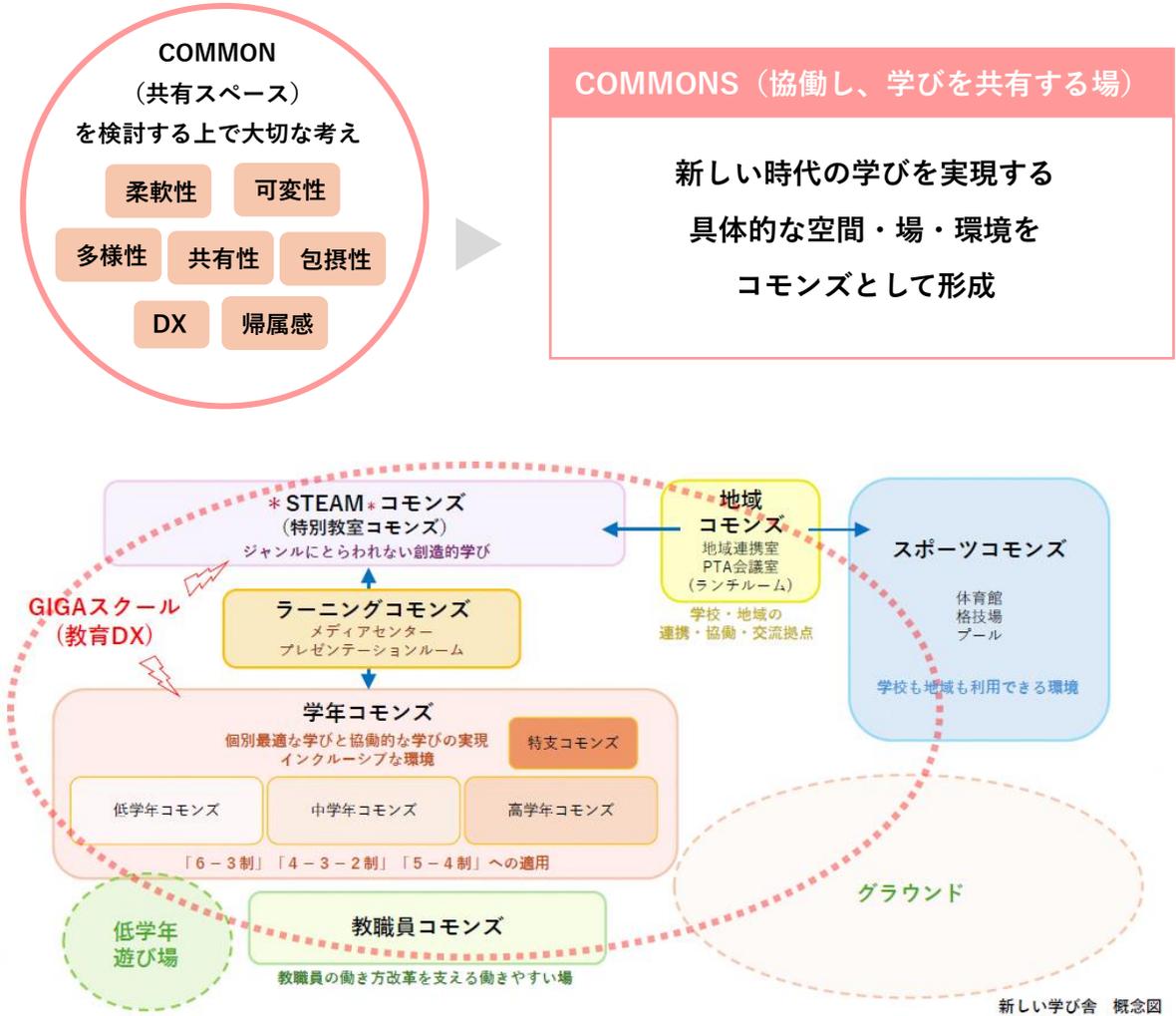
これまでの学校施設は、大別すると普通教室、特別教室、管理諸室（職員室、校長室、事務室、更衣室など）、体育館、武道場などがそれぞれ存在し、廊下や階段でつながれている配置が主流となっていました。

令和の時代となり、GIGAスクール構想による1人1台端末と高速ネットワークの整備が進んだことにより、子どもたち一人一人のペースに合わせた「個別最適な学び」とデジタル上で共同作業を実施する「協働的な学び」を一体的に充実させ、従来型の一斉授業だけでなく、複線型の授業も可能となりました。このように、子どもたちの学ぶスタイルが変容する中、多様な教育方法や学習活動を自由に展開できるよう、施設環境も変革していくことが求められています。

そこで、学校の空間構成に共通性や柔軟性に焦点を当てる「COMMON (コモン)」という考え方を踏まえ、関連する諸室・諸空間（教室、廊下、オープンスペース、階段など）を有機的にま

とめることで、スペースを柔軟に活用する施設計画とします。そして、これらを通して、学校施設全体を学びの場として捉えて、様々な教育活動に対応できる施設づくりを行います。

図6 COMMONのイメージ(上図)及びCOMMONの考え方を踏まえた新しい学び舎の概念図(下図)



〈学年コモンズ〉

- ・教室の枠組みに縛られることなく、個々の教室をつなぎ、同学年の児童や生徒が共有して活動を行うひとまとまりの学習空間である「学年コモンズ」を設けます。これにより、1クラス、複数クラス、学年、少人数など様々な単位で授業が行えるよう計画します。コモンズのスペースを教育活動に応じて可変的に利用できるよう、可動壁、間仕切パネル、引き戸などを有効活用します（図7参照）。
- ・また、各学年が独立した単位として存在するだけでなく、連携して機能することが重要です。成長段階に応じた複数学年同士のまとまりを形成し、様々な教育活動に対応できる平面構成や断面構成としていきます。
- ・特別支援学級については、インクルーシブ教育の観点から、個々の特性を踏まえつつ、学年コモンズと安全かつ円滑に交流や共同学習が行うことができる配置計画とします（図8参照）。
- ・この他、児童生徒が大半の時間を過ごす場所であるため、生活空間としての設えも意識して整備します。

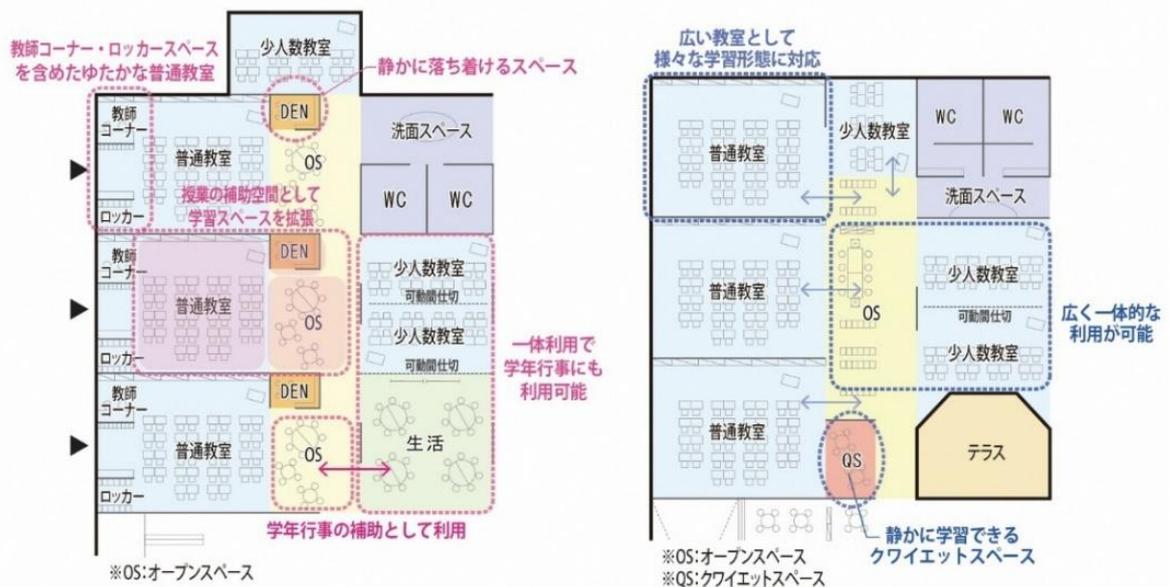


図7 学年コモンズのイメージ(左が低学年、右が中高学年)

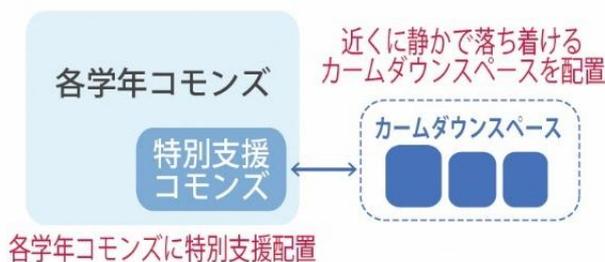


図8 インクルーシブな環境を重視した特別支援コモンズのイメージ



写真1 学年コモンズにおけるオープンスペースの例

〈ラーニング・コモンズ、STEAM（スチーム）コモンズ〉

- ・学校内において、みんなが集まり、調べたり、話し合ったりすることで、ワクワクしながら学べる場所として、「ラーニング・コモンズ」や「STEAMコモンズ」を整備します。
- ・「ラーニング・コモンズ」は、学校図書館とコンピュータ室の機能を合わせ持ち、読書スペース・書架などの他、大階段・階段教室・交流スペースなどを適切に配置することで、プレゼンテーション、展示、成果発表などを行えるようにします。
- ・「STEAMコモンズ」は、これまでの特別教室での学習にとどまらず、物事を体験・創造し、表現する喜びや楽しみを感じられる環境とするとともに、教科横断的な学習が円滑に進むよう、各諸室を有機的に連携できる位置に配置します（図9参照）。
- ・ラーニング・コモンズやSTEAMコモンズについては、児童生徒のみならず、保護者や地域の皆様などが利用できるよう、セキュリティ面なども含め、設計段階で検討します。

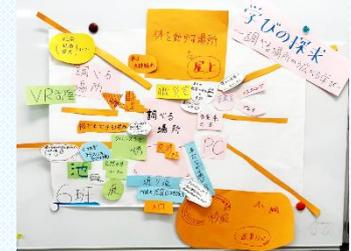


ここがポイント

PICK UP!!

アンケートで「新しい学校にどのようなスペースや機能が必要か」という質問に対して、「調べたり、友だちと話し合って、学習できる場所」は、小学生3位、中学生2位となっています。

また、ワークショップでは、「探究・交流スペースを学校の中心部に設ける」といった提案が多数上がりました。



ワークショップにおける子どもグループの提案

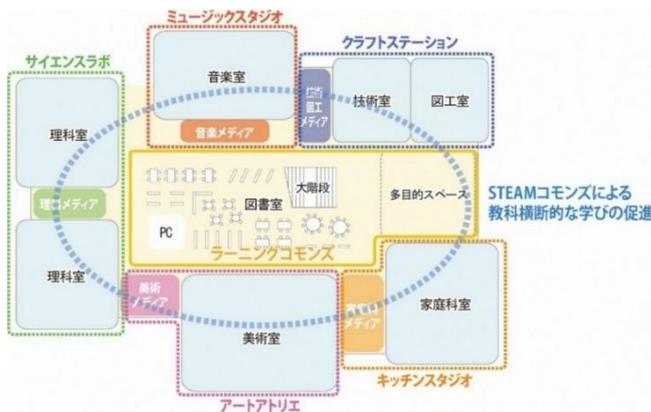


図9 ラーニング・コモンズを中心とした学びの展開イメージ



写真2 ラーニング・コモンズの例

〈教職員 commons〉

- ・教員同士の情報共有や授業に向けた教材製作、さらにはリフレッシュの場など、管理機能や新たな機能を加えたエリアを「教職員 commons」として整備します。教職員 commonsには、①個人作業のための場、②協働作業のための場、③リフレッシュの場、④子どもたちとのコミュニケーションの場が有機的に連携する空間を計画します（図 10 参照）。また、空間を有効活用するため、フリーアドレスの導入についても検討します。
- ・教職員 commonsのエリアだけでなく、学校全体が教師の働きやすい環境とするため、学年 commons、ラーニング・commons、STEAM commonsにおいて教員スペース（コーナー）や教材準備スペースも計画します。

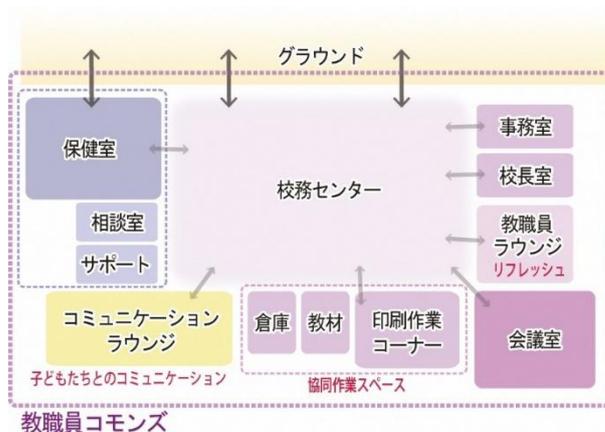


図 10 まとまりのある教職員 commonsのイメージ



写真 3 校務センターの例

〈地域 commons・スポーツ commons〉

- ・学校と地域がつながり支え合う空間を「地域 commons」として整備します。具体的には、保護者や地域の皆様との連携交流を図ることができる機能を有した多目的スペースや会議室などが考えられます。
- ・多目的室は、放課後の学童保育室としての利用を想定しています。
- ・体育館やグラウンドなどのスポーツ施設は、「スポーツ commons」として形成し、地域 commonsと連携して機能するよう計画します。

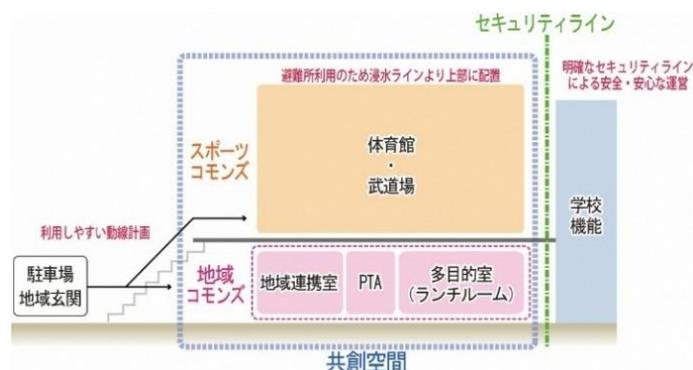


図 11 地域 commonsとスポーツ commonsからなる共創空間の断面イメージ

イ Well-being (ウェルビーイング)

国の教育振興基本計画（令和5年6月16日閣議決定）では、「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」をコンセプトの1つとして掲げ、今後の教育政策に関する基本的な方針の上位概念となる総括的な基本方針と位置付けています。

新しい学び舎づくりでは、学校の主役である子どもたちをはじめ、保護者、地域の皆様、教職員など学校関係者が Well-being な状態（多様な人と人とのつながりの中で生き生きと活動している状態）となり、新校が「居心地がよい」と思える場所となるよう施設環境を整備します。

〈Well-being (ウェルビーイング) な学校〉

- ・子どもたちが一日の1/3を過ごす学校は、ワクワクする場所であると同時に、安心して学校生活を送れる場所である必要があります。
- ・そこで、家のように居心地がよいと感じられるベンチ、カウンター、ソファなどの家具を設け、子どもたちが心を落ち着かせてリラックスしたり、自習ができる空間をつくります。併せて、明るく清潔なトイレや洗面所も整備します。
- ・様々な理由で教室に入りづらさを感じている児童・生徒が、安心して過ごすことができるサポートルームや不安や悩みを抱えた際に相談できる場など、教室以外の場所で自分に合ったペースで学習・生活できる学校内の新たな居場所となる空間を設けます。
- ・校舎における木材利用は、生活空間としての学校に温かみ、ぬくもり、落ち着き感などを与えることから、内装や家具などに、県産材を中心とした木材を積極的に活用していきます。



写真4 居心地のよい空間づくりの例



写真5 内装の木質化の例

〈登下校時の安心安全の確保〉

学校に通う際の登下校時の安全確保は何より優先すべきことであり、保護者の皆様や普段から子どもたちを見守っていただいている地域の皆様にとっても Well-being となる、安心できる通学環境は欠かせません。そのため、あらゆる手段で子どもたちの通学条件を整備します。

- ・保護者や地域の協力も得て、登下校時の通学路の危険箇所を把握し、道路や歩道の改修、警察などの関係機関と連携して安全対策を実施します。

- ・通学手段については、徒歩や自転車に加え、遠距離通学者へは、スクールバスを基本とする他、既存の公共交通や地域の輸送資源をフル活用した確保方策や通学支援を検討します。

〈学童保育室について〉

保護者の就労などの理由で放課後に学童保育室を利用している児童の割合は、現在約3割となっています。また、市内全学童保育室が学校の校舎内を含め、敷地内に設置されています。児童が放課後の時間を安全・安心に過ごすための居場所の確保は、保護者の Well-being を向上させるために重要であり、新校の開校後も引き続き学童保育のニーズに対応します。

- ・タイムシェア型の学童保育室を新校に設置するとともに、既存の学童保育室を活用するなど、地域における受入体制を確保します。
- ・児童の移動手段や保護者のお迎えの負担などを考慮しながら、具体的な受入れの方策を検討します。

〈地域との連携について〉

再編により地域から学校の機能がなくなる地域が生じます。子どもたちにとって、保護者以外の地域の大人たちと触れ合いながら、多くの体験をすることは、多様な学びの機会を確保するために欠かせないものです。また、地域の皆様にとっても、子どもたちの様子を見ながら知識や経験を伝えることに喜びを感じていただき、Well-being につなげることができるものと考えます。そのため、新校における地域との交流学習や学校運営に対する地域の協力体制などの方策を検討します。

- ・新校では、子どもたちの探究型の学びの中で地域の協力をいただく取り組みを進めます。
- ・学校運営協議会や学校応援団についても、これまでと同様に学校運営に対する協力をいただけるよう組織の構成や活動の仕組みについて整理します。

〈教職員の働き方について〉

学校の小規模化の影響だけでなく、求められる役割が増大してきたことに伴い、教職員の多忙化が全国的な問題となっており、心身の故障による離職や志望者の減少など、教員の就業環境は悪循環が続いています。本来、授業や行事、課外活動など、教員が子どもたちと向き合う時間を最大限確保する必要があり、その実現により、多様な個性をもつ子どもたちへきめ細かい対応が可能になります。

子どもたちの学びを支えるという教員本来の役割を果たすことのできる余白の創出は、教員のやりがいに直接つながる、まさに Well-being の向上となります。そこで、教員の働き方改革につながる取組みについても、再編を機に大胆に進めます。

- ・部活動の地域展開を段階的に進め、教員の意向に沿った多様な指導体制を整備します。

- ・教員以外が担うべき業務については、専門の有資格者の他、施設の維持管理を担う人材を確保し、教員が本来業務に専念できる環境を整備します。

トピックス1

【アンケート調査の概要】

これからの学校で学びたい（学ばせたい）こと、必要となるスペースや機能について

本基本構想の作成に当たり、Bブロックの通学区域の小・中学校に通っている児童生徒とその保護者や当該通学区域にお住まいの地域住民の皆様に加え、当該小・中学校に勤務している教職員を対象にアンケート調査を実施し、ニーズ把握を行いました。

ここでは、それぞれの質問に対して回答数が多かった上位3つを紹介します。（調査結果の詳細については、資料編（64～75ページ）参照）

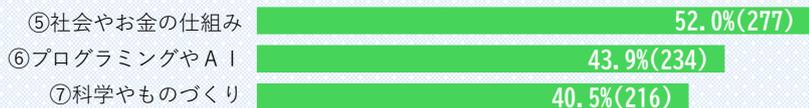
〈これからの学校でどのようなことを学んで（学ばせて）みたいですか〉（3つまで選択）

- ①科学やものづくりなど、未来につながる学び
- ②英語を使って海外の人と交流したり、世界のことを知る学び
- ③地域や歴史を知ったり、見たりすることで、大切に作る心を育てる学び
- ④環境を守るために、地球のことを考える学び
- ⑤社会やお金の仕組みを知ったり、これから役立つ知識を身につける学び
- ⑥プログラミングやAIについて知り、時代に合った技術を身につける学び
- ⑦その他

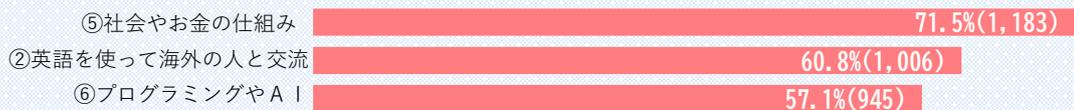
〈小学生の結果〉回答数：1,269件



〈中学生の結果〉回答数：533件



〈保護者・地域住民の結果〉回答数：1,654件



〈教職員の結果〉回答数：196件



- ・「科学やものづくりなど、未来につながる学び」が、小・中学生で上位となっています。
- ・「プログラミングやAIについて知り、時代に合った技術を身につける学び」が、小・中学生、保護者・地域、教職員いずれも上位となっています。
- ・「社会やお金の仕組みを知り、これから役立つ知識を身につける学び」が、中学生、保護者・地域、教職員に選ばれており、中学生及び保護者・地域の中で1位となっています。
- ・この他、保護者・地域及び教職員は、「英語を使って海外の人と交流したり、世界のことを知る学び」を重視しています。

トピックス1のつづき

【児童生徒向け】

〈新しい学校に、どんな部屋やスペースがあったらいいと思いますか〉（3つまで選択）

- ①明るくて、広い教室
- ②調べたり、友だちと話し合っ、学習できる場所
- ③みんなの前で発表できる広い場所
- ④おもしろい実験や工作をして学べる場所
- ⑤いろいろな学年や地域の人と交流できる場所
- ⑥きれいで気持ちよく使えるトイレ
- ⑦心を落ち着かせたり、リラックスできる場所
- ⑧気軽に先生などに相談できる場所
- ⑨その他

〈小学生の結果〉



〈中学生の結果〉

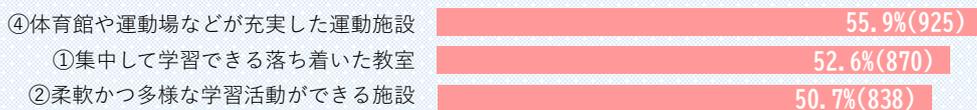


【保護者・地域、教職員向け】

〈再編後の学校に備えてもらいたい施設や機能は何ですか〉（5つまで選択）

- ①集中して学習できる落ち着いた教室
- ②柔軟かつ多様な学習活動ができる施設
- ③明るく広々とした開放的な空間
- ④体育館や運動場などが充実した運動施設
- ⑤ゆとりを感じられる談話コーナーや生活空間
- ⑥学びへの意欲を刺激する展示設備や発表スペース
- ⑦バリアフリー対応の設備
- ⑧科学やものづくりを楽しむことができる教室
- ⑨探求的な学びを促進する図書館やメディアセンター
- ⑩校舎全体の ICT 設備・ネットワーク環境
- ⑪再編前の学校の歴史や文化を継承するスペース
- ⑫異学年や地域住民と交流できる空間
- ⑬防災・防犯に配慮した設備（安全確保）
- ⑭地域住民が利用可能な施設としての機能
- ⑮災害時の避難所として活用できる耐震・防災設備
- ⑯景観や環境への配慮を施した校舎(エコスクール)
- ⑰安心して相談できる場所（相談室などの環境）
- ⑱その他

〈保護者・地域住民の結果〉



〈教職員の結果〉



- ・小・中学生は、「明るくて、広い教室」や「調べたり、友だちと話し合っ、学習できる場所」を選択する割合が高く、この他、小学生は学んでみたいことと連動して「おもしろい実験や工作をして学べる場所」を、中学生は「心を落ち着かせたり、リラックスできる場所」を求めているようです。
- ・保護者・地域及び教職員は、「集中して学習できる落ち着いた教室」や「体育館や運動場などが充実した運動施設」を選ぶ割合が共に5割を超え、こうした施設を重視していることが分かりました。

第3章

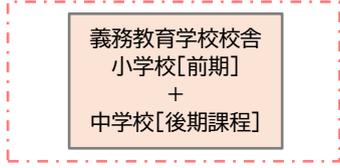
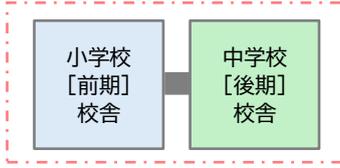
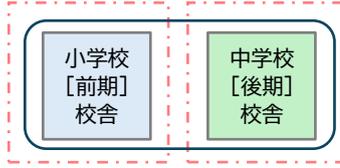
施設規模等の検討



1 施設形態の検討

新校の整備を行うに当たり、施設形態や規模を把握する必要があります。

再編計画〈個別編〉において、施設一体型の義務教育学校を設置することを示していますが、改めて「①施設一体型」、「②小中隣接型」、「③小中分離型」の3つの種類の施設形態について、比較検討を行いました。

施設形態	①施設一体型	②小中隣接型	③小中分離型
イメージ			
概要	小学校と中学校の機能が物理的に同一施設内にある	同一敷地内に小学校・中学校校舎を別棟で設置し、渡り廊下などで接続している	小学校・中学校が別敷地で、義務教育学校としての教育活動を行う際、連携を図る
整備方法	新設または改築	既存校舎+増築	改修
特徴	<ul style="list-style-type: none"> ●小中一貫教育を実践する上で、前期課程・後期課程相互の連携や交流などが促進されるとともに、相互乗り入れ授業を円滑に行うことが期待できる ●中学校段階への進学が自然な流れとして受け入れられ、環境の変化への不安が軽減される ●教員が義務教育9年間を見通した指導が行いやすくなるとともに、小・中学校の教職員同士の連携が密になる 	<ul style="list-style-type: none"> ●小学校と中学校それぞれの独自性が保たれ、年齢や発達段階に応じた教育環境を提供できる ●小・中学校のそれぞれの校舎が近距離にあるものの、小・中学校の教職員が連携を深めていくために施設面で工夫が必要 	<ul style="list-style-type: none"> ●校舎や敷地が物理的に離れているため、小中一貫教育を実践する上で、各校舎間で連携を十分に図る必要がある

「施設一体型」は、小・中学校の教員同士がより円滑に連携を図ることができることから、義務教育学校における教育方針や目標を共有しやすくなります。これにより、学校としての一体感が生まれ、9年間における一貫した指導が可能になります。

また、前期課程、後期課程の子どもたちが、9年間を通して同じ施設環境で学ぶため、中学校段階への負担を軽減し、安心感を保ちながら成長していくことが期待できます。

そのため、Bブロック新校の施設形態は「施設一体型」が望ましいと考えます。

2 施設規模の設定

新校開校時における児童生徒数、学級数及び校舎等の延床面積について検討しました。

なお、令和12年度の児童生徒数は、東小の一部、南小、埼玉小、下忍小、忍小、太田小、忍中、行田中、埼玉中、太田中のこれまでの児童生徒数の推移や令和7年度時点の住民基本台帳を基に推計しています（5ページに示すとおり、西小・忍中の通学区域に居住する児童生徒は全て西中学区に通学するよう通学区域を変更するため、当該区域に居住する児童生徒はBブロック新校の対象としていません）。

(1) 新校開校時（令和12年度）における児童数及び学級数の見込み

〈普通学級〉

学年	前期課程						後期課程			合計
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	
人数	152人	152人	169人	151人	162人	198人	186人	201人	231人	1,602人
学級数	5	5	5	5	5	6	6	6	7	50

〈特別支援学級〉

学年	前期課程		後期課程		合計
	知的	情緒	知的	情緒	
人数	31人	28人	15人	15人	89人
学級数	4	4	2	2	12

- 普通学級の学級数は、前期・後期課程ともに1学級35人で算出
- 特別支援学級の学級数は、1学級8人で算出

【参考】新校における学童保育室の受入規模

学年	1～6年生
人数	約200人
室数	5

※地域の学童保育室の受入れ人数：約100人を想定

(2) 校舎等の延床面積（予定）

〈諸室リスト及び面積〉

		室名称	1室面積	部屋数	面積 (㎡)	備考
前期課程 普通教室等	学年 コモンズ	普通教室	90	10	900	1、2年生
		普通教室	72	21	1,512	3～6年生
		特別支援教室	36	8	288	
		通級指導教室	72	2	144	ことば1、情緒1
後期課程 普通教室等	学年 コモンズ	普通教室	72	19	1,368	7～9年生
		特別支援学級	36	4	144	
		通級指導教室	72	1	72	情緒1
小計：A					4,428	

室名称		1室面積	部屋数	面積 (㎡)	備考	
特別教室	STEAM commons	理科室	108	3	324	サイエンスラボ
		理科準備室	36	3	108	
		家庭科室	108	2	216	キッチンスタジオ
		家庭科準備室	36	2	72	
		図工室	108	2	216	アートアトリエ
		図工準備室	36	2	72	
		美術室	108	1	108	
		美術準備室	36	1	36	
		技術室	108	2	216	クラフトステーション
		技術準備室	36	2	72	
		音楽室	108	3	324	ミュージックスタジオ
		音楽準備室	36	3	108	
	ライ ニング ・ コ モ ン ズ	図書室	432	1	432	
		集会室	120	1	120	
異学年交流広場		150	1	150		
小 計 : B				2,574		
管理諸室	教職員 コ モ ン ズ	職員室	340	1	340	
		校長室	36	1	36	
		事務室	36	1	36	
		印刷・教材室	55	1	55	
		相談ラウンジ	40	1	40	
		会議室	100	1	100	
		職員用更衣室	36	2	72	
		進路指導室	30	1	30	
		用務員室	45	1	45	
		保健室	72	2	144	
		教育相談室	30	2	60	
		職員用・来客用トイレ			50	男女別
小 計 : C				1,008		
その他	地域 コ モ ン ズ	多目的室	80	5	400	ランチルーム、学童保育 室兼用
		スタッフルーム	30	2	60	
		地域連携室	35	1	35	
		PTA 室	35	1	35	
		学校開放倉庫	30	1	30	
	昇降口				300	
	児童会室・生徒会室		36	2	72	
	児童・生徒用トイレ		60	9	540	男・女・誰でもトイレを各 学年1カ所ずつ
			45	2	90	
	更衣室		40	2	80	男女別
	放送室		36	1	36	
給食搬入室		50	1	50		

室名称		1室面積	部屋数	面積(m ²)	備考	
	配膳室	50	2	100		
	倉庫・備品室			適宜		
	少人数教室	36	4	144		
	サポートルーム	36	1	36		
	教師コーナー	24	9	216	教材置場兼用	
	オープンスペース			1,800		
	共用トイレ	30	1	30		
	その他共用部			2,278	廊下、階段、エレベーターなど	
小計：D				6,332		
校舎合計：E = (A+B+C+D)				14,342		
屋内運動場 (体育館)	スポーツ コモンズ	メインアリーナ	1,500	1	1,500	
		ステージ	100	1	100	
		器具庫1	90	1	90	
		器具庫2	70	1	70	
		器具庫3	40	1	40	
		調整室	50	1	50	
		避難所防災倉庫	30	1	30	
		トイレ	35	1	35	男女別
		更衣室	40	2	80	
		体育館ホワイエ			180	
		サブアリーナ	330	1	330	
小計：F				2,505		
校舎、屋内運動場合計：E+F				16,847		
校庭 他	グラウンド			適宜	メイングラウンド、サブグラウンド	
	屋外トイレ	20	1	20		
	駐輪場			400		

今後、設計における検討の中で、室数、面積等は変更となる場合があります。

(3) 諸室の検討

諸室について整備に向けた考え方を次のとおり示します。

ア 普通教室

- ・グループ学習など多様な学習形態を想定して、隣接するオープンスペースと連携しながら、机や椅子の配置が自由に変更できる十分な広さを確保します。
- ・自然光を採り入れるとともに空調設備を設置し、子どもたちの学びをサポートする快適な環境を整備します。

〈普通教室の面積〉



ここがポイント

PICK UP!!

アンケートで「新しい学校にどのようなスペースや機能が必要か」という質問に対して、

- ・「明るくて、広い教室」は、小学生1位、中学生3位となっています。

普通教室の面積は、 $8.0\text{m} \times 8.0\text{m} = 64 \text{ m}^2$ で設定されていることが多く、タブレット端末などの活用や多様な活動を展開する際、空間的な余裕がありませんでした。

また、基本構想作成に当たってのアンケート調査では、小・中学生ともに学校で好きな場所、より良くしたい場所を「自分のクラスの教室」と回答する割合が最も高い結果となりました（65～68 ページ参照）

こうした状況を踏まえ、新校を整備するに当たり、普通教室は **8.0m×9.0m 以上の面積で整備**するとともに、多様な学びのスタイルや時代の変化に合わせた教育活動に柔軟に対応できるよう、隣接するオープンスペースと連携を図りながら可動式の間仕切りや家具を設置する他、ロッカーや充電保管庫などの収納スペースを十分な広さで確保します。

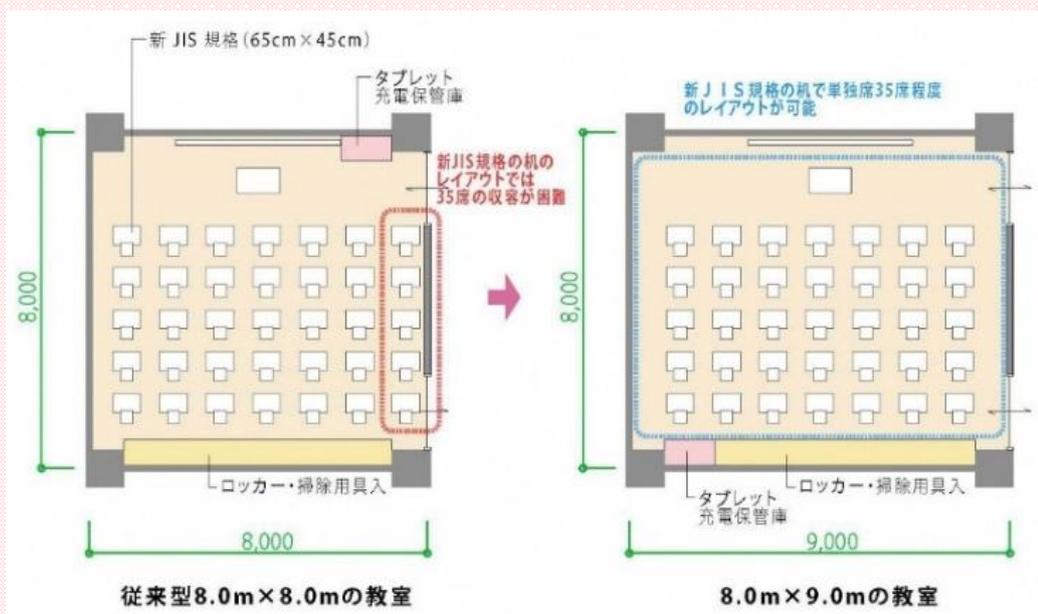


図 12 普通教室の大きさ(左：8m×8m、右：8m×9m)

イ 特別支援教室

- ・インクルーシブな教育環境実現のため、学年共通に含まれる配置を計画します。
- ・障がいの状態や特性に応じ、光、音などに留意し、静かで落ち着いた環境を確保します。

ウ 通級指導教室

- ・前期課程に言語、発達それぞれの通級指導教室を、後期課程に発達の通級指導教室を設置します。なお、各指導教室は、職員の執務スペース、保護者との面談スペース、通級者の活動スペースを確保します。

エ 図書室

- ・児童生徒のさまざまな学習を支援する学習センター的機能を持たせ、STEAM共通と連携して学びの可能性を拡げるとともに、子どもたちがリラックスして過ごせる居場所としても整備します
- ・階段教室など、児童生徒の発表の場としてのスペースを確保し、さまざまなプレゼンテーションや交流ができる場とします。

オ 特別教室

- ・家庭科室や理科室などの特別教室を前期課程・後期課程が可能な限り共用して使用することを前提として、各室についてそれぞれの利用実態に合わせた整備を進めていきます。
- ・実験や実習などの学習活動を行う上で、利用者の安全が確保できるスペースを確保するとともに、教材や機材を適切に管理・収納できる準備室や収納庫を設けます。
- ・各教室の前に教科メディアスペースを設け、関連するメディア・図書や児童生徒の作品を展示し、休み時間や放課後など、いつでも興味を持って学びを深めることができる場を設けます。

カ 職員オフィス

- ・前期課程、後期課程の教職員が情報共有を円滑にできるよう1室とし、授業準備に向けた作業スペースや打ち合わせスペースを確保します。
- ・教職員が気持ちよく働けるよう、教員ラウンジ、更衣室などを整備します。

キ 校長室・事務室

- ・書類を整理・管理できる十分な収納を確保するとともに、保護者やその他訪問者の立ち入りが把握しやすい位置に設置します。

ク 多目的室

- ・学習活動をはじめ、地域の皆様との交流など多様な目的で利用できるよう自由度の高い空間として整備します。また、放課後には学童保育室として利用することを検討します。

ケ 昇降口

- ・児童生徒が利用する昇降口は、外履きと内履きを切り替えるゾーンを明確にして、施設内の清潔さを保ちます。

コ 廊下

- ・多様な教育活動に対応するとともに、交流の場や居場所、さらには展示ギャラリーとなるよう広いスペースを確保し、ベンチ、掲示板、自習ができるカウンターなども設置します。

サ 階段

- ・1～9年生が共用することを想定し、低学年に合わせて、誰もが上り下りしやすい高さに設定したつくりとします。

シ トイレ、洗面所（洗口所）

- ・学年の成長段階に応じた寸法で設置し、明るく快適で、誰もが利用しやすい空間とします。また、多目的トイレを各階に設置します。

ス 屋内運動場

- ・前期課程、後期課程がゆとりをもって活動ができるよう、アリーナ部分は十分な広さを確保する他、剣道や柔道などの武道ができるスペースも設けます。
- ・体育館を分割して利用できるよう大型電動間仕切の設置を検討します。これにより、同じ時間帯に1クラスあるいは1団体のみで使用するだけでなく、複数のクラスや団体に併用することも可能となります。
- ・学校や地域での行事に備え、ステージを設けます。
- ・体育などで使用する教材（ボールなど）を収納する器具庫を設置します。
- ・部活動や地域開放における使用や避難所となることを想定し、更衣室やトイレを整備します。

セ 屋外運動場

- ・1～9年生の体力差や児童生徒数を考慮し、グラウンドはメイングラウンドとサブグラウンドを設けます。メイングラウンドは、200mトラック及び100m直線コースを設けるとともに、サッカー、野球などが十分できる広さを確保します。また、サブグラウンドは150mトラック、50m直

線コースを設けるとともに、例えばジャングルジム、雲梯、低鉄棒、砂場などの遊具を設置することを検討します。

- ・グラウンドには、外部運動器具用倉庫、外部トイレ、水場なども設けます。

ソ プール

- ・令和8年度より全ての小学校で水泳授業の民間委託を行うことから、Bブロック新校においてプールは設置しないこととします。

タ 駐車場

- ・十分な駐車スペースを確保します。
- ・学校敷地内における徒歩または自転車通学者の動線に配慮した整備を行います。
- ・自転車置き場と駐車場は一体化せず、それぞれ独立した安全な場所に設けます。
- ・スポーツコモンズや地域コモンズにアクセスしやすい配置とします。
- ・スクールバスや自家用車などを利用した送迎時に、安全に乗降できるよう、ロータリーなどの乗降スペースを整備します。

(4) 諸室の環境について

- ・教室や体育館などには空調を設備し、季節や天候に左右されることなく、施設内の温度を安定させ、児童生徒が健康的に集中して教育活動が行える環境を整えます。
- ・電力消費や運用時のコストを削減し、環境負荷を軽減するため、外壁、サッシ等開口部、屋根、床等については断熱性能の高い素材を使用します。
- ・自然採光を取り入れつつ、諸室ごとに求められる用途や目的に応じた最適な照度を確保します。その際は、省エネルギーに配慮し、LED照明設備やセンサー式照明を採用します。
- ・自然通風を促す風の道を確保するため、窓やドアの配置を工夫するとともに、光庭などによるエコボイド（通風のための竪穴）の設置を検討します。
- ・授業時間について、現時点では前期課程が45分、後期課程が50分としていることから、開始時及び終了時にチャイムを鳴らすタイミングにずれが生じることが想定されます。そのため、例えば「フロアごとにチャイムを鳴らすタイミングを設定する」、「チャイムの音色を変える」、あるいは「ノーチャイムにする」といったことを検討し、工夫して運用していきます。
- ・緑化については、敷地境界部分は原則として高木などを植樹し、緑豊かな景観となるよう整備します。グラウンドにも夏季の運動環境を考慮し、日影を形成する樹木をバランスよく配置します。また断熱効果、環境教育・緑化美化に資するものとして、屋上緑化を検討します。

3 階数の検討

文部科学省の小学校・中学校施設整備指針では、「小学校は3階以下、中学校は4階以下とすることが望ましい」としています。このため、新校の校舎は、4階以下で計画します。

新校開校時には、普通教室として50学級分必要となる見込みです。低層階（平屋もしくは2階建て）とする場合は、施設が平面的に広がり、校内動線が長い平面配置となります。また、これにより建築面積が大きくなり、外部空間を十分に確保できないこと、基礎工事（杭工事）が増大することなどが、施設整備を行う上で課題となります。

そのため、コンパクトな配置による動線短縮などを考慮し、「3階建て」で計画することが望ましいと考えます。

トピックス2

【ワークショップの概要】

新しい学校への思いを形にしたワークショップ

本基本構想のコンセプトや新校の機能などを検討するため、児童生徒、保護者、地域の皆様の代表によるワークショップを令和7年12月から令和8年2月にかけて全3回開催しました。このワークショップでは、「ワクワクが止まらない学校って?」、「新しい学校への思いを形にしてみよう」、「みんなが考えたイメージを発表しよう」といったテーマを設定し、子どもグループ、大人グループそれぞれでグループワークに取り組みました。（詳細については、資料編（76～95ページ）を参照）

DAY1 令和7年12月21日

〈テーマ〉

- 子どもグループ：「ワクワクが止まらない学校って?」
- 大人グループ：「学校を設置する上で大切にしたいこと」

この日は、「新しい学校にあっという間と思う部屋や場所」、「これから学んでみたい（学んでほしい）こと」の他、子どもグループでは「今の学校のすきなところ」、大人グループは「地域と学校が関わる上で必要と思う施設や機能」について、メンバー同士で意見を出し合い、ふせんに書き込みながら考えをまとめていきました。

それぞれのグループから出た考えを一部紹介します。

子どもグループ		大人グループ	
学び	<ul style="list-style-type: none"> ・プログラミングやAIについて学びたい ・現代の政治や経済について深く学びたい ・社会で生きていく上で必要なことを学びたい 	学び	<ul style="list-style-type: none"> ・多様な生き方や価値観を学んでほしい
施設	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な人と交流できる場所がほしい ・リラックスできる場所がほしい 	施設	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちが多様な学習に使える施設や設備があるとよい ・地域に開かれたスペースが必要

トピックス2のつづき

DAY 2 令和8年1月12日

〈テーマ〉「新しい学校への思いを形にしてみよう」

1回目のワークショップでグループごとにまとめた内容を振り返り、その後、これからの学校に必要な教室、スペース及び機能などについて考え、膨らませたイメージを模造紙に表現するグループワークを行いました。参加者は、メンバーと協力しながら色画用紙を自由に切り貼りし、マーカーなどで絵や図を描くなどして、新しい学校への思いを形にしていきました。

子どもグループ、大人グループからいただいた主な提案を一部紹介します。



写真6 新しい学校への思い形にするグループワークの様子(子どもグループ)

グループ	子ども	大人
テーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の好きなことを自由に学べる学校 ・家のように安心して過ごせる学校 など 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域とともに成長する学校 ・地域に開かれた学校
提案内容	<ul style="list-style-type: none"> ■ 図書館を中心に自習室やパソコン室を近くに配置するなど、主体的に学びを深められる学習環境を整備する ■ 異学年交流スペースや地域とつながる場が必要 ■ リラックスできる空間がほしい など、「学び」、「交流」、「安全」、「快適さ」を意識した提案	<ul style="list-style-type: none"> ■ 図書室を中心とした交流空間を整備 ■ 地域が利用できるコミュニティスペースを設置する ■ 体験活動の充実、防災機能を備えた施設整備など、子どもと地域が一体的に学びを広げていくことができる学び舎となるような提案

DAY 3 令和8年2月11日

〈テーマ〉「みんなが考えたイメージを発表しよう」

この日は、子どもグループと大人グループが一堂に会し、お互いに新しい学校への思いを語り合い、その思いを共有しました。

全体的な傾向として、学校の中心にみんなが集い学習できる空間を配置し、その周りに学びを深めていくことができる諸室を置くといった提案が多く出ていました。

なお、ワークショップを通じて把握した、子ども・大人それぞれが求める学校像については、第2章における「学校を整備・運営する上での考え方」(13ページ)や後述する第4章における平面計画(ゾーニング)(41~42ページ)に反映しています。



写真7 新しい学校への思いを発表する参加者

第4章

新校の設置場所及び 配置・平面計画



1 敷地選定に係る諸要件の整理

新校の敷地については、児童生徒ができるだけ徒歩・自転車で通学できることを考えると、通学区域の中央付近であり、道路、公共交通機関などが整っているところが望ましいと考えます。

「個別編」で候補地とした「行田中学校の敷地（候補地ア）」及び「佐間地区内の新たな土地（候補地イ）」については、上記に示した条件を満たしていることから、この2つの敷地について、更なる比較検討を行い、最終的に新校の敷地を選定することとします。



図 13 両候補地の位置図

(1) 各候補地の敷地概要

ア 行田中学校の敷地（候補地ア）



図 14 行田中学校周辺の都市計画図



写真 8 行田中学校敷地の航空写真

表 4 行田中学校の敷地条件

住居表示	佐間3丁目3-8	面積	24,078 m ²	区域区分	市街化区域	用途地域	第一種住居地域
建ぺい率	60%	容積率	200%	防火指定	22条区域	絶対高さ制限	なし
高度地区指定	なし	地区計画	なし	壁面線等	なし	道路斜線	1.25a (20m)
隣地斜線	1.25a (20m)	北側斜線	なし	日影規制	4時間 2.5時間測定面4m ※高さ10mを超える建築物		

イ 佐間地区内の新たな土地（教育文化センター「みらい」南側）（候補地イ）



図15 教育文化センター「みらい」南側の都市計画図



写真9 教育文化センター「みらい」南側の航空写真

表5 教育文化センター「みらい」南側の敷地条件

住居表示	佐間3丁目	面積	38,200 m ²	区域区分	市街化調整区域	用途地域	無指定
建ぺい率	60%	容積率	200%	防火指定	指定なし	絶対高さ制限	なし
高度地区指定	なし	地区計画	なし	壁面線等	なし	道路斜線	1.50a (20m)
隣地斜線	2.5a (31m)	北側斜線	なし	日影規制	5時間 3時間 測定面4m ※高さ10mを超える建築物		

2 新校の敷地選定

第3章で検討した学校の施設形態や規模に加え、上記に示した敷地条件を踏まえつつ、次の①から④までの視点で比較検討を行い、新校の敷地選定を行います。

【新校の敷地選定に当たっての視点】

- ① **ゆとりある教育活動**：校舎・グラウンドが配置でき、ゆとりをもった教育活動ができること
- ② **周辺環境**：児童生徒の通学における安全性が保たれる周辺道路・交通状況であること
- ③ **工事期間中における教育活動への影響**：工事進行中も教育活動に大きな影響を及ぼさないこと
- ④ **災害時の安全性**：災害対策上、安全なエリアにあり、周辺住民が避難しやすい場所にあること

表6 各候補地の比較表

比較検討の視点	行田中学校の敷地（候補地ア）		「みらい」南側（候補地イ）	
敷地面積	24,078 m ²		38,200 m ²	
ゆとりある教育活動	校舎、体育館など配置可能だが、校庭が候補地イと比べ狭いため、校庭での活動（体育、部活動など）の際、工夫が必要	△	校舎、体育館など配置可能で、校庭も十分な広さを確保できることからゆとりある教育活動が可能	○
周辺環境	【北側】佐間公民館が隣接 【東側】新忍川に面している 【その他】住宅に囲まれている 【道路幅員】W=3.1m~5.6m	△	【北側】教育文化センター「みらい」が隣接 【南側】農地 【その他】住宅などに隣接 【道路幅員】W=2.42m~7.5m	○
工事期間中における教育活動への影響	工事による音や校庭での活動に制約が生じるなど、教育活動に影響あり	×	新しい敷地であるため、影響なし	○
災害時の安全性	【地震ハザードマップ】 地域総合危険度3※ 【洪水ハザードマップ】 浸水深0.5m~3m（1階床上浸水） 周辺道路において冠水実績あり	△	【地震ハザードマップ】 地域総合危険度3※ 【洪水ハザードマップ】 浸水深0.5m~3m（1階床上浸水）	△

○：良い △：普通 ×：課題あり で評価

※ 5段階で5が最も高い

前頁の表に示した視点で比較検討を行った結果、候補地イの教育文化センター「みらい」南側を新校の敷地とします。

候補地イが候補地アより優れている点を以下のとおり示します。

- ・敷地面積が広く、ゆとりある教育活動を実施することが可能となる
- ・教育文化センター「みらい」に隣接しており、市立図書館や文化ホールなどと有機的に連携することで、多様な教育活動を実践することが期待できる
- ・幅員が大きな道路に接しており、児童生徒の登下校時において、スクールバスを運行する際、より安全性を確保できる
- ・工事期間中において、子どもたちの教育活動に影響が出ない

3 新校の配置計画

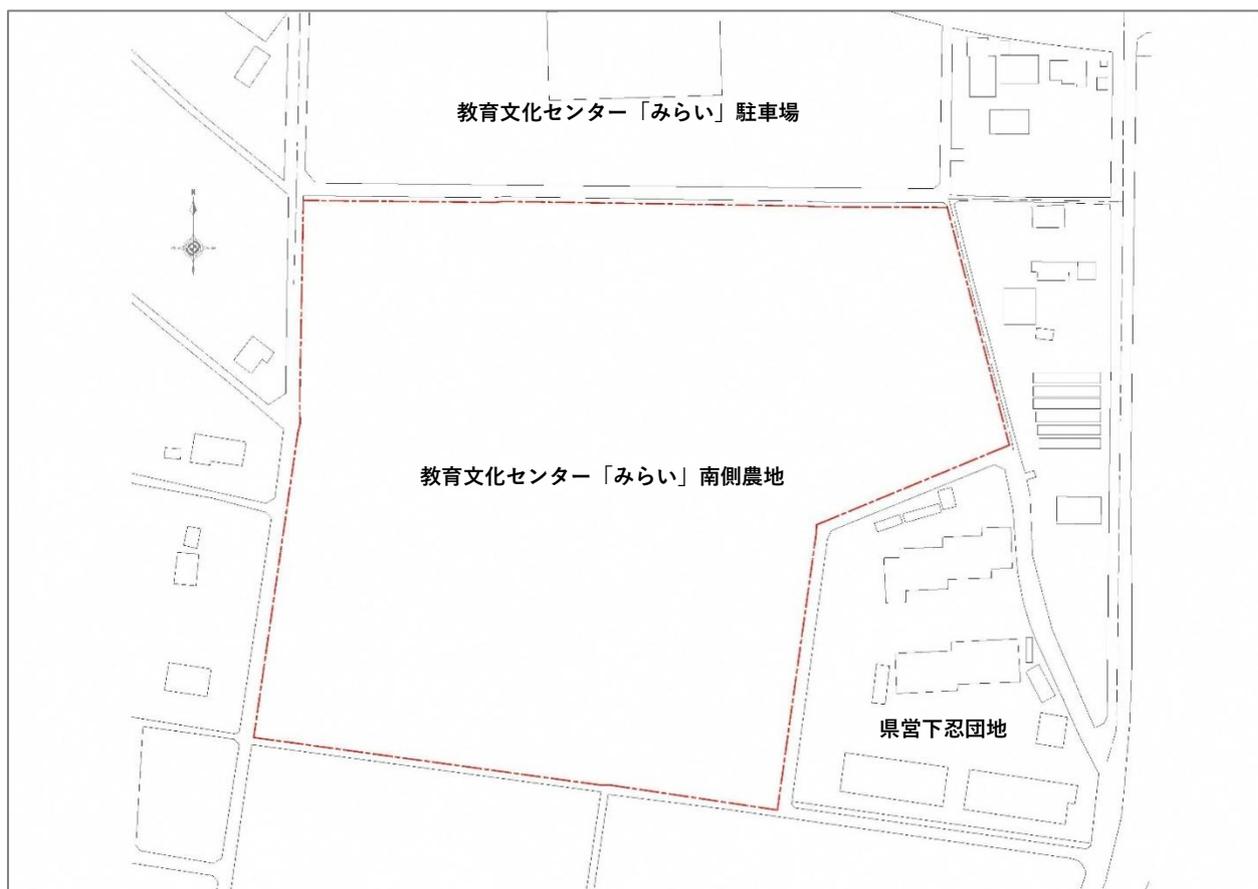
(1) 配置の検討

新校の敷地（教育文化センター「みらい」南側）における校舎、運動場等の配置計画について、次の①から⑤までの視点で検討を行うこととします。

【配置計画の検討に当たっての視点】

- ① 児童生徒が通学しやすいように、正門付近に昇降口およびバスロータリーを設置すること
- ② グラウンドはできるだけ広く確保し、低学年用グラウンドも設置すること
- ③ 歩車分離により通学路と交差しない形で駐車場を設置すること
- ④ 地域利用を考慮し、駐車場からスポーツ施設、グラウンドへアクセスしやすくすること
- ⑤ 日照採光が十分に確保できること

図16 新校の敷地（教育文化センター「みらい」南側）



(2) 配置計画のイメージ

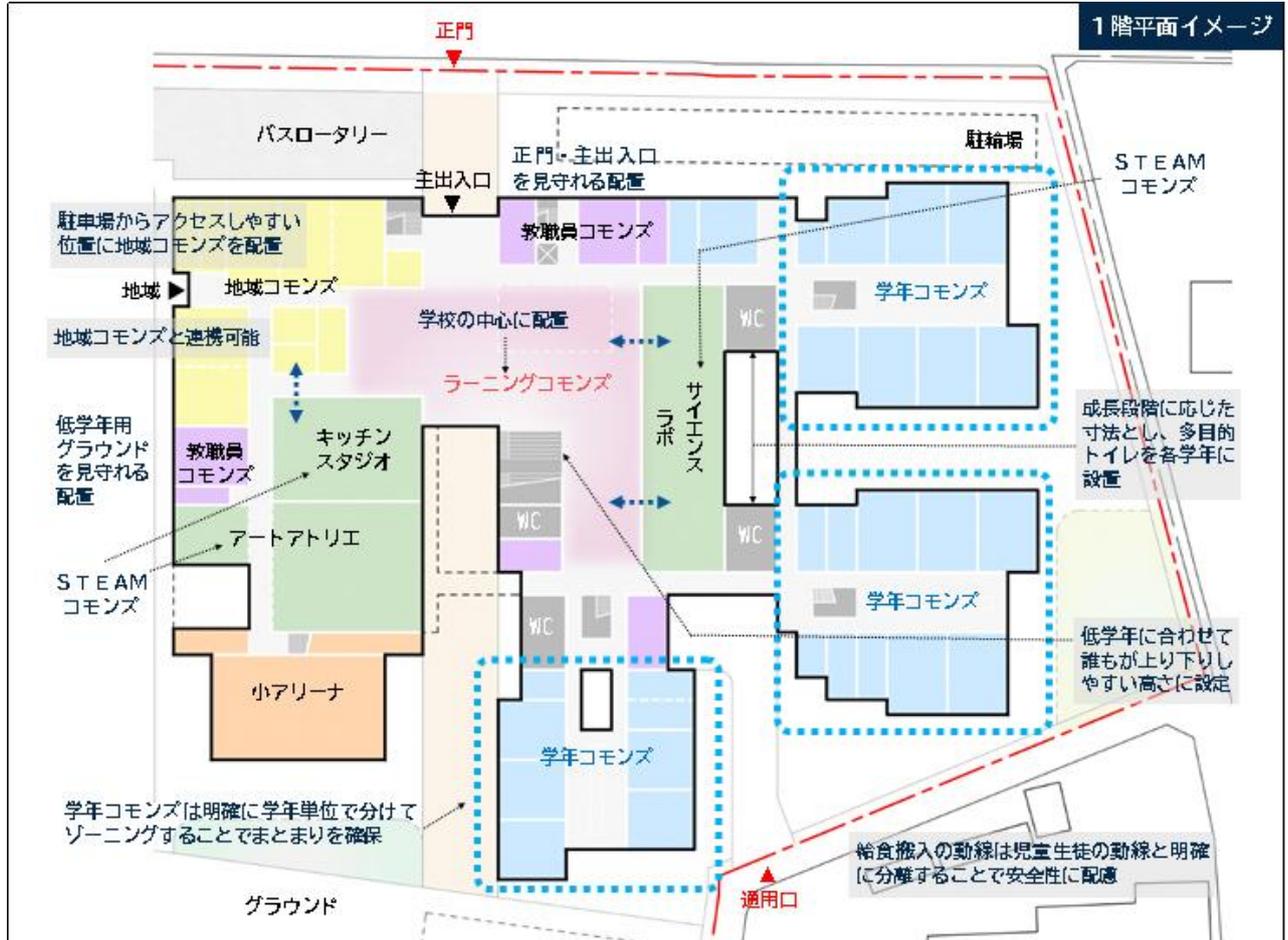
「児童生徒の居住分布を踏まえた効率的な校舎への動線」、「グラウンドの形状や位置」、「日照採光の確保」、「教育文化センター『みらい』との有機的な連携」といった視点で検討した結果、下図のとおりに北側に校舎、屋内運動場、駐車スペース及びバスロータリーをまとめ、南側にグラウンドを配置する計画とします。

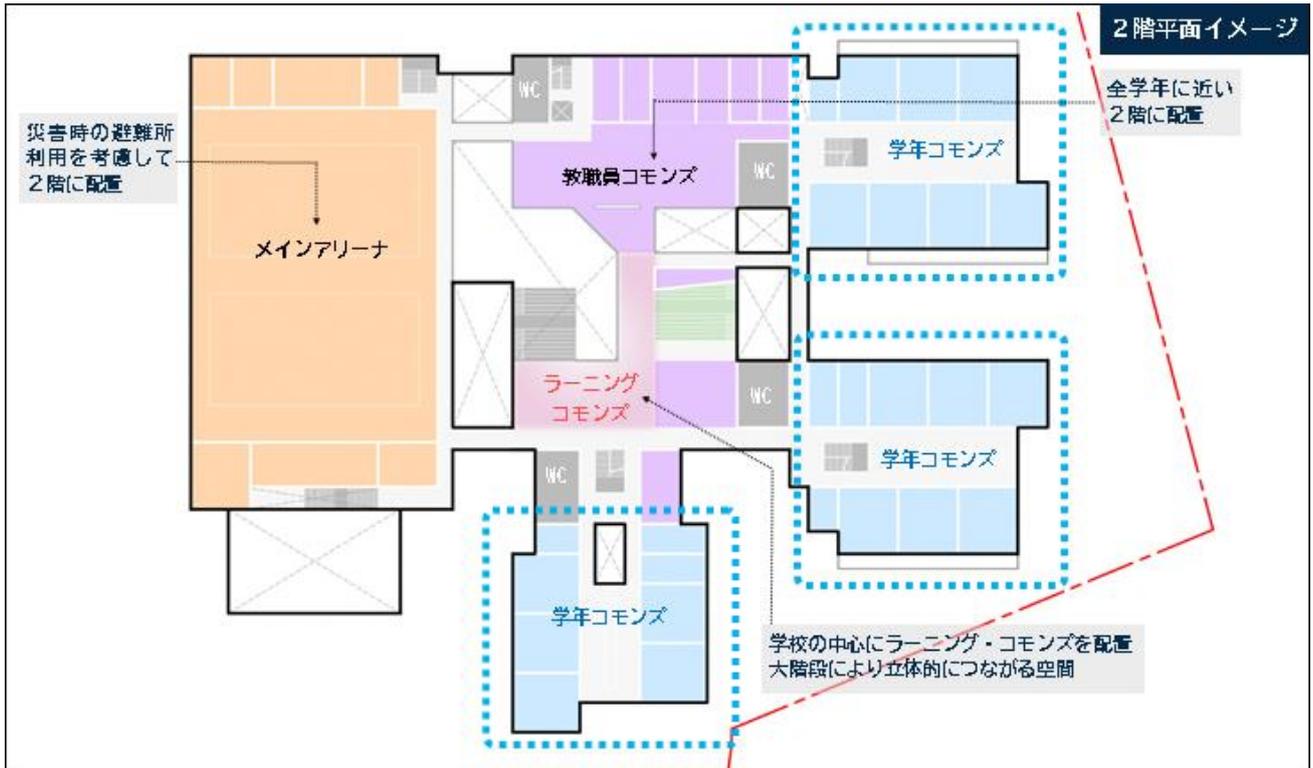


4 新校の平面計画（ゾーニング）

第2章で述べた commons の考え方や子どもたちの発達段階、動線及び諸室の特性などを踏まえるとともに、本構想作成に向けて開催したワークショップにおける参加者の思いなど（76～95 ページ）を参考に、以下のとおり平面計画を構成していきます。

なお、具体的な校舎の形や諸室の配置については、設計時に検討することとします。





第5章

施設整備方針



1 防犯・安全計画

新設する学校では、すべての関係者が安心して過ごすことができる環境を目指します。ここでは、防犯や安全面を重視した計画を以下の通り進めます。

(1) 防犯計画

学校の敷地や建物における安全対策を以下の手法で進めていきます。

- ・ **視認性の向上**：死角をできる限り少なくし、細く暗い通路がない設計を目指します。例えば、廊下は広く明るい空間にし、教職員が児童生徒を見守りやすいような配置を行います。
- ・ **職員の迅速な対応が可能な施設配置**：職員用スペースや保健室などの管理諸室は、学校全体を見渡しやすい場所に配置します。不審者の侵入や児童生徒の異変に気づいた際には、速やかに対応できる設計とします。
- ・ **地域利用ゾーンの区分**：地元の方々の学校利用も想定し、地域利用エリア（例：スポーツ commons、地域 commons）と児童生徒が使う学校ゾーンを明確に区分します。この際、防犯性を考慮し、適切なセキュリティ対策を行います。
- ・ **目の届く環境づくり**：職員や地域の大人による「見守りの視線」を確保するため、廊下や教室内でも常に視界が広がる設計とします。加えて、学校内外に防犯カメラや警備システムを効果的に配置し、安全性を向上させます。
- ・ **ICT を活用した防犯システム**：防犯カメラやインターホンに加え、侵入検知用の扉開閉センサーや人の動きを感知する空間センサーなど、最新技術を活用した設備を導入します。これにより、不審な動きや緊急事態への迅速対応を実現します。
- ・ **入退室管理システム**：地域利用エリアや職員エリアなどのセキュリティ区画にカードリーダーや電気錠を設置し、関係者以外が誤って侵入することを防ぎます。この仕組みにより、物理的な安全をさらに強化します。

(2) 安全計画・事故防止計画

- ・ **スムーズな避難体制**：災害発生時には、児童生徒が校庭や広い空間へ迅速に移動できるよう、避難計画を徹底します。具体的には、学校建物の階段から敷地外への出口を近接させ、避難経路を分かりやすく設計します。また、特別支援教室や保健室等もすぐに避難できる場所に配置します。
- ・ **快適で安全な動線づくり**：各学年 commons から避難階段までは、十分な幅員を確保したオープンスペースを設け、慌てず移動できる環境を整えます。
- ・ **物理的な安全確保**：事故防止のため、窓ガラスには破損防止加工を施します。また、衝突防止用のクッション材の使用や、階段・吹き抜け部分での転落防止策を講じます。さらに、鋭角部や突起物をなくすことで、子どもの目線で安全性を確保します。

(3) ユニバーサルデザイン・バリアフリー

新設する学校では、すべての人が施設を快適に利用できるよう配慮したデザインを採用します。

「ユニバーサルデザイン」の考えを取り入れることで、誰もがアクセスしやすい環境を提供します。

- ・**段差をなくした空間**：施設内外で段差を可能な限り減らし、スムーズに移動できるようにします。
例えば、昇降口やメインエントランスは視認性が高い位置に設け、エレベーターもアクセスしやすい場所に配置して、どのフロアにも円滑に移動できる計画とします。
- ・**広い通路と車いす対応**：車いす利用者とのすれ違いや安全な移動ができるよう、廊下や共有スペースは十分な幅員を確保します。また、屋外スペースへの移動も段差をなくし、庇（ひさし）を設置することで雨天時でも快適に利用できる設計とします。
- ・**分かりやすい案内表示**：初めて学校を訪れる方や見えづらさがある方にも配慮し、直感的で分かりやすい案内サインを施設内に表示します。
- ・**ユニバーサルデザイン 7 原則に基づいた整備方針**：以下の 7 つの基本原則に基づき、すべての方に安心・安全で使いやすい施設づくりを目指します。

① 公平に利用できること

年齢や性別、能力に関係なく、誰でも快適に利用できる施設を目指します。

② 使う上での柔軟性があること

さまざまな利用者のニーズに対応できる設計を進めます。

③ シンプルで直感的であること

操作や移動が複雑にならないよう簡単でわかりやすい空間設計を行います。

④ 情報がわかりやすいこと

案内板や教育機器なども明瞭で見やすい表示を採用します。

⑤ 誤操作に対する安全性が確保されていること

施設全体で安全性を重視します。特に機器や設備の使用部に配慮します。

⑥ 身体的負担が少ないこと

移動や操作で無理なく利用できる環境を整えます。例：軽い力で開閉できるドアなど。

⑦ アクセスしやすいスペースが確保されていること

駐車場や出入口付近にバリアフリー対応のスペースを設け、内部の動線も配慮します。

(出典：ノースカロライナ州立大学ユニバーサルデザインセンター)

2 防災計画

新校は、避難施設としての機能と学校施設としての機能の両面において、災害に強く、安全性を確保できる施設として計画します。

(1) 避難施設機能

- ・ 指定緊急避難場所および指定避難所となることが想定されるため、防災備蓄倉庫の設置を計画します。
- ・ 電力供給途絶時の対策として、非常用発電機設備の設置を検討します。
- ・ 太陽光発電などの自然エネルギーを、避難時に活用する計画とします。
- ・ 施設の一部を支援物資集積スペースとして活用します。
- ・ グラウンドは、トイレなどの仮設施設などのスペースとして活用を検討します。
- ・ 換気、照明、避難者のプライバシーの確保など、避難生活が良好に保たれるよう配慮します。
- ・ 避難ゾーンと学校ゾーンを分離可能な設計とし、学校の早期再開を容易にする動線を確保します。



(2) 地震対策

- ・ 建物の構造体は耐震性を確保し、非構造部材の耐震対策も徹底します。
- ・ ロッカーや書棚などの転倒などによる被害が発生しないよう、防止策を講じます。

(3) その他災害対策

ア 洪水対策

- ・ 洪水ハザードマップによると、想定される大雨（概ね 1000 年に 1 回程度の規模）の場合、利根川・荒川流域が氾濫し、佐間地区で 0.5m～3.0m 未満（1 階床上浸水）の浸水被害が発生する可能性があります。こうした状況を踏まえ、次の対策を講じます。
- ・ 2 階以上に避難所設営ができるよう整備します。
- ・ キュービクル、非常用発電機などの電気設備は、2 階以上に設置します。なお、防災備蓄倉庫は浸水しない箇所に設置します。

イ 火災対策

- ・ 施設全体は耐火建築物とし、火災が発生した際にも安全に避難できる施設とします。

3 環境配慮計画

新校は、気候変動（カーボンニュートラル）、資源循環（サーキュラーエコノミー）、自然環境（ネイチャーポジティブ）等に関する施策を推進する「第3次行田市環境基本計画」を踏まえ、エコスクールの整備を進めるとともに、公共建築物のZEB（ゼブ）化を考慮した環境配慮型施設として計画します。

(1) エコスクールの整備

ア エコスクールの理念：

エコスクールは、環境負荷の低減や自然との共生を考慮した学校施設であり、環境教育の教材として活用することを目的とします。

これにより、学校が児童生徒だけでなく、地域社会にとっての環境・エネルギー教育の発信拠点となり、地球温暖化対策の啓発や推進に貢献します。

イ 具体的な施策：

新エネルギー設備を設置し、太陽光発電、冷暖房、自然採光・通風、雨水利用、屋上緑化などの自然エネルギーの利用状況を「見える化」する仕組みを導入します。これらの設備を児童生徒の学びに活用するとともに、環境教育教材として地域における啓発活動にも生かします。

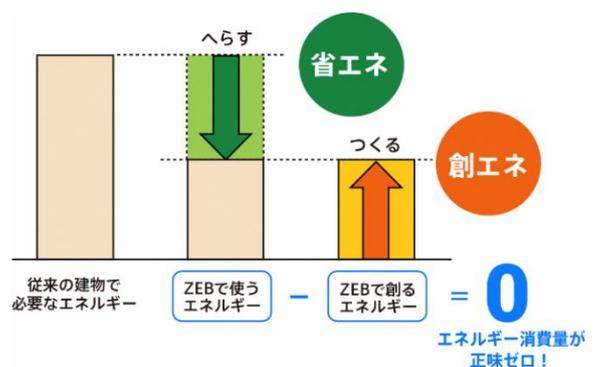


(2) 学校ZEB（ゼブ）化について

ア ZEBとは

ZEBとは、Net Zero Energy Building（ネット・ゼロ・エネルギー・ビル）の略称で、快適な室内環境を実現しながら、建物で消費する年間の一次エネルギーの収支をゼロにすることを目指した建物です。省エネを通じてエネルギー消費を削減し、創エネで使用分のエネルギーを補うことで、実質的なエネルギー収支をゼロにする仕組みを目指します。

図16 ZEBのイメージ



イ ZEBの段階的導入

現在、ZEBの実現・普及に向けて、次頁に示す4段階のZEB（ZEB Oriented、ZEB Ready、Nearly ZEB、ZEB）が定義されています。新校では、この段階を考慮して計画することとします。

図17 ZEBの段階（イメージ）



ウ 取組みの方針

「第5次行田市役所地球温暖化対策実行計画」では、地球温暖化対策の取組みの一貫として、建物の新築・改築の際にZEB化の導入を検討することとしています。

また、国の指針である「2050年カーボンニュートラル」において、「今後予定する新築事業については、原則ZEB Oriented相当以上とし、2030年度までに新築建築物の平均でZEB Ready相当となること」としています。したがって、次の方針で新校の整備を進めます。

- ・新校は、ZEB Ready以上の性能を目標とします。

(3) 景観計画

- ・候補地に挙げられている地域は、田園風景や緑地が広がり、住宅地と隣接している地域であり、埼玉古墳群にほど近く、遠くには秩父や群馬などの山並みを望むことができる優れた景観を有しています。そのため、この地域の特色を活かし、周辺景観と調和する施設計画が求められています。
- ・新校は、「行田らしさ」を体現し、地域のシンボルやランドマークとなる学校を目指します。近接する公共施設や周囲の景観と調和しつつ、存在感を際立たせる施設とするとともに、地域に根差した魅力的な空間を創造します。

4 構造計画

(1) 構造計画基本方針

ア 耐震性能

児童生徒が安心して利用できるよう、最新の耐震基準に基づいた設計を行います。建築構造体の耐震安全性の分類は「官庁施設の総合耐震・対津波計画基準（国土交通省大臣官房官庁営繕部、）平成25年」に基づき、次のとおりとします。

部位	分類	耐震安全性の目標
構造体	Ⅱ類	大地震動後、構造体の大きな補修をすることなく建築物を使用できることを目標とし、人命の安全確保に加えて機能確保が図られるものとする。
建築非構造部材	A類	大地震動後、災害応急対策活動等を円滑に行ううえ、又は危険物の管理のうえで支障となる建築非構造部材の損傷、移動等が発生しないことを目標とし、人命の安全確保に加えて十分な機能確保が図られるものとする。
建築設備	乙類	大地震動後の人命の安全確保及び二次災害の防止が図られていることを目標とする。

イ 積載荷重設定

教室や多目的スペースは、多くの人々が利用することが想定されます。また、オープンスペースなどの大空間については、将来的に用途が変更される可能性もあります。そのため、床や柱などの構造部材の耐荷重（積載荷重）は、建築基準法で定められている基準よりも余裕を持たせて設定し、将来の多様な利用に配慮します。

ウ 施工性

現場の状況を把握し、施工上起こりえる問題点を十分に検討し設計に反映します。

エ 経済性

機能性や安全性とのバランスを考慮しながら、最も経済的な架構形式及び工法を選定します。

(2) 基礎構造計画

- 敷地内の土質調査結果をもとに、支持層の深さや性質を詳細に検証し、適切な杭工法を選定します。なお、周辺の既存データではGL-15.0m付近の細砂層、または-18.0m付近の中砂層が支持層になると見込まれます。

(3) 上部構造計画

- 建物の構造形式を決定する際には、階数、柱や梁の間隔（スパン）、長寿命性及び経済性等を総合的に考慮します。その上で、具体的な構造種別（鉄筋コンクリート造、鉄骨造、木造など）を設計の段階で検討し、決定します。

5 設備計画

環境配慮計画の方針に基づき、エコスクールやZEB化を実現する設備を計画します。高効率の設備システムやトップランナー機器を採用することで、省エネルギー化を促進し、維持管理費の低減を図ります。

また、児童・生徒が安全かつ快適に学校生活を送ることができる環境を提供するとともに、教職員が容易に管理運営できる設備システムを整備します。

<環境配慮の視点>

- ・高効率機器の採用に加え、自然エネルギーや再生可能エネルギーの積極的な活用を検討し、ライフサイクルCO₂の低減に配慮した計画とします。
- ・設備機器の選定は、イニシャルコスト（初期費用）、ランニングコスト（維持運用費）、省エネルギー効果、環境負荷などを総合的に比較検討した上で決定します。
- ・機器の計画は汎用品を主体とし、更新や部品交換の容易さを考慮した構成とします。
- ・改修・更新工事や日常の維持管理・点検等が容易な計画とします。

(1) 電気設備計画

ア 受変電設備

校舎屋上等に屋外型キュービクルを設置します。

イ 照明設備

LED器具を採用し、照度は要求水準に基づく各室諸元表やJIS基準を基に計画します。また、トイレや階段には人感センサーを配置し、外構照明にはタイマーによるスケジュール制御を導入します。

ウ 非常用電源供給

災害発生時の対応として、発電機による非常用電源を災害時利用室及び関連施設に供給する計画を検討します。

エ 創エネルギー設備

太陽光発電設備を設置し、発電量や消費量を「見える化」するシステムを導入します。



図18 創エネルギー設備のイメージ

オ 雨水利用設備

水資源の有効活用を目的として、雨水利用の中水設備の設置を検討します。

(2) 機械設備計画

ア 給水方式

飲料水の確保と停電時にも供給可能なシステムを考慮し、直結直圧方式と受水槽方式を併用します。受水槽は災害時に必要な3日分の生活用水を確保できる容量以上で計画します。

イ 災害時のトイレ対応

建物内の一部トイレは小水量で洗浄可能な衛生器具を採用します。

マンホールトイレが設置可能な屋外スペースを検討します。

ウ 空調換気方式

利用状況が異なるエリアに対応するため、個別空調換気方式を採用します。

エ 熱源機器

個別空調を主体とし、Z E B対応のビルマルチパッケージエアコン（冷暖房切り替え機能付き）を検討します。

体育館や多目的ホールなどの大空間では、居住空間を中心に空調を行える高効率な設備を導入します。

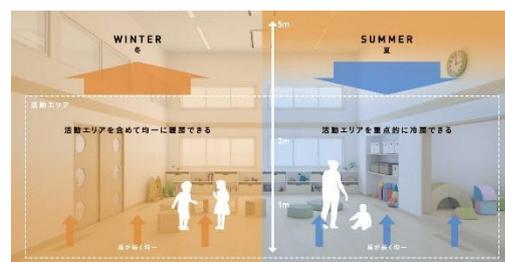


図19 熱源機器のイメージ

オ 換気設備

建築基準法を順守し、新鮮空気の導入、熱や湿気の排除及び防塵を目的として、各部屋の用途に応じた換気設備とします。

カ 中央監視設備とエネルギー管理システム（BEMS）

中央管理設備を設置し、空調・衛生・電気設備の主要機器について運転監視を行います。

ビル・エネルギー管理システム（BEMS）を導入し、ランニングコスト削減と省エネルギー化を推進します。

(3) 昇降機設備計画

ア 設置基準

バリアフリー法及び埼玉県福祉のまちづくり条例の基準を順守した昇降機を設置します。

イ 設置計画

学校利用および地域利用を考慮して、エレベーターの台数と位置を計画します。

6 ICT環境計画

G I G Aスクール構想に基づき、1人1台端末と高速ネットワークを実現するデジタル環境を整備します。

(1) 学習 ICT 計画

- ・学校のあらゆる場所が学びの場となることを目指し、校内 Wi-Fi を整備するとともに、自宅でのオンライン学習を支援するネットワーク環境を構築します。
- ・電子黒板やタブレットなどに連動するプロジェクション装置を整備し、子ども同士の学びの共有や発表を円滑に行える環境を確保します。



写真 10 デジタル環境を整備した空間のイメージ

(2) 校務 ICT 計画

- ・G I G Aスクール構想を踏まえ、校務のDX（デジタルトランスフォーメーション）を推進することで、教職員の働き方改革や負担軽減、さらには教育の質の向上を目指します。
- ・ネットワーク環境の整備と情報セキュリティの強化を図り、必要に応じてセグメント分割などを実施します。

第6章

計画の実現に向けて



1 概算事業費

(1) 概算事業費の検討

第3章で検討した計画面積をもとに、類似する建築物の整備費を参考にして1㎡当たりの工事単価を設定し、概算工事費を試算しました。各整備費のデータにはばらつきが見られるため、1㎡当たり税抜きで550千円～650千円程度と幅を持たせて単価を算出しています。その結果、現時点での概算工事費として、約116億円～134億円を見込んでいます。

この試算には、校舎・体育館をはじめ、校庭付属棟工事、敷地造成工事、外構工事などの費用が含まれています。ただし、周辺インフラ整備費、調査設計費、土地購入費などの付帯費用は含まれていません。また、工事費の試算では、最近の資材費、労務費、諸経費の状況を考慮し、現時点で想定可能な金額を算出しています。

なお、詳細な工事費については、設計段階で改めて精査を行う予定です。その際、資材価格や労務単価の上昇など、昨今の市場の変動状況により、概算工事費が変動する可能性があります。今後、必要に応じてコスト削減方法等の検討を行い、適切な対応を進めてまいります。

2 財源の検討

(1) 学校建設に係る財源調達方法の検討

新校の整備に当たり、活用できる可能性がある国の負担金・交付金や地方債について、以下のとおり整理しました。こうした財源を活用し、市の財政負担軽減に努めます。

負担金・交付金	公立学校施設整備費負担金	<ul style="list-style-type: none"> ● 公立の小学校、中学校、義務教育学校等の校舎・屋内運動場（体育館）等の新築または増築する場合に、その経費の一部を国が負担する ● 補助率：1/2（負担基準額に対する負担割合であり、総事業費に対する割合ではありません）
	学校施設環境改善交付金	<ul style="list-style-type: none"> ● 屋外教育環境（グラウンド）、屋内運動場（体育館）の空調設備、太陽光発電などの整備に要する経費の一部を国庫補助する ● 補助率：1/3～1/2（事業ごとに異なります。また、交付基準額に対する割合であり、総事業費に対する割合ではありません）
地方債	学校教育施設等整備事業債	<ul style="list-style-type: none"> ● 公立の小中学校、義務教育学校等の整備事業や新設等に伴って新たに取得する用地費、造成費を対象とする ● 充当率：75%または90%（一部交付税措置あり）
	公共施設等適正管理推進事業債 （集約化・複合化事業） ※ 令和8年度まで （延長を想定）	<ul style="list-style-type: none"> ● 個別施設計画に位置付けられており、全体として延床面積が減少する集約化・複合化事業を対象とする ● 充当率：90%（交付税措置あり）

〈概算工事費及び財源のシミュレーション〉

概算工事費は最大で134億円と見積もっており、その財源の内訳は以下のとおり想定しています。

【国庫負担金約 28 億円、地方債：約 95 億円、一般財源：約 11 億円】

なお、この試算は令和 7 年度の国庫負担金基準額をベースに算出しています。

また、一般財源の初年度支払いについては、公共施設整備基金（令和 7 年度末現在高約 12 億円）を活用し、対応する予定です。

○ 地方債と市の実質負担額の見込み

地方債については、地方交付税の交付税措置額を約 50 億円と見込んでいます。このため、概算工事費から国庫負担金及び交付税措置額を控除した市の実質負担額は、約 56 億円程度となる見通しです。

○ 償還計画の概要

地方債の元金償還期間を 30 年間とした場合、現在の借入状況や金融市場の動向などを踏まえた金利を想定しています。なお、返済に当たっては、元金均等方式を採用しているため、金利負担は年々減少していきます。例えば、初年度の元利償還額は約 5.2 億円ですが、30 年後には約 3.2 億円まで減少する見込みです。

○ 実質的な負担の軽減

この元利償還金については、交付税措置による負担軽減が期待されており、年間の実質的な負担額は半分程度の約 2.4 億円から約 1.5 億円までに抑えられる見込みです。

3 30 年間ライフサイクルコストについて

(1) ライフサイクルコストの検討

これまでの検討を踏まえ、①案として、新校を新築整備する場合の 30 年間で想定したライフサイクルコスト（整備費＋維持管理費）を以下のとおり算定しました。

また、参考に②案として、9 校を統合せず維持する場合との比較を示します。

○ 算定条件

①案 校舎及び体育館を新築整備し、30 年後に大規模改修を行うことで算定します。なお、初期整備費として、周辺インフラの整備費、調査設計費、土地購入費などは含めていません。

②案 9 校については、小学校校舎・体育館及び中学校校舎を改修対象とします。なお、中学校 4 校の体育館は築浅なので、改修対象としません。

長寿命化改修を行い、外部・内部仕上、構造躯体補強・劣化回復、設備全面改修および現在の教育環境に対応する室構成・間仕切変更などを行います。

30 年後には、9 校とも全面改築工事を行うことで算定します。

○ 両案とも 30 年間における学校施設の修繕費、光熱費、維持管理費等を算定します。いずれも、仮設校舎整備は含ないものとします。

① 新築整備する場合のライフサイクルコストの検討

新校を整備する案として、校舎および体育館の新築工事を行い、その後 30 年間運用を行った場合を前提としてライフサイクルコストを算定しました。

この案は、新築施設の状態や設計が長期的な視野で見た際に大きな費用対効果を発揮します。特に、30年後の大規模改修については新築時の効率的な設備設計を活用するため、コストの抑制が期待されます。また、新築によって施設性能が向上することで、維持管理費や修繕費が抑制される効果も見込まれます。

② 9校を再編せず維持する場合との比較

9校を再編せず維持する場合、以下の理由から①案と比較して総ライフサイクルコストが大幅に高額となる見込みです。

- ・ 築年数が古い既存建物について長寿命化改修が必要であり、初期整備費が高額。
- ・ 部分的な改修後も経年劣化による修繕費が継続発生する。
- ・ さらに、改修を重ねても、30年後には全面的な改築が必要となり、大きな費用負担が生じる。

このように、再編を行わず既存施設を維持する場合は、運用コストが増加し続けるため、①との費用対効果の差が生じます。

表7 校舎維持管理費の30年間における比較（パターン別）

パターン	①案 新設の場合※1	【参考】②案 再編を行わない場合※2
イニシャルコスト	【新築】134億円	【長寿命化改修】196.1億円
30年後の更新費用	【大規模改修】10.3億円	【改築※3】401.8億円
ランニングコスト	8.1億円	32億円
総額	152.4億円	629.9億円

※1 教育文化センター「みらい」南側を新校の敷地として、設置した場合を想定しています

※2 Bブロックの通学区域にある小・中学校9校（南小、埼玉小、下忍小、忍小、太田小、忍中、行田中、埼玉中、太田中）を再編しない場合を想定しています

※3 改築費用には解体費用を含みます

(2) 結論

①案（教育文化センター「みらい」南側の敷地における新築案）は、初期整備費が高額であるものの、施設性能や維持管理効率の向上によって修繕費や維持管理費を抑えることが可能です。そのため、ライフサイクルコストの観点で見ると、総費用を抑えつつ費用対効果が高い選択肢といえます。

一方、【参考】②案（再編せず維持）は、初期整備費用のみならず長期的なコスト負担も大きい結果となりました。

4 事業手法の検討

事業手法は、公共施設の建設や運営を進めるために採用される方法を指します。近年では、民間資金やノウハウを活用する「民間活力導入型」P P P（Public Private Partnership）やP F I（Private Finance Initiative）方式が注目されており、事業の効率化や質の向上を目的として積極的に導入されています。そこで、義務教育学校の整備に活用できる手法として次の3つの種類を検討することとします。

- 設計・施工分離方式（従来方式）
 - 設計・施工一括方式（DB方式）
 - 民間活力導入型のPFI方式
- } 自ら公共施設等の整備等を行う従来型手法
(以下「従来型手法」という。)

(1) 3つの手法の概説

ア 設計・施工分離方式（従来方式）

設計・施工分離方式は、自治体が資金を出し、設計業務と施工業務をそれぞれ分離して発注する方法です。設計者と施工者を別々に選定することで、設計と施工の工程を自治体が主体的に管理することが可能です。

公共事業では最も一般的に採用されている方式であり、そのため「従来方式」とも呼ばれています。設計段階で独立した専門性の確保が期待できる一方で、施工段階との調整が課題となる場合があります。

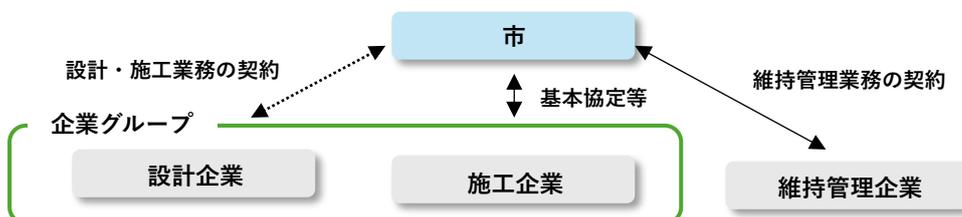


イ 設計・施工一括方式（DB方式）

設計・施工一括方式（DB方式）は、設計業務と施工業務をまとめて一括で発注する方式です。自治体が資金を出す点では従来方式と共通していますが、設計と施工を同時に発注するため、事業全体の効率化や工期短縮が可能となります。

この方式には、以下の2つの形態が存在します。

- ・基本設計先行型 DB方式: 基本設計を分離して発注し、実施設計と施工を一括で発注する方法。
- ・一括型 DB方式: 設計と施工のすべてを一括で発注する方法。

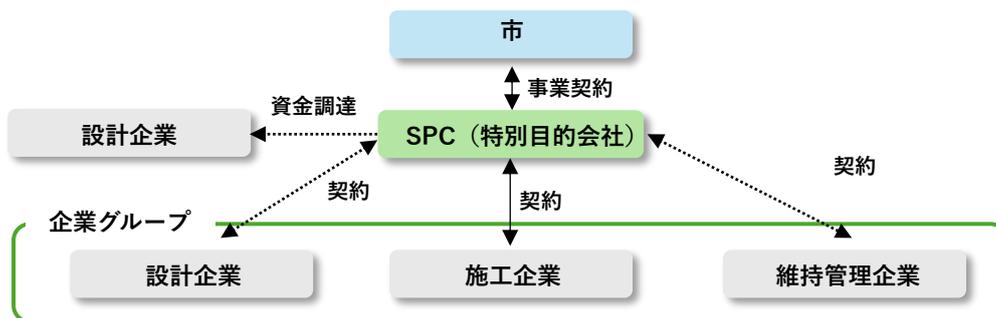


ウ PFI方式

民間活力導入型 PFI 方式は、民間事業者の資金やノウハウを活用し、公共事業の効率化やサービス向上を図る手法です。この方式では、民間が主体となり、施設建設、維持管理、運営を一元的に実施します。

自治体が、設計・施工・維持管理・運営にかかる対価を民間事業者に支払う「サービス購入型」が最も一般的です。さらに、施設の所有権を自治体に移転する方式として「BTO方式」(Build-Transfer-Operate) が広く採用されています。

※ 以降の比較検討では、サービス購入型 BTO 方式を対象として進めます。



(2) PPP/PFI手法の簡易定量評価

市では、令和7年9月1日から「PPP/PFI手法導入優先的検討規程」を施行しており、同日以後に検討を開始する公共施設等の整備について適用するものとしています。

これに従い、PPP/PFI手法簡易定量評価調書により、従来方式、DB方式、PFI手法を導入した場合との間で、費用等の総額（以下「費用総額」という。）を比較し、採用手法の導入の適否を評価します。

なお、PPP/PFI手法については、最も採用例が多く一般的なBTO（Build-Transfer-Own）方式にて検討します。

次頁に評価調書の試算を示します。

表8 PPP/PFI手法簡易定量評価調書

	従来方式	DB方式	PFI (BTO) 方式
整備等費用（運営等を除く）	134.1 億円	120.6 億円	120.6 億円
〈算出根拠〉	工事費概算で算出	削減率 10%で算出	削減率 10%で算出
運営等費用	5.4 億円	5.4 億円	4.9 億円
〈算出根拠〉	事業期間を 20 年として算出	事業期間を 20 年として算出	事業期間を 20 年削減率 10%で算出
公共施設等の使用料又は利用料金による収入	0.0 億円	0.0 億円	0.0 億円
〈算出根拠〉	収入無し	収入無し	収入無し
資金調達費用	12.3 億円	3.5 億円	25.8 億円
〈算出根拠〉	134.1 億円（整備等費用）× 67%（起債充当率）× 起債金利 1.3%・償還期間 20 年の元金均等	134.1 億円（整備等費用）× 67%（起債充当率）× 起債金利 1.3%・償還期間 20 年の元金均等	134.1 億円（整備等費用）× 21%（起債充当率）× 起債金利 1.3%、69.9 億円（民間借入金）× 利率 2.8%・償還期間 20 年の元金均等
調査等費用			0.25 億円
〈算出根拠〉			官民連携事業にかかる支援費用
税金			0.03 億円
〈算出根拠〉			法人税等
民間事業者の適正な利益及び配当			0.06 億円
〈算出根拠〉			税引後当期損益
合計	123.6 億円	129.5 億円	151.6 億円
合計（現在価値）	98.3 億円	96.1 億円	96.0 億円
財政支出削減率		VFM*2.2 億円 2.3%	VFM*2.3 億円 2.4%
その他（前提条件等）	事業期間 20 年、割引率 2.8%		

※VFM・・・「Value for Money」支払った費用に対してどれだけの価値が得られるかを評価する概念

比較結果として、従来方式に対する VFM（バリュー・フォー・マネー）は、DB方式で 2.3%、PFI方式で 2.4%と、ほぼ同水準であることが確認されました。そのため、定性的な評価も併せて総合的に判断する必要があります。

(3) 事業手法の定性的評価

発注方式を、①設計の自由度、②施工の効率性、③コスト管理等、④スケジュール管理、⑤特徴というカテゴリーに分け、比較した結果が次表となります。

表9 学校施設の整備における事業手法の比較

	従来方式	基本設計先行型 DB 方式	一括型 DB 方式	PFI (BTO) 方式
設計の自由度	● 高い	● 中程度 (市が基本設計を管理)	● 低い (民間事業者が主導して設計)	● 低い (民間事業者が主導して設計)
施工の効率性	● 低い (設計と施工の調整が必要)	● 中程度 (実施設計と施工を一括管理)	● 高い (設計と施工を完全に一括管理)	● 高い (設計と施工を完全に一括管理)
コスト管理等	● 設計と施工が分離されているため、コスト管理の自由度は低い ● 設計時点ではコスト調整が難しい	● 設計段階から施工業者の工法を一部反映可能 ● 実施設計時に具体的な部材や人員等のコスト管理を行える	● 設計と施工を統合し、施工業者が設計段階から参画するため、部材や人員等のコスト管理を図りやすい	● 民間事業者が全体の計画を主導するため、設計・施工・運営までを考慮してコスト管理を行う
スケジュール管理	● 個々の発注に要する資料作成の時間が比較的短い ● 工事契約から施工までの準備期間が短く、十分な工期を確保する点で課題	● 個々の発注に要する資料作成の時間が比較的短い ● 実施設計と並行して施工準備が可能であり、一定の工期短縮を見込める	● 発注に必要な詳細かつ包括的な資料作成に多大な時間を要する ● 施工準備が可能であり、工期短縮を見込める	● 発注に必要な詳細かつ包括的な資料作成に膨大な時間を要する ● 設計と並行して施工準備が可能であり、工期短縮を見込める
特徴	● 設計段階での細かな管理が可能だが、設計と施工が分離することにより、完成に向けた効率的な調整が難しい	● 市が基本設計を管理しつつ、実施設計から施工に向けた効率的な調整が可能 ● 発注資料は基本設計と並行して準備	● 統一的な設計・施工や工期短縮が期待されるが、発注資料の作成に多大な時間を要する	● 設計・施工・運営を全て民間が担うため効率化が図れるが、発注資料の作成に多大な時間を要する
評価	△	○	△	×

上記の各項目のバランスを考慮した結果、基本設計先行型DB方式を採用することが最も適切であると判断しました。以下、その理由を述べます。

まず、従来発注方式は設計の自由度を十分に確保できる一方で、施工段階の効率性が低いという課題があります。一方、一括型DB方式やPFI方式は施工効率を向上させることは可能ですが、設計の自由度が制限されやすいという問題を抱えています。

この点において、基本設計先行型DB方式は設計の自由度を一定程度確保しつつ、施工段階での効率性を向上させることができ、結果としてバランスの取れたコスト管理と品質確保が可能であると考えます。

また、スケジュール管理の観点においても、この方式はメリットを有しています。従来発注方式では、個々の発注に要する資料作成に時間がかからない一方で、工事契約から施工開始までの準備期間が十分に確保しづらい課題があります。一括型DB方式やPFI方式は、設計と施工を一体で管理できるため工期短縮が見込めますが、その分、発注に必要となる包括的な資料作成に多くの時間を要する可能性があります。

一方で、基本設計先行型DB方式では、実施設計と施工を一体管理することによりスケジュールの効率化が可能であり、資料作成も基本設計と並行して進めることができるため、全体の工程を円滑に進めることが期待できます。

以上の理由から、総合的に判断した結果、基本設計先行型DB方式を採用し、設計と施工双方で柔軟性を確保しつつ、プロジェクトを安全かつ効率的に進めていきたいと考えています。

5 スケジュール

事業スケジュール（想定）を以下に示します。

（1）事業スケジュール（想定）

- ・義務教育学校の令和12年度新学期の供用開始に向けて、次頁に示すようなスケジュールを想定し進めていくものとします。
- ・関係者・関係機関等との調整・協議、ワークショップ等での意見聴取を踏まえ、整備事業を推進します。
- ・なお、事業スケジュールについては、今後の建築市況の動向等によって変更となることも想定されます。
- ・この他、施設整備と併せて、校名、校歌、校章、通学方法などについては、令和9年度から設置する開校準備委員会において、保護者などの学校関係者と共に検討していきます。

表10 事業スケジュール

		令和7年度	令和8年度	令和9年度	令和10年度	令和11年度	令和12年度
施設整備	基本構想	■					
	測量調査等		■				
	造成設計		■				
	基本設計		■				
	実施設計 建設工事			■	■	■	■
	外構工事					■	■
学校運営	開校準備 委員会			■	■	■	■
	教育活動	■	■	■	■	■	■
	通学方法	■	■	■	■		

供用開始

資料編

1 アンケート調査結果

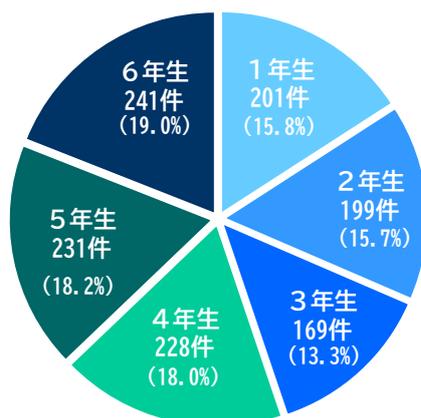
本基本構想の作成に当たり、学校関係者のニーズを把握するため、児童生徒、保護者、地域の皆様、教職員を対象としたアンケート調査を実施しました。結果については、次のとおりです。

表 11 アンケート概要

実施期間	令和 7 年 10 月 28 日～令和 7 年 11 月 10 日
対 象	① 忍・行田・埼玉・太田中学校区内（Bブロック）の小中学校に通っている児童生徒 ② ①の保護者 ③ Bブロックにお住まいの地域住民 ④ Bブロック内の小中学校に勤務している教職員
回 答 数 (カッコ内は回答率)	【小学生】1,269 件 (84.9%) 【中学生】533 件 (67.1%) 【保護者・地域住民】1,654 件 【教職員】196 件 (61.3%) 合計：3,652 件

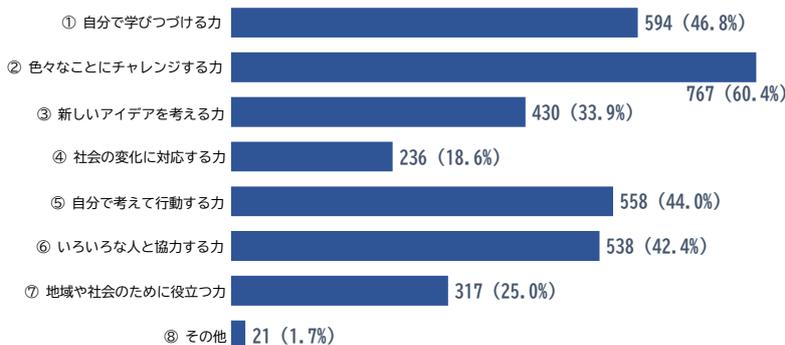
〈小学生の結果〉

1. あなたの学年を教えてください。

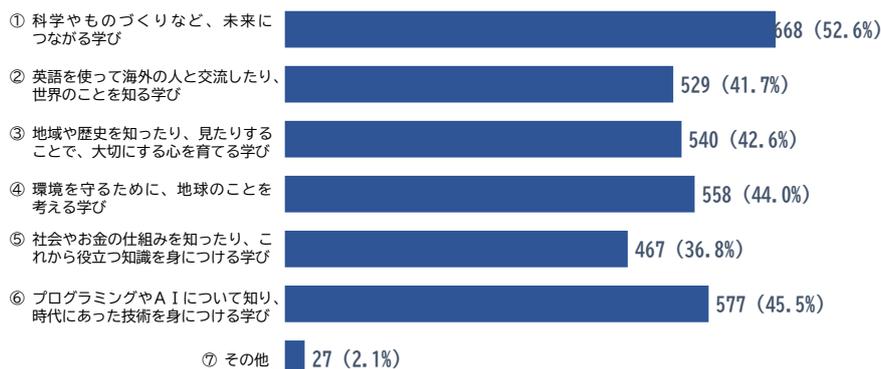


2. これからの学校生活をとおして、どのような力を身に付けたいと思いますか。

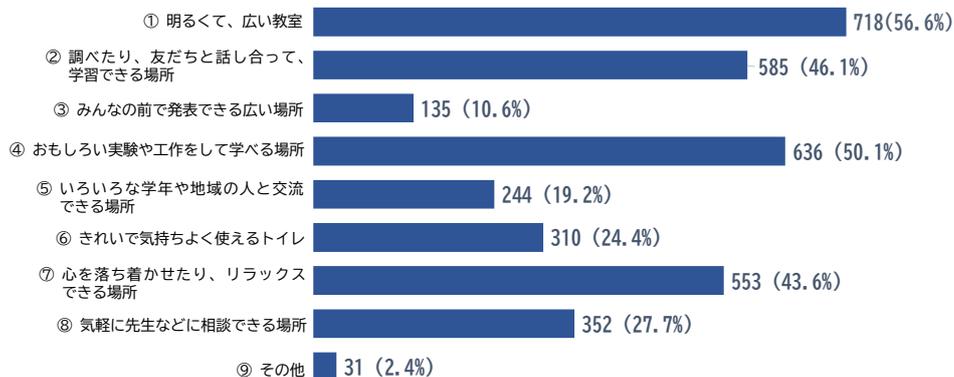
未来への期待や楽しみな気持ちを聞かせてください。（3つまで選択）



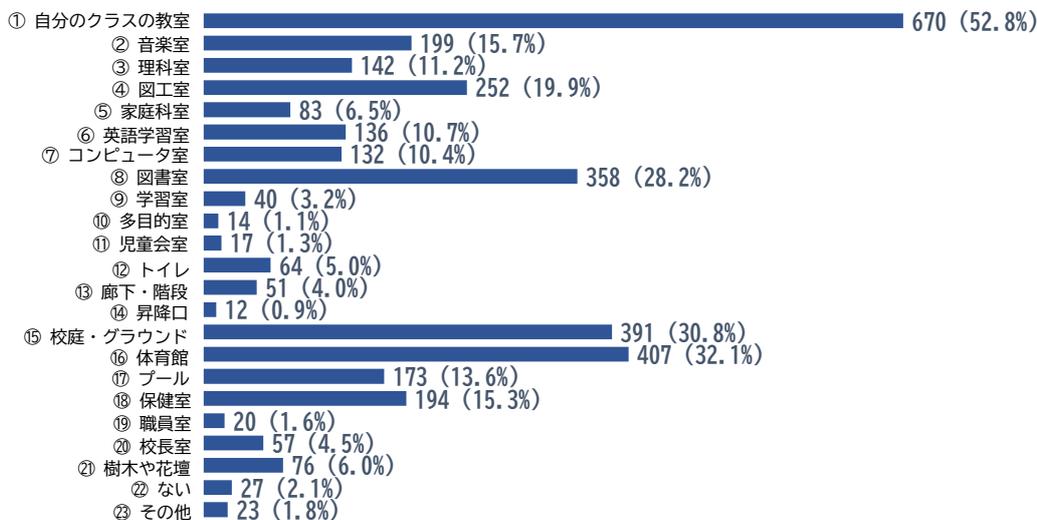
3. これからの学校で、どのようなことを学んでみたいですか。(3つまで選択)



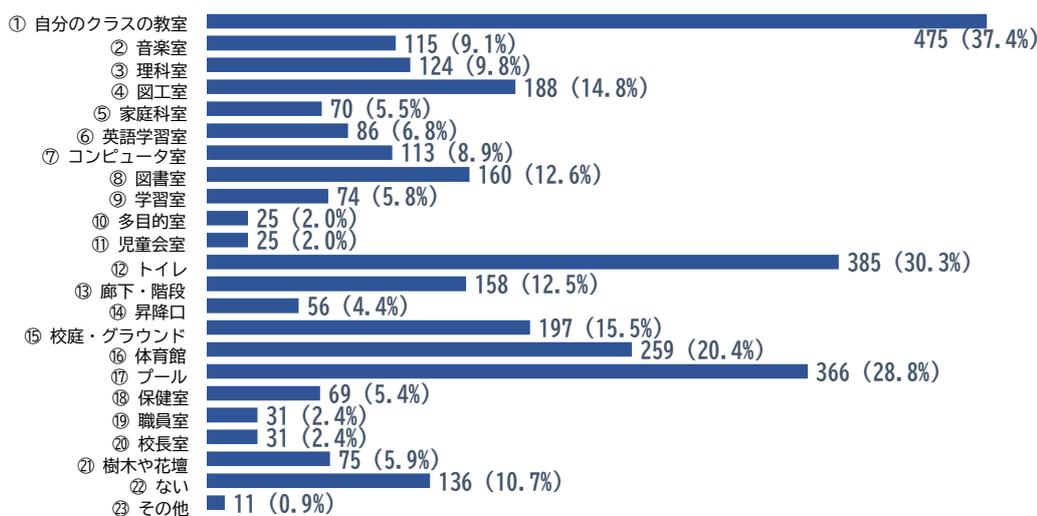
4. 新しい学校に、どんな部屋やスペースがあったらいいと思いますか。(3つまで選択)



5. あなたが通っている学校で、好きな場所を選んでください。(3つまで選択)

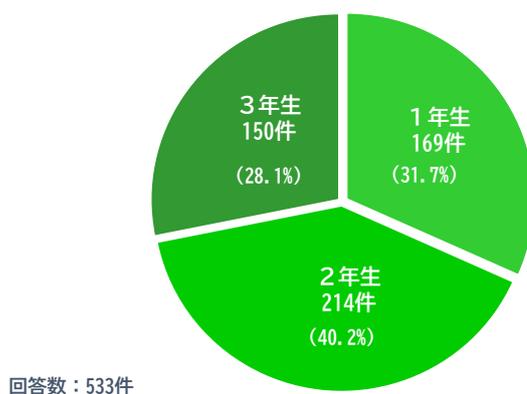


6. あなたが通っている学校で良くしたい場所を選んでください。(3つまで選択)

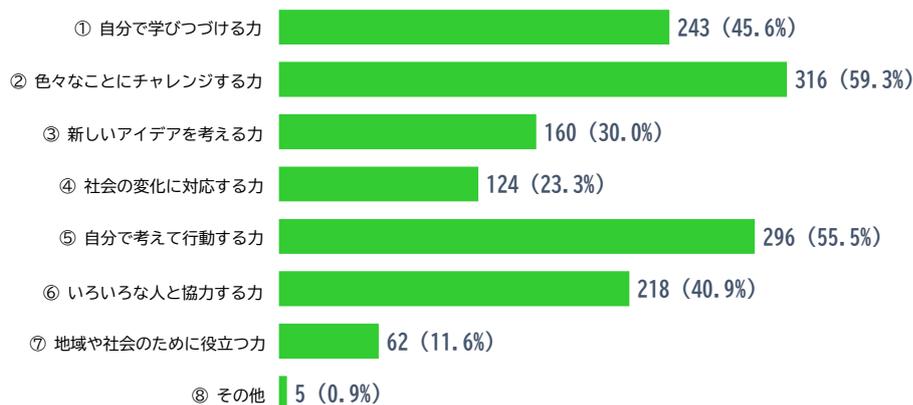


〈中学生の結果〉

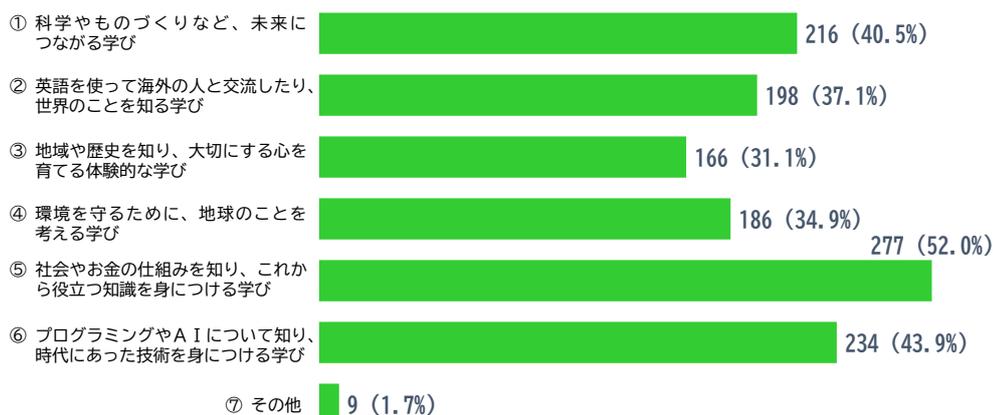
1. あなたの学年を教えてください。



2. これからの学校生活をとおして、どのような力を身に付けたいと思いますか。未来への期待や楽しみな気持ちを聞かせてください。(3つまで選択)



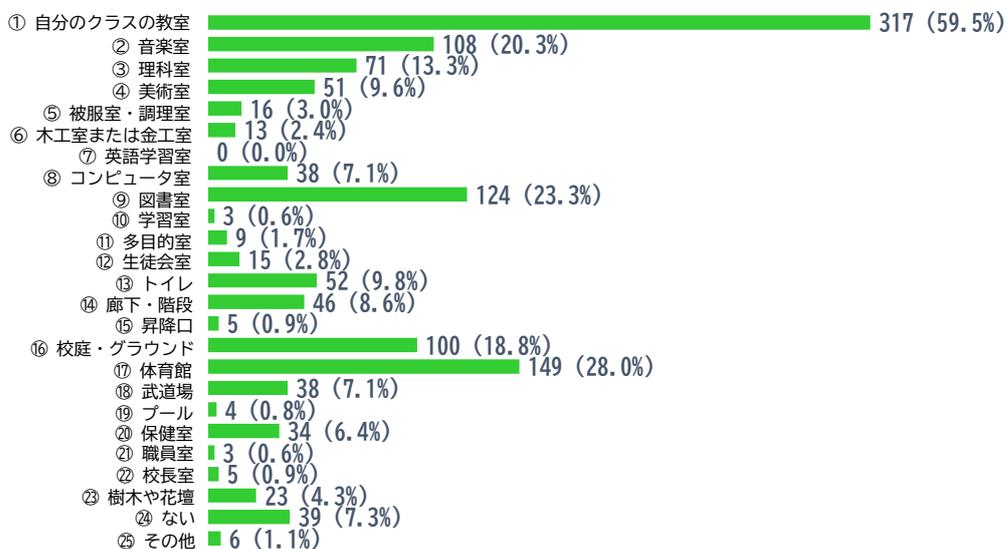
3. これからの学校で、どのようなことを学んでみたいですか。(3つまで選択)



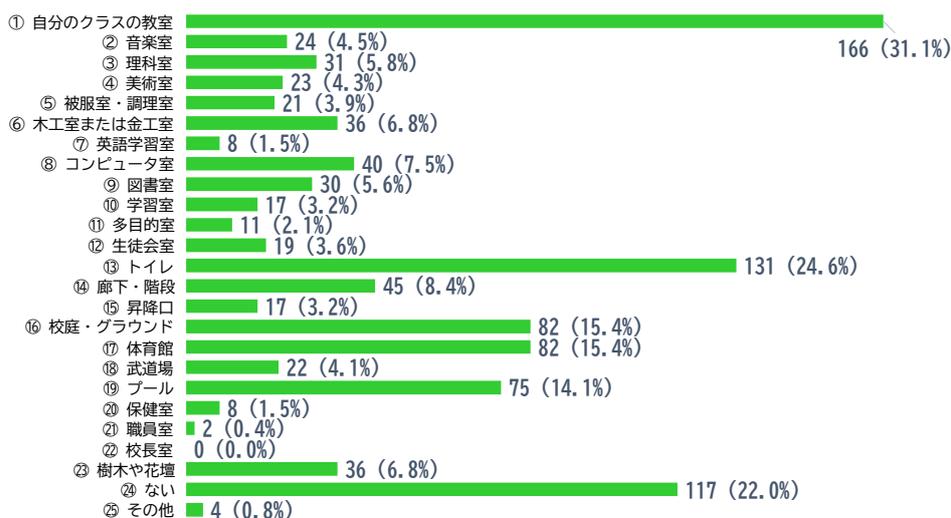
4. 新しい学校に、どんな部屋やスペースがあったらいいと思いますか。(3つまで選択)



5. あなたが通っている学校で、好きな場所を選んでください。(3つまで選択)

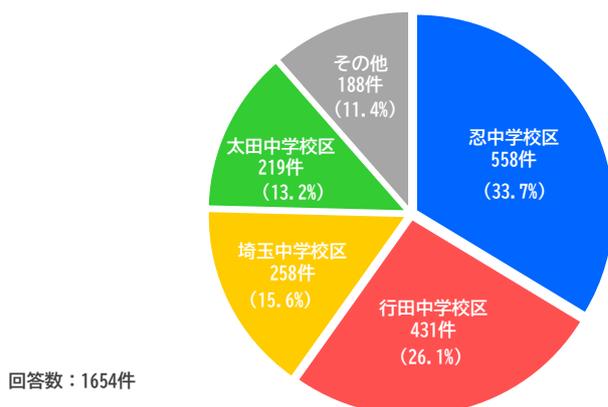


6. あなたが通っている学校で良くしたい場所を選んでください。(3つまで選択)

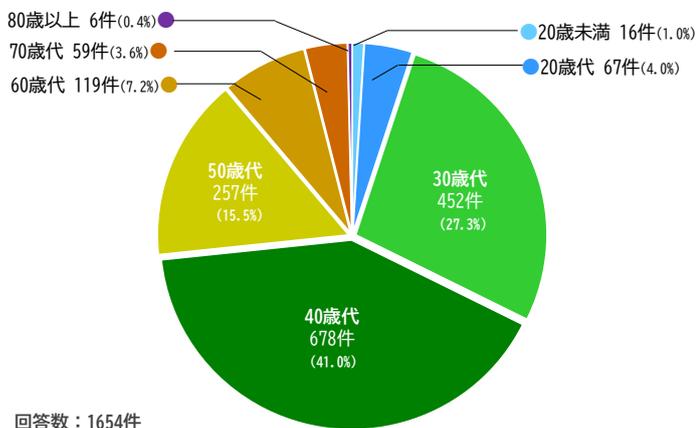


〈保護者・地域住民の結果〉

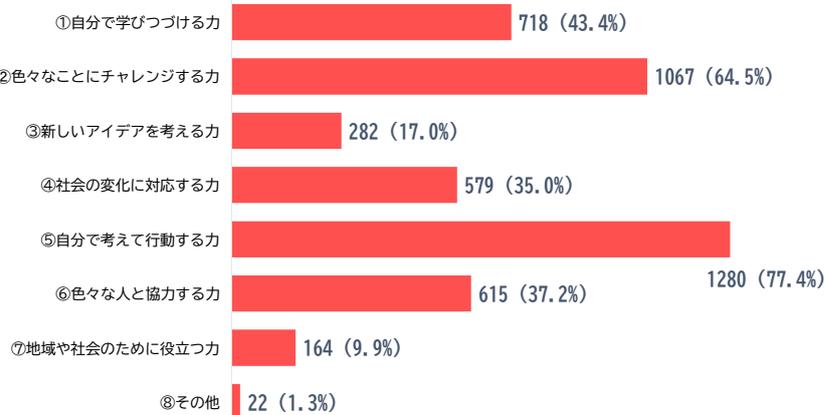
0-1 お住まいの地区について教えてください。



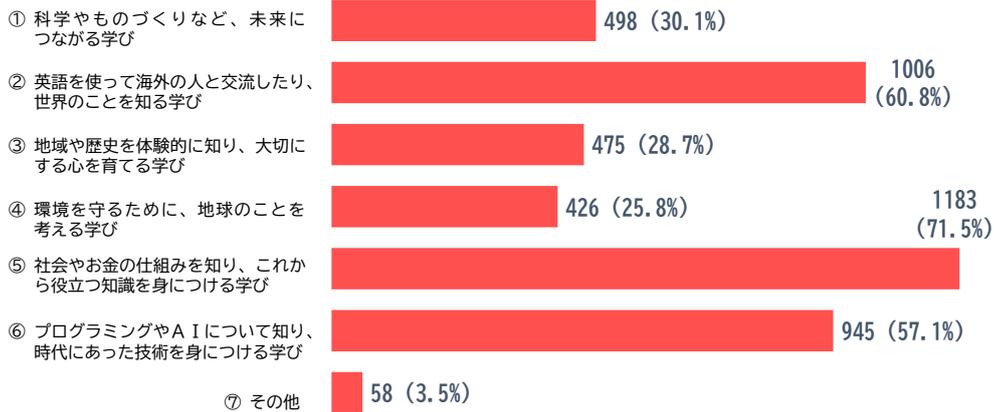
0-2 あなたの年齢について教えてください。



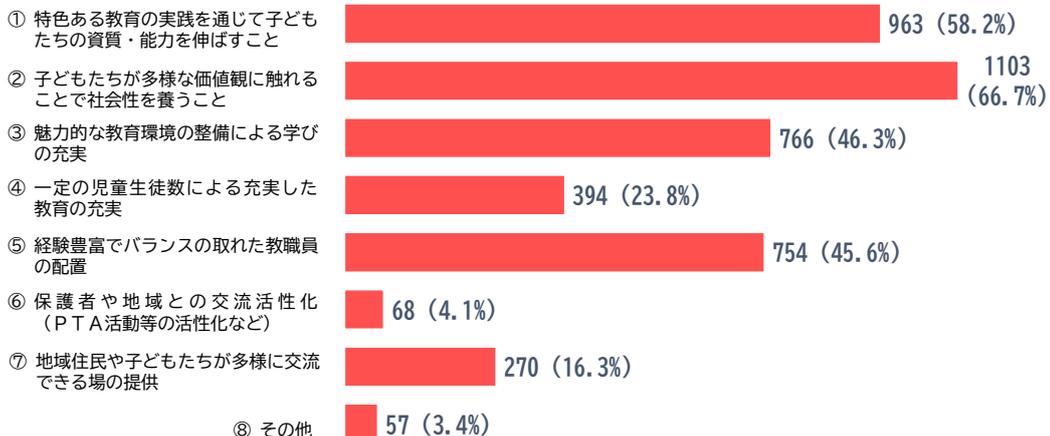
1. これからの学校生活で、子どもたちにどのような力を身に付けてほしいと思いますか。
(3つまで選択)



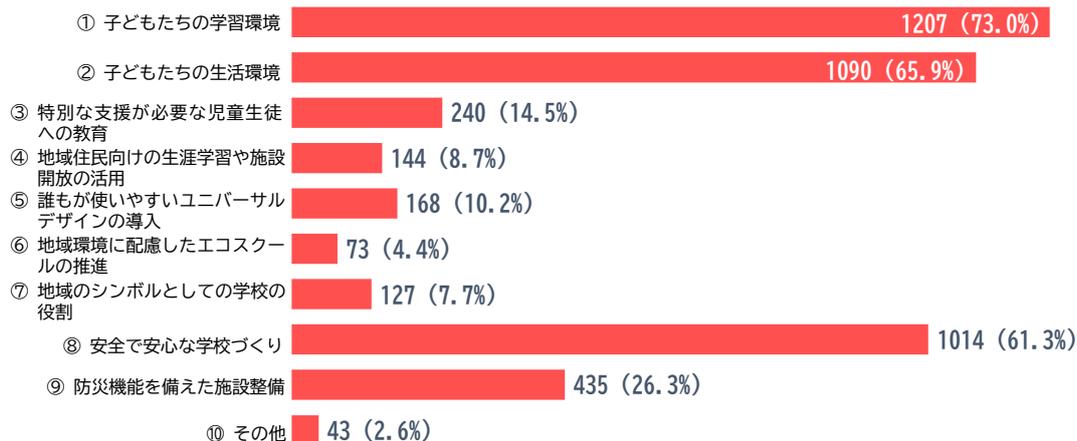
2. これからの学校で、子どもたちにどのようなことを学んでほしいですか。(3つまで選択)



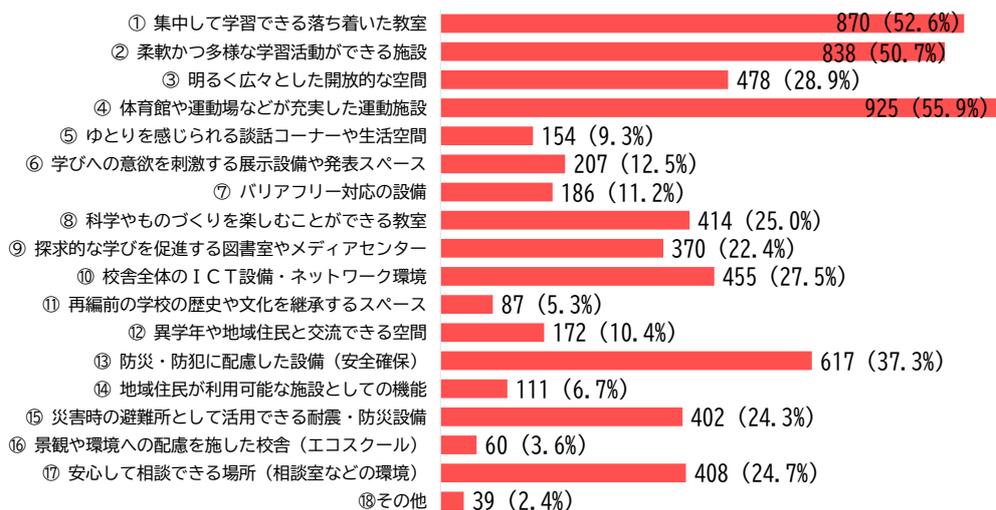
3. 再編後の学校に期待することは何ですか。(3つまで選択)



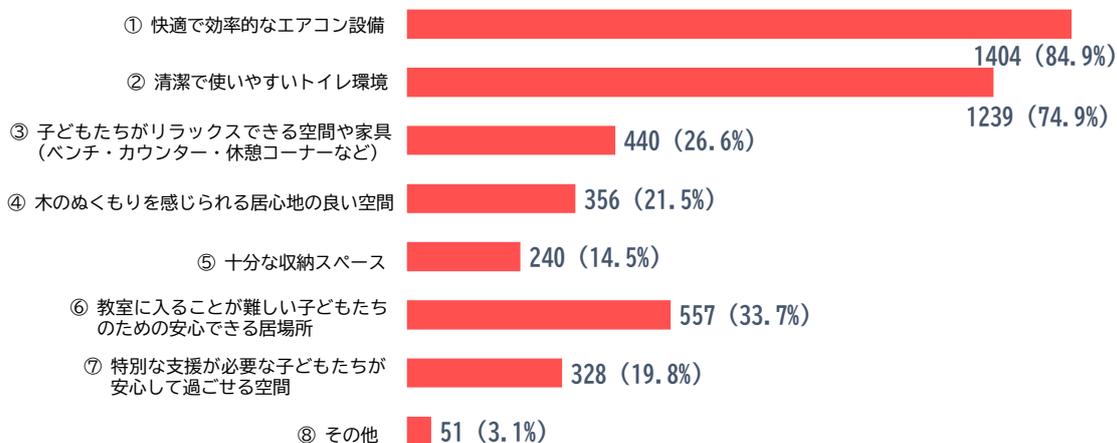
4. 再編後の学校に対して、関心があることは何ですか。(3つまで選択)



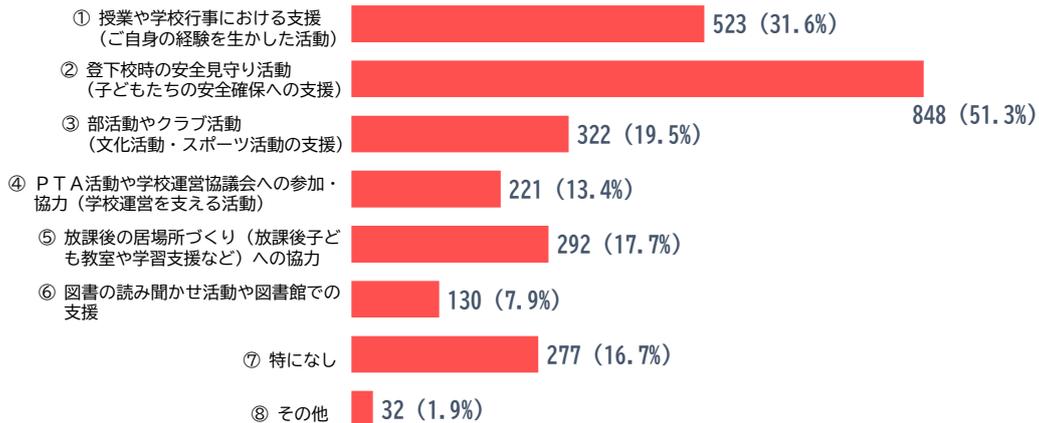
5. 再編後の学校に備えてもらいたい施設や機能は何ですか。(5つまで選択)



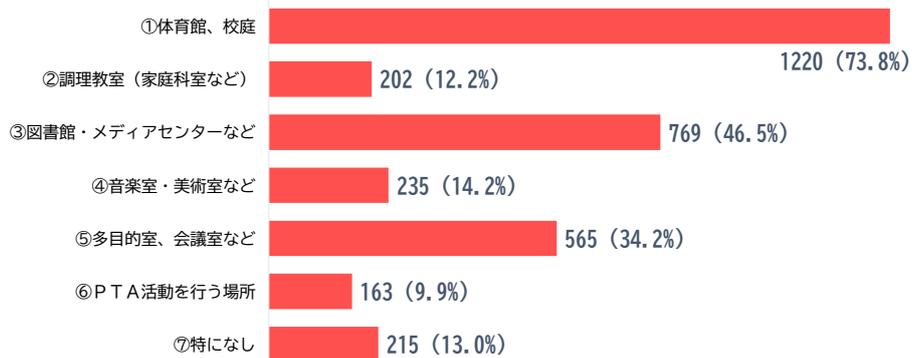
6. 子どもたちが学校で楽しく安心して生活していく上で、充実してほしい施設や機能は何ですか。(3つまで選択)



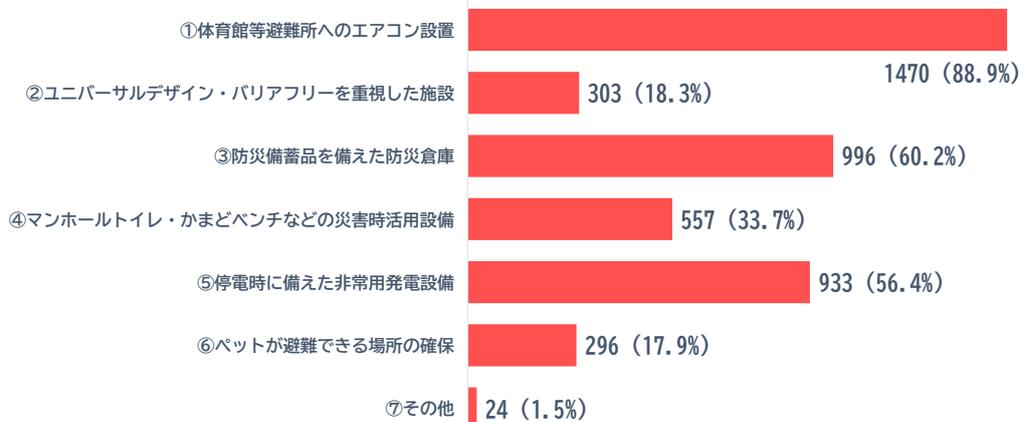
7. 保護者や地域の皆様が学校に協力できる活動は、どのような場面ですか。(2つまで選択)



8. 保護者や地域の皆様が学校を利用する場合、どの施設を充実してほしいですか。(3つまで選択)

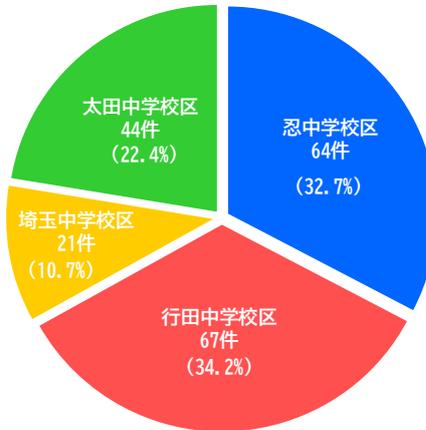


9. 地域の避難所として、学校に備えてほしい機能は何ですか。(3つまで選択)



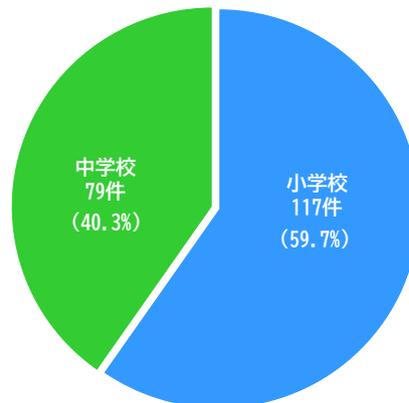
〈教職員の結果〉

0-1 お勤めの中学校区について教えてください。



回答数：196件

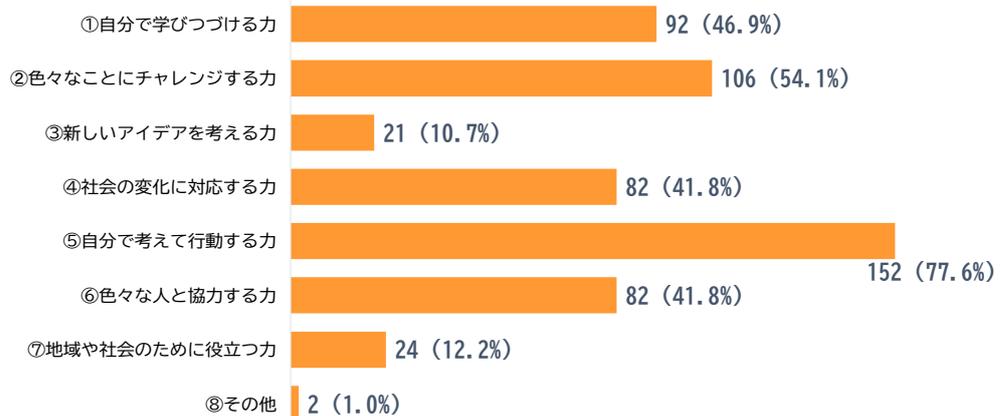
0-2 お勤めの学校種について教えてください。



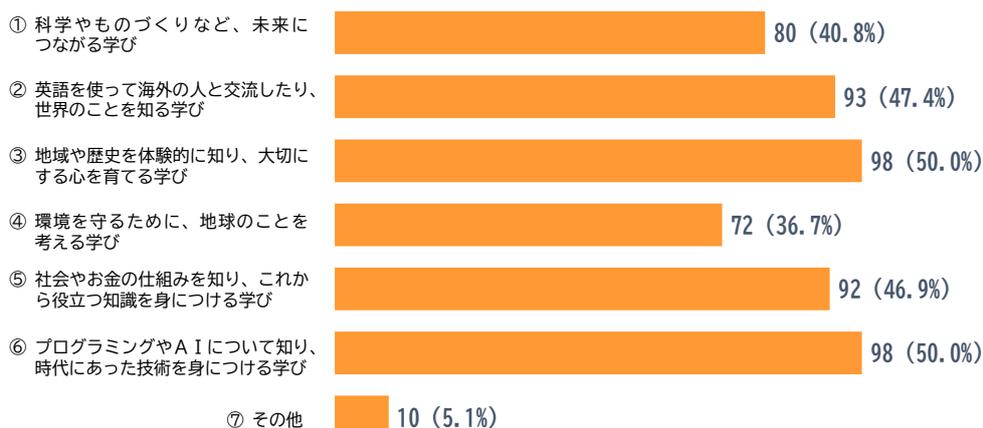
回答数：196件

1. これからの学校生活で、子どもたちにどのような力を身に付けてほしいと思いますか。

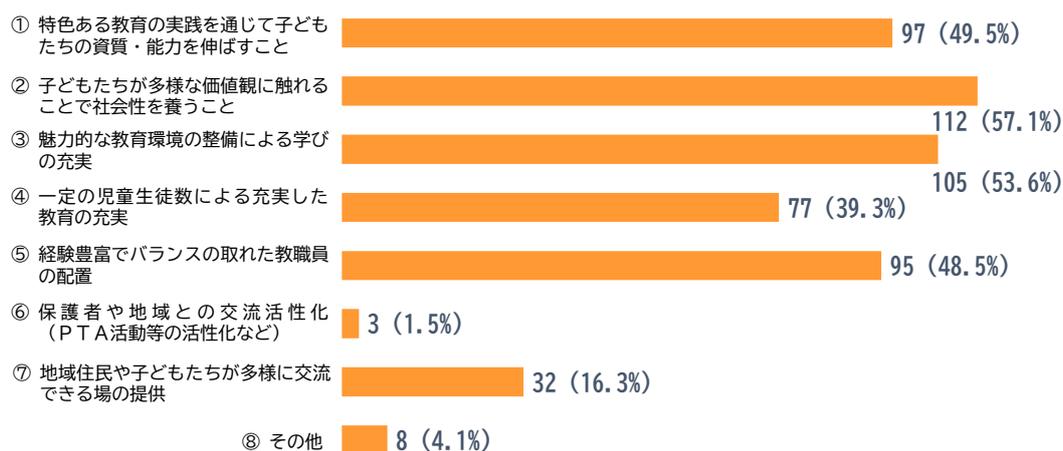
(3つまで選択)



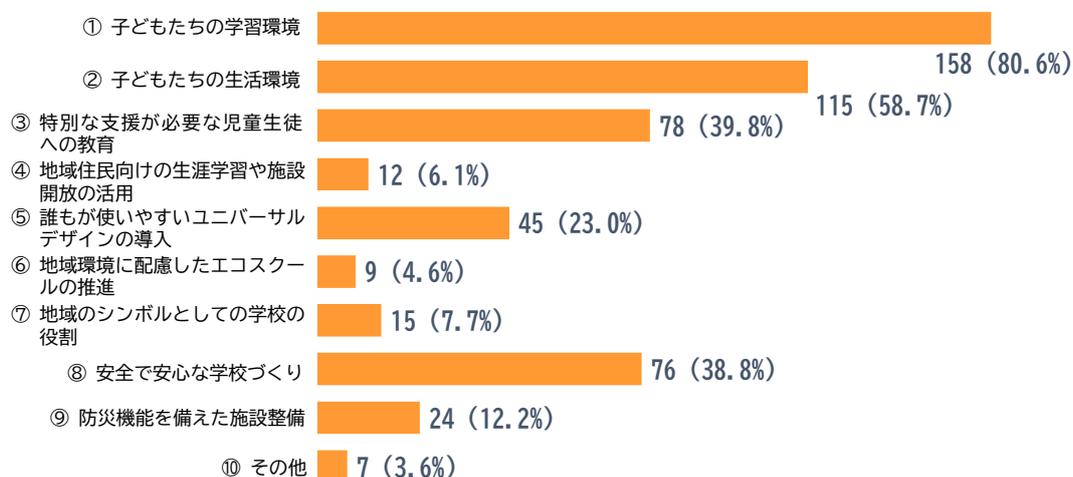
2. これからの学校で、子どもたちにどのようなことを学んでほしいですか。(3つまで選択)



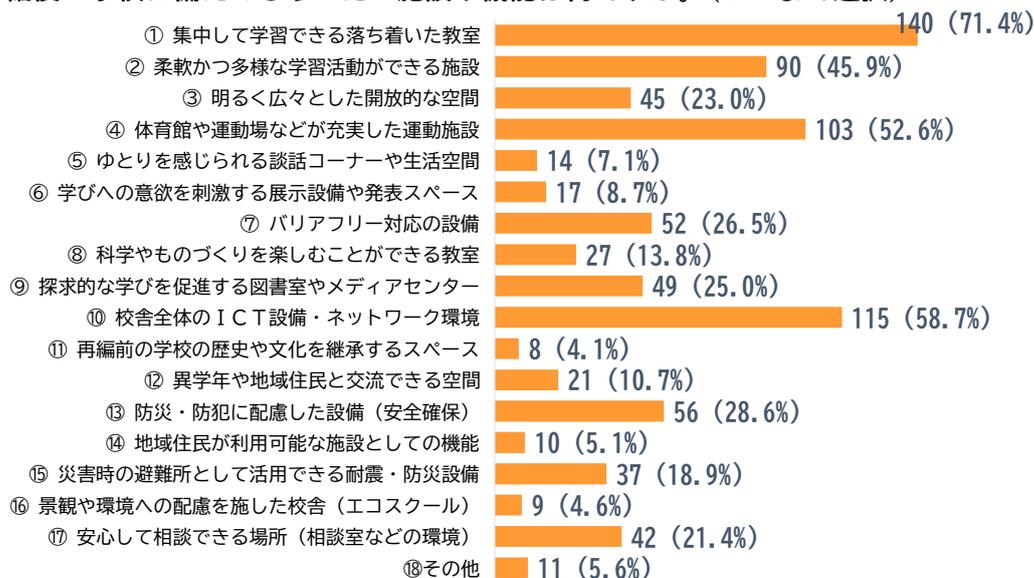
3. 再編後の学校に期待することは何ですか。(3つまで選択)



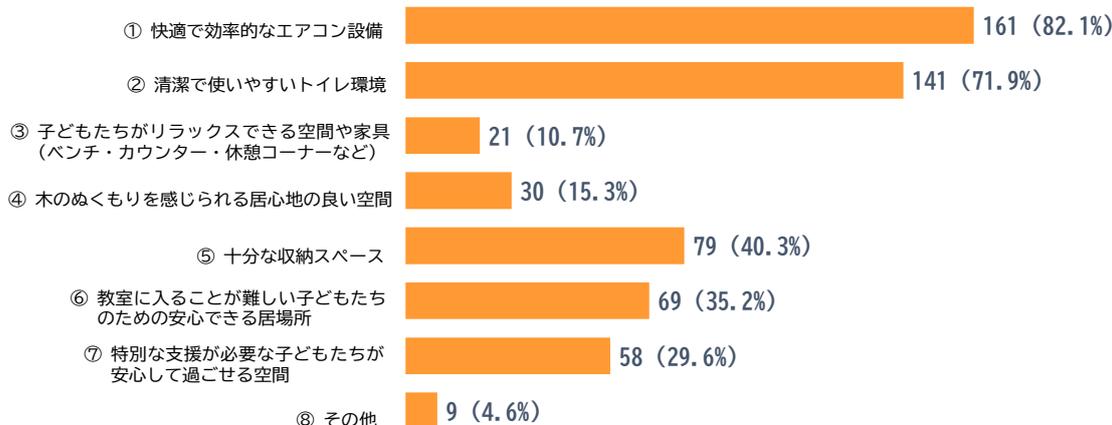
4. 再編後の学校に対して、関心があることは何ですか。(3つまで選択)



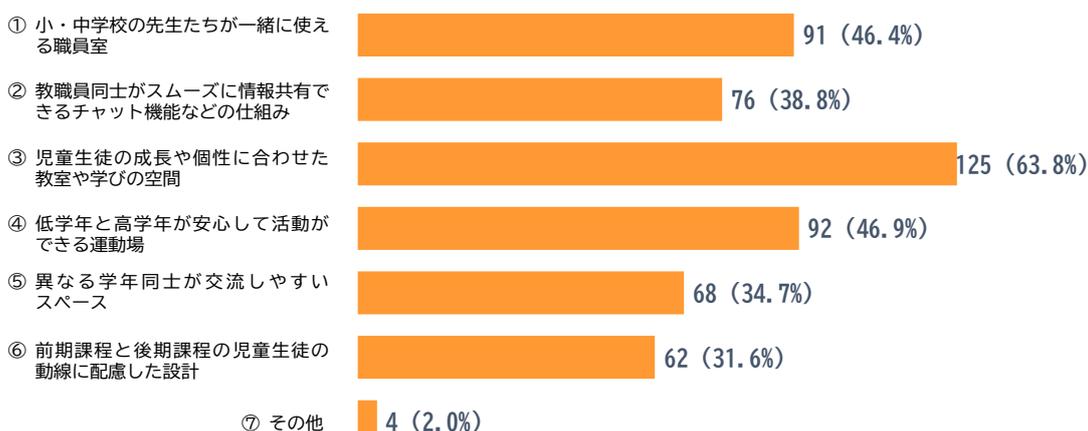
5. 再編後の学校に備えてもらいたい施設や機能は何ですか。(5つまで選択)



6. 子どもたちが学校で楽しく安心して生活していく上で、充実してほしい施設や機能は何ですか。(3つまで選択)

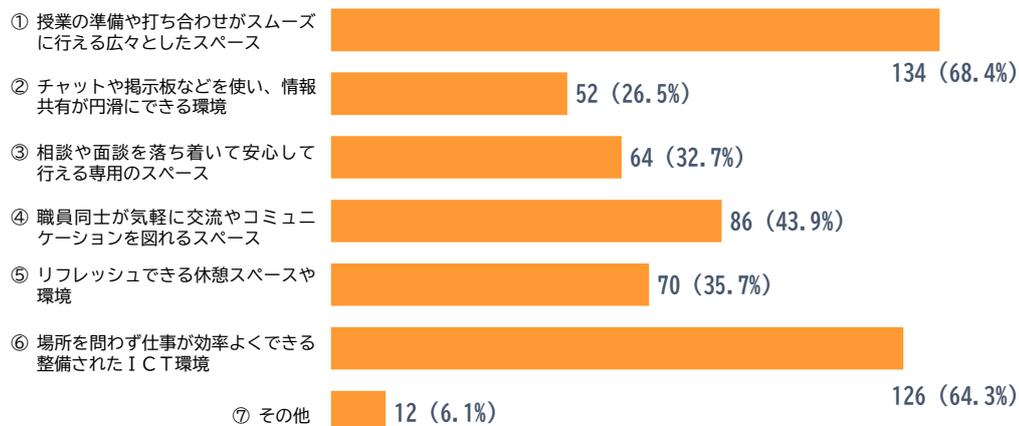


7. 効果的に小中一貫教育を実施していく上で、重視する空間や機能について教えてください。(3つまで選択)



8. 教職員の皆さんが働く場として、充実してほしい設備や機能などについて教えてください。

(3つまで選択)



2 ワークショップ報告

令和7年12月から令和8年2月にかけて、3日間に渡ってワークショップを開催し、児童生徒、保護者及び地域の皆様の代表者にご参加いただきました。

このワークショップでは、本基本構想のコンセプトや機能を検討する上で、各回テーマを設定し、「子どもグループ」、「大人グループ」に分かれた参加者は、熱心にグループワークに取り組みました。

参加者は、新校に必要なと思われる教室、スペース及び機能などについて、色々なアイデアを出し合いました。ワークショップを通じ、新しい学校への想いを共有することができ、非常に意義のある機会となりました。

各回の詳細につきましては、次のとおりです。

(1) DAY 1 令和7年12月21日 @行田市産業文化会館管理棟2階2AB会議室

〈子どもグループ〉

時 間 午前10時～正午ごろ

テ ー マ ワクワクが止まらない学校って？

参加人数 33人

- 内 容**
- ・本市の教育政策アドバイザーである細田眞由美氏が講師を務め、「ワクワクする時代を生きるあなたたちと行田市の未来の学びを考える！」というテーマで講演し、AI技術が社会インフラとなる中で、これからの子どもたちには「〇〇したい」という力(欲求)が求められることを教えていただきました。(写真①)
 - ・ワークショップ初日のため、グループワークの前に「マシュマロチャレンジ」というゲームを実施しました。パスタとマシュマロを使ってタワーをつくり、班ごとに高さを競うミッションに取り組み、メンバーの緊張をほぐしました。(写真②)
 - ・グループワークでは、テーマに沿って、新しい学校に、できたらいいなと思う部屋や場所、こんなことを学んでみたいなと思うこと、今の学校のすきなところについて、ふせんに意見やアイデアを書き出しました。(写真③)
 - ・最後に、グループの中でメンバーの考えを整理し、発表を行いました。各班からは、「料理やお金の使い方など、社会で生きていく上で必要なことを学びたい」、「異学年で交流できたり、リラックスできる場所がほしい」といった意見が数多く出ました。(写真④)

〈ワークショップの様子〉



写真①



写真②



写真③



写真④

〈グループワークの結果〉

1班

新しい学校にできたらいいなと思う場所

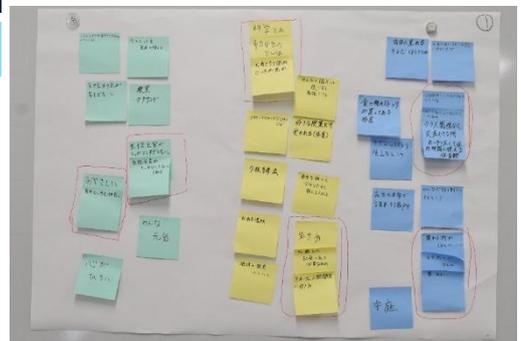
- 自由に見れるテレビ（Netflixとか） / ■風通しの良い、きれいな空気に満ちた空間 / ■食べ物のストックが置いてある部屋 / ■学年関係なく、交流ができる交流部屋 / ■学年や学級を越えて遊んだりできる場所 / ■クラス関係なく交流できる所 / ■めっちゃ広くて休み時間に使える体育館 / ■先生と本音で語れる場所 / ■みんなで話し合えたりするところ / ■寝れる所がほしい / ■ヨギボーがほしい / ■畳ほしい / ■中庭

こんなことを学んでみたい

- 科学とか動物の生態-にわとりと卵がどっちが先か / ■みんなと協力して過ごせる勉強できる / ■自由に考えられる意見・主張の出し方 / ■好きな授業だけ受けられる（体育） / ■少林寺拳法 / ■苦手な物でも分かりやすく教えてくれる / ■生き方-礼儀とか社会に出て必要なもの-きれいな人間関係の作り方 / ■地域の歴史について

今の学校の好きなところ

- 厳しすぎず、自分のできる範囲で動ける / ■タブレットを自由に使える / ■全校生徒が多すぎない / ■教室、グラウンド / ■やさしい 男女どっちも仲良し / ■生徒会室がしっかりしすぎてない。生徒会長がしっかりしてない（私） / ■みんな元気 / 心が広い



2 班

新しい学校にできたらいいなと思う場所

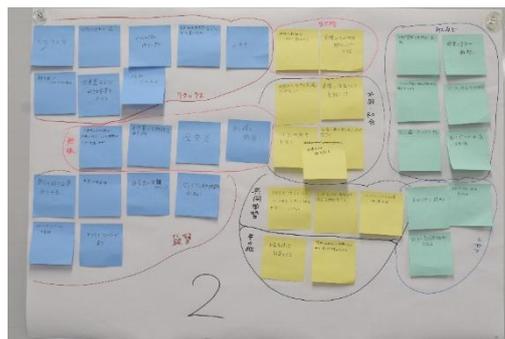
■ リラックス室 / ■ 個別の休憩室 / ■ プールの後の休憩所 / ■ 休み時間などに落ち着ける所 / ■ サウナ / ■ 音楽を聞いてリラックスできる場所 / ■ 図書室などで好きな音楽を聴ける / ■ イスがふわふわ / ■ 不登校とかの子供が気軽に行けて、人との接触が少ない部屋(勉強) / ■ 落ち着いて勉強出来る所 / ■ 歴史室 / ■ おし様と勉強! / ■ 自分の好きな事ができる / ■ 楽器の練習場 / ■ 給食食べ放題! / ■ カラオケ(発声練習用)がある! / ■ エアコンが付いている体育館 / ■ サスケとクノイチがある

こんなことを学んでみたい

■ 植物や動物を自分で育ててみる / ■ 実際に生き物を解体できる / ■ 外国の人たちと交流してみたい / ■ 実際に外国の人と会話できる / ■ 外国の歴史を学ぶ / ■ 外国の人と触れ合える / ■ 社会で過ごすために大切なこと / ■ クラスだけでなく1~6年生や中1~3年生が学ぶ・交流 / ■ ワードやパワーポイントで使える便利な事 / ■ パワーポイントやワードなどをうまく使う方法 / ■ お金を使って計算できる / ■ 理科・社会などで分野ごとに自分で選んで学習ができる

今の学校の好きなおとこ

■ 他の学年とも仲が良い所 / ■ 授業の空気が軽い / ■ クラスや学年で掲示板があり、現状が分かる / ■ ベースに合わせてくれる / ■ 楽しく過ごすことができる / ■ あいさつが元気に出来る事 / ■ 本がタダで読める / ■ 日光がうまく入る窓ガラス / ■ 一人で勉強する所がある



3 班

新しい学校にできたらいいなと思う場所

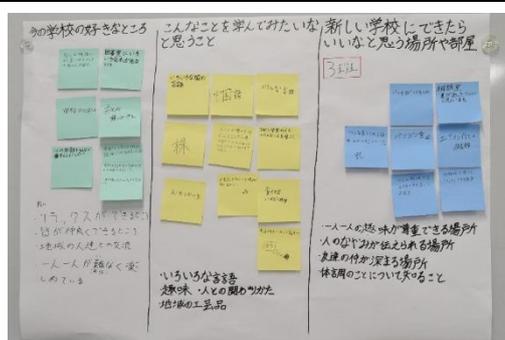
■ 医者がある部屋 / ■ 相談室があったらいいと思います / ■ クラス写真を撮れる場: みんなの写真を残しておくため / ■ パソコン室 / ■ エアコン付きの体育館 / ■ 自分の興味がある物の本を置いた図書室 / ■ 絵を自由に描けてリラックスできる教室 / ■ 英語の先生と1対1で話す部屋

こんなことを学んでみたい

■ 色々な国の言語 / ■ 中国語 / ■ 色々な言語 / ■ 株 / ■ 人と人が関わる時どんなことを注意するといったのかなどのアドバイスの仕方を学びたい / ■ 違う学年の人と色々なことを学ぶ / ■ AIの使い方 / ■ 工芸品を作っている場所に行って学びたい / ■ 食べてはいけない物

今の学校の好きなおとこ

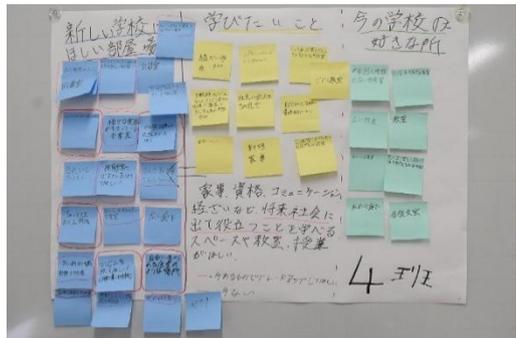
■ 色々な種類の本を置いてあるみんなが楽しめる図書室 / ■ 図書室に色々な本があるところ / ■ 学校のおい / ■ 先生が親しみやすい / ■ 1人の問題をみんなで考えるところ / ■ 地域の人と何かを作ったり話し合うことができること / ■ 先生が手伝わずに自分たちで決める場面があるところ / ■ 自分の意見をえんりよせず言えるから / ■ リラックスができるところ / ■ 皆が仲良くできるところ / ■ 地域の人たちとの交流 / ■ 一人一人が難(無理)なく楽しめている



4 班

新しい学校にできたらいいと思う場所

■本の種類がたくさんある図書室 / ■みんなでしゃべったり遊んだりできる楽しい教室 / ■自習室 / ■好きな時に行って休める教室 / ■様々な楽器がそろっている音楽室 / ■みんなで遊べる交流スペース(中) / ■きれいなトイレ / ■体育館にエアコンを付けてほしい! / ■1人で落ち着けるスペース / ■ちょっとした屋上のな / ■色々な本がある広い図書室 / ■広い廊下 / ■外に机などを置き勉強できる場 / ■コンビニを作してほしい!(自動はん売機) / ■自由に食べられる食堂のような場所 / ■温度調節できる水道 / ■運動を広くできる広い校庭 / ■休める部屋 / ■ピアノ / ■家事、資格、コミュニケーション、経済など、将来社会に出て役立つことを学べるスペースや教室、授業がほしい



こんなことを学んでみたい

■経済学 株 / ■人とのコミュニケーションのとり方について / ■将来の夢をかなえられるような授業 / ■ピアノ教室 / ■9教科だけでない、〇〇学など生活に役立つ少し専門的な学び / ■社会に出たときの礼儀 / ■自分がとってみたい資格などについて / ■植物について / ■料理、家事 / ■将来役に立つ社会や家庭科の授業

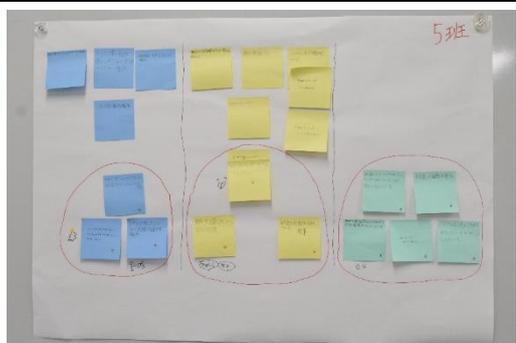
今の学校の好きなおとこ

■楽器の種類が多い音楽室 / ■色々な本がある図書室 / ■広い校庭 / ■教室 / ■落ちつく図書室 / ■思いきり楽しく遊べて体を動かせる校庭体育館 / ■広めの廊下 / ■生徒会室

5 班

新しい学校にできたらいいと思う場所

■自分の得意なことを発揮できる場所 / ■ネット環境が良く、タブレット作業がしやすい場所 / ■学年を気にせず交流できる場所 / ■一人で落ち着ける場所 / ■きれいでマンガさえもある集中できる大図書館 / ■冬とか暗くなるのが早いから、ちょっとしたイルミネーションがあってほしい / ■悩みや困ったことについて気軽に話せる場所



こんなことを学んでみたい

■他の人と話し合ったりして考えを広める / ■動物医学 / ■ものづくりについて / ■パソコンなど機会について / ■動画作成や編集の仕方 / ■プログラミングについて学びたい / ■人づきあいについて心はなぜ、悩み、痛むのか / ■自分で選択して学ぶ言語 / ■社会やお金の仕組みについて、時事 / ■English

今の学校の好きなおとこ

■先輩との壁があまりなく、廊下ですれちがった時も仲良く話している / ■校庭の自然が豊か / ■他の人と楽しく遊んだり話したりできる環境がそろっているところ / ■あいさつが正しくできるところ / ■悩んだ時に話せるカウンセラーみたいな人がいる

6 班

新しい学校にできたらいいと思う場所

■マンガも読める図書室 / ■昔の物・作品などいつでも見ながら学べる博物館的な場所 / ■落ちつける静かな場 / ■1人で落ち着けるスペース / ■発表した回数で、できるマッサージ機（何分とか） / ■柵付きの池（魚有） / ■全学年が交流できる場 / ■気象に右左されない広い場所 / ■遊びスペースがある体育館 / ■ジム



こんなことを学んでみたい

■昔の文化など深く学びたい / ■授業でもっと学びたいと思った時、もっと詳しく学べる所 / ■VRで〇〇の戦いとかの現状を体験できる / ■最近できた新しい場所・ものについて / ■色々な稼ぎ方 / ■仕事の種類 / ■AIについての使い方など

今の学校の好きなところ

■みんなで学べたり遊べたりする公共の場 / ■音楽室が広い / ■にぎやかな運動場 / ■静かな図書室 / ■図書館 / ■大きな体育館

〈大人グループ〉

時 間 午後2時～4時30分ごろ

テ ー マ 学校を設置する上で大切にしたいこと

参加人数 27人

内 容 ・子どもグループと同様、本市の教育政策アドバイザーである細田眞由美氏による講演の他、グループワーク前に「マシュマロチャレンジ」を実施しました。

・グループワークでは、子どもたちにとって、新しい学校にあったらいいと思う部屋や場所、これからの学校でどのようなことを学んでほしいか、地域と学校が関わる上で必要だと思う施設や機能について、ふせんに意見やアイデアを書き出しました。(写真⑤)

・最後にグループごとに発表を行い、各班からは「子どもたちが多様な学習に使える施設や設備があるとよい」、「多様な生き方や価値観を学んでほしい」、「地域に開かれたスペースが必要」といった意見が出ていました。(写真⑥)

〈ワークショップの様子〉



写真⑤



写真⑥

〈グループワークの結果〉

1 班

子どもたちにとって、新しい学校にあったらいいと思う部屋や場所

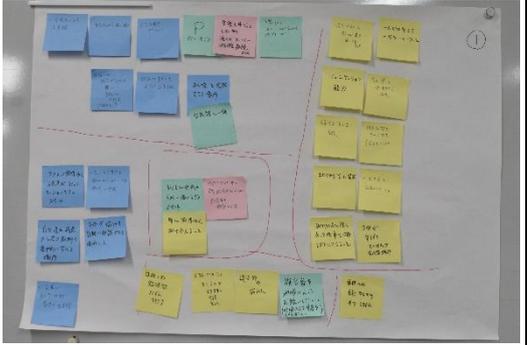
■冷暖房のある体育館 / ■コンサートホール / ■人工しばのグラウンド / ■P パーキング / ■学校を中心とした町-近くにスーパー、公民館、病院 etc. / ■災害時に温かいごはんが食べれる場所 / ■温かい給食が食べれる様に給食センターを作る(学校中に) / ■休みの時にも昼食が出る学校 / ■趣味を發揮できる場所-公民館と一体 / ■クラスに関係なく子供達がコミュニケーションできるスペース / ■思いきり動かすことができる場所と時間 / ■自分たちが得意だと思う教科を集中的に学べる場所 / ■子供が悩みを気軽に相談できる場所と人 / ■学童で朝 7:30 から学校であずかる

これからの学校で、子どもたちにどのようなことを学んでほしいか

■大学みたいな多くの事が学べる学校 / ■一人では生きていけないということ / ■コミュニケーション能力 / ■夜も塾と利用できる学校 / ■経営が学べる学校 / ■科学技術が学べる学校 / ■まわりから学ぶ姿勢 / ■生きる力 お金のことなど / ■まわりの人と話し合っ物事を決めるように出来ること / ■子供が制作提言が学べる場所

地域と学校がかかわる上で必要だと思う施設や機能

■子供と地域の人と一緒にできるイベント / ■行田中エリアの中に長野自治会が入っているので、自治会の移動が必要 / ■年に関係なく助け合えること / ■学校での短時間バイトを作る / ■PTA ではなくできる人ができる事を行う組織 / ■通学路の再編 / ■学校への会社などからキフシステム / ■旗当番を地域の人をお願いしたい(地域の人にも賃金をもらえること)



2 班

子どもたちにとって、新しい学校にあったらいいと思う部屋や場所

■学童の子の環境(さびしくならないよう) / ■みんなで食べれる食堂 / ■歴史体験 / ■自然体験 / ■ひらけた図書室 / ■広い空間 / ■自由に使える設備 / ■帰宅後も一人でもいる子がいられる場所

これからの学校で、子どもたちにどのようなことを学んでほしいか

■プログラミング / ■IT / ■より高度な科学 / ■株 / ■世界で通用する英語力 / ■世界中の学校と交流し友達になれる

地域と学校がかかわる上で必要だと思う施設や機能

■高齢者との交流 / ■地域の問題を話せる場所 / ■スポーツを共有できる体育館(施設) / ■防災について体験できる施設



3 班

子どもたちにとって、新しい学校にあったらいいと思う部屋や場所

- カフェ / ■広い空間だけではなく教室半分くらいで静かにすごせる場所 / ■ゴロ寝できるタタミの部屋 / ■いろんな学年と交流できるオープンスペース / ■カフェ・キッチン
- トイレ



これからの学校で、子どもたちにどのようなことを学んでほしいか

- 行田らしく「道」のつく勉強 / ■働き方の種類-みんな会社員ではない、個人経営や株でお金を動かす収入の得方を知る / ■各学年の交流の場 / ■勉強ができない子も得意なことをのびさせてくれる-親も安心できる
- 一生で稼げるお金、必要なお金を知る / ■金融・株

地域と学校がかかわる上で必要だと思う施設や機能

- 地域のひととの遊び / ■畑 / ■お金をかせぐ場所 ベルマーク・資源回収・内職 / ■児童館のような遊び場・児童館的遊び場(地域の人に協力してもらおう) / ■習い事のようなことをする場所 / ■学童 / ■不安と危険を吸い上げる部門 / ■支援学級(ことばの教室) / ■先生のメンタルケア / ■先生の避難場所-カウンセラー / ■未就学児や親も / ■高齢者と通われる所(デイサービスからきてくれる) / ■各学校との連携のもの大、行田特支、進修館 / ■大きな体育館 グランド / ■学校おたすけレンジャー / ■みんなが気軽に集まれるところ / ■ドッグラン

4 班

子どもたちにとって、新しい学校にあったらいいと思う部屋や場所

- 低学年が使いやすいきれいなトイレ、明るいトイレ / ■体育館は冷暖房完備 / ■部活動の活ぱつ化とその安全性の確立 / ■思いきり体を動かせる空間 / ■芝生の校庭 / ■学童
- 図書室-ソファみたいな椅子があったり気軽に本を読めたりする場所 / ■たくさんの種類の本がある広い図書室 / ■子供がリラックスして一人になれるところ / ■落ちこぼれ、不登校のない教室 / ■低学年の子と高学年の子との遊具・設備の住み分け / ■習熟度などで自由にクラスを移動できるシステム / ■学年の枠をこえたボーダーレスな交流ができる教室 / ■明るく、空気の循環する教室 / ■学年によってデザインの異なる教室空間 / ■廊下から教室内が見えるような空間(オープンスペース) / ■オープンとクローズの両立が大切だと思います / ■レストランみたいな部屋で給食を食べたり、マナーを学べる



これからの学校で、子どもたちにどのようなことを学んでほしいか

- 9 学年の差を社会の縮図のように生活を学んでほしい / ■郷土の歴史、風習等 / ■選挙へ行くにあたって政策などのとらえ方 / ■世界とのつながりを実践できる / ■行田市内には多くの音楽家がいるので、生の音楽に触れられる機会を作ってあげて欲しい / ■おもいやり、多様性を尊重できる / ■自分の良さ、他人の良さの見つけ方 / ■年齢差をいしきたおもいやりの気持ちを育ててほしい / ■食育 / ■体幹トレーニング←人体の大切な基礎

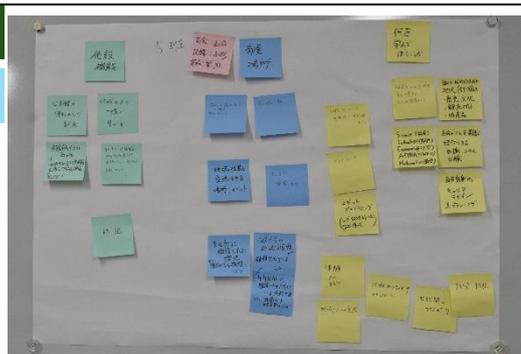
地域と学校がかかわる上で必要だと思う施設や機能

- 通学路の安全の確保 / ■地域とのオープン化と防犯に対する対応 / ■セキュリティの強化 / ■地域へ入り込む体制・公民館等との連携 / ■地域との交流できる施設 / ■草とり←今後考え続けることだと思います

5 班

子どもたちにとって、新しい学校にあったらいいと思う部屋や場所

■部屋・場所 / ■コミュニティスペース（共有）－廊下はなく
 ■広い遊び場 / ■地域住民と交流できる場所、イベント
 ■オンライン授業など / ■先生方に相談しやすい環境 ex.開放的な職員室のづくり / ■子供たちの心的安全性が確保されていること / ■先生以外の相談できる方がいる場所がある ex.地域の人、相談員さんなど



これからの学校で、子どもたちにどのようなことを学んでほしいか

■住んでいる土地の良さを学ぶ（大人と共有して） / ■誰かに紹介できるように－地元（行田）の歴史・文化、観光スポット、特産品 / ■Science（科学） / ■Technology（技術） / ■Engineering（工学） / ■Art（芸術、リベラルアーツ） / ■Mathematics（数学） / ■自分のことを英語で紹介できる知識、スキル、体験 / ■自分自身のキャリアデザイン / ■SNS について－危険性と便利面など / ■AI について / ■ロボットプログラミング（レゴ、マインドストームなど使って） / ■体験・地域農業など / ■地域の人の交流 / ■地域のつながり－先生をまねいたり / ■世代間のつながり / ■防災・防犯

地域と学校がかかわる上で必要だと思う施設や機能

■公民館を併せもつ部屋 / ■地域の人も一緒に学べる / ■閉鎖的でない学校－地域や社会に開放的、見える化で応援してもらえる学校 / ■部活は経験豊富でやる気ある講師を外部から。学校の先生ではなく / ■防犯

6 班

子どもたちにとって、新しい学校にあったらいいと思う部屋や場所

■放送局 / 自然観察部屋 / ■静かに勉強できる場所（個別スペース）（自習スペース） / ■シアター / ■外国とオンラインでつながる部屋 / ■仕事体験ができる部屋－キッズシアターのような / ■息抜きできる場所－ポーっとできる余白 / ■リラックルーム（昼寝できたら体調を整える） / ■同じ学校にいる外国人の文化を並べる部屋 / ■更衣室 / ■シャワールーム
 電磁波を減らす（少ない）部屋 / ■校庭グラウンド－芝（天然）カバー / ■三角デスク－アレンジメントデスク（北欧）
 ■未完なジオラマ（行田市中心）



これからの学校で、子どもたちにどのようなことを学んでほしいか

■学年、分け隔てなく人に寄りそう / ■障害のある方との交流、理解 / ■大人数での友達との関わり方 / ■年代が違う子どもとの関わり方 / ■外国の文化等 / ■地域の文化、歴史 / ■社会のしくみ 地域マネーの活用 選挙の立ち合い

地域と学校がかかわる上で必要だと思う施設や機能

読書室&音読室 / ゲーム室（部屋）－部屋のネーミング / 防犯対策－自治会との連携 / 地元の歴史を学べる部屋 / 子どもと地域の人々が一緒に勉強する部屋 / 地域と共有できる音楽室やプール・体育館 / 地域の人がいられる場（特に高齢者・乳幼児） / F-CON（パネル式のエアコン） / 自然エネルギー / 地域に開放された学校 / 博物館－住んでいる方の文化を学べる / 図工・美術－創造力を活かす / 暑さ対策－通学時 / ソーラーパネル / 行ったり来たりできる工夫 / アイデンティティ

〈第1回ワークショップのまとめ〉

子どもグループ、大人グループの中で多く出た意見は次のとおりです。

○ 子どもグループ

【新しい学校に、できたらいいなと思う部屋や場所】

- ・ 学習環境の充実（きれいな大図書館、自習室、博物館）
- ・ 交流できる場所（クラスや学年に関係なく、友達との仲が深まる場所）
- ・ リラックスできる場所（寝るところ、音楽鑑賞、マッサージ機、一人で落ち着けるスペース）

【こんなことを学んでみたいなと思うこと】

- ・ 探求的な学び（動物、生き物の解体、地域の工芸品、現代史の深掘り）
- ・ 将来役立つ実用的な知識（お金、経済、社会、政治、家事、仕事の種類、PC スキル）
- ・ グローバルな学び（外国語、外国の歴史、外国人との交流）
- ・ コミュニケーションや人間関係（人との関わり方、礼儀）

【今の学校の、すきなところ】

- ・ 人間関係（生徒が優しい、男女ともに仲が良い、先輩後輩の壁がない）
- ・ 施設や環境（広い校庭、大きな体育館、楽器の多い音楽室、図書館、日光が入る窓）。
- ・ 地域との交流があること

○ 大人グループ

【子どもたちにとって、新しい学校にあったらいいなと思う部屋や場所】

- ・ 教室の壁をなくしたオープンスペースや、広い階段を活用した開放的な空間作り
- ・ 多様な子どもたちが安心できる「居場所」（リラックスメーム、個室等）、工作・木工等ができる教室
- ・ 天然芝のグラウンド、コンサートホール、博物館的機能（ジオラマ・歴史学習）など、特色ある設備

【これからの学校で、子どもたちにどのようなことを学んでほしいか】

- ・ プログラミング、サイエンス、金融教育、実用的な英語教育など、未来を見据えた新たな学びの機会
- ・ 行田の歴史や文化、食育、農業体験などを通じて、アイデンティティや身体の強さを育む教育

【地域と学校がかかわる上で必要だと思う施設や機能】

- ・ 学校の一部開放（図書室、体育館等）や、地域住民が利用できる作業スペースの設置
- ・ 高齢者や未就学児を含む地域住民と子供たちが日常的に交流できるスペース（カフェ、食堂、農園等）
- ・ 災害時に利用しやすい防災機能や備蓄倉庫、フェーズフリーな設備（F-CON 等）

(2) DAY 2 令和8年1月12日 @行田市産業文化会館管理棟2階2AB会議室

テーマ 新しい学校への思いを形にしてみよう(子どもグループ、大人グループ共に同テーマ)

〈子どもグループ〉

時間 午前10時～午後0時15分ごろ

参加人数 35人

〈大人グループ〉

時間 午後2時～4時20分ごろ

参加人数 27人

- 内容**
- ・この日は、新しい学校の諸室の構成、備えるべき空間や機能についてイメージし、模造紙に表現するグループワークに取り組みました。参加者は、色画用紙を思い思いに切り貼りし、マーカーなど使って絵や図を描いていました。(写真⑦・⑧)
 - ・子どもグループでは、「自分の好きなことを自由に学べる学校」をテーマとし、図書館を中心に自習室やパソコン室を配置して、主体的に学びを深められる環境を提案する班や、「家のように安心して過ごせる学校」というテーマで、リラックスできる空間や相談室の設置など、安心して楽しく過ごせる学校づくりについて提案する班がありました。(写真⑨)
 - ・大人グループでは、テーマを「地域とともに成長できる学校」とし、図書館を中心とした交流空間や体験活動を充実させる学習空間を提案したり、「地域に開かれた学校」というテーマで、地域利用できるコミュニティスペースの設置や防災機能を備えた施設整備を提案する班がありました。(写真⑩)

ワークショップの様子



写真⑦



写真⑧



写真⑨

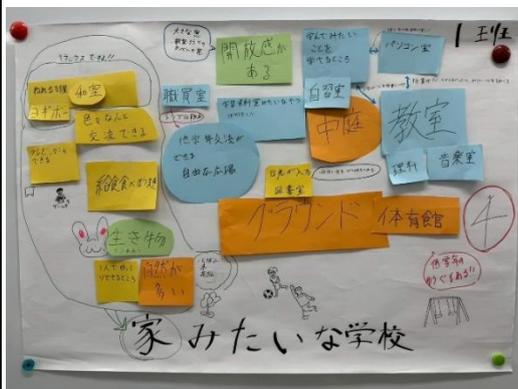


写真⑩

〈グループワークの結果〉

子どもグループ1班

テーマ：家みたいな学校



- テレビやゲームができる部屋、給食食べ放題がほしい
- 自然を多くしたいので、芝生、樹木、花壇などを配置した
- 他学年交流ができる自由な広場を配置したが、トラブルの防止として職員室も近くに配置した
- 「①学んでみたいところを学べるところ」
「②パソコン室」「③教室」を三角関係で配置した
→ ①学びたいことを自由に学び、②気になったことを調べ
③それを教室に持ち帰るというサイクル
- 体育館、グラウンド、中庭でこれまでどおり自由に体を動かせるようにした
- 大きな窓を教室や廊下に配置することで、開放感を作り、リラックスできる空間にした

子どもグループ2班

テーマ：自分の好きなことが自由に学べる学校



- 全体の中心に、中庭のある図書館を配置
- 全体をアスレチック渡り廊下で繋ぐことで、運動しながら楽しく廊下が渡れる
- ツリーハウスのような場所で、隠れ家のようにリラックスできる
- 交流教室を配置して、通常の教室からつながるようにした
- 多目的室のようにみんなで遊べる部屋の周辺に、リラックス室や一人で落ち着ける場所を配置した
- 図書館の近くにパソコン室を配置し、好きなことを学び、調べきれなかったことを図書館で学ぶことができる
- 図書館の近くに、「なんでも歴史室」を配置し、日本の歴史や世界の歴史を学べるようにし、ここで分からなかったことを図書館で調べられるようにした
- 図書館の近くに少し変わった本棚や椅子を配置し、みんながリラックスしながら読書ができるようにした
- 食堂を複数配置した

子どもグループ3班

テーマ：自分達で楽しむことができる学校



- 保健室をメインに配置し、体育館、ものづくり室、被服室でけがをしても、すぐに保健室に行けるようにした
- 異学年交流スペースと自習室を隣同士に配置し、誘い合って勉強できるようにした
- 地域交流スペースでは、みんなが楽しく利用できるものがあったり、移動しやすいように図書室を近くに配置した
- 地域交流スペースと体育館をつなげて、地域の方も体を動かすことができるようにした
- 体育館には保護者が来ることもあるので、観客席を設けた
- A1の使い方を学べる部屋を図書室とパソコン室の近くに配置
- 職員室を「いろいろな言語を学べる部屋」と「生徒・先生交流スペース」の間に配置し、分からないことがあったときにすぐに質問できたり、交流しやすいようにした

子どもグループ4班

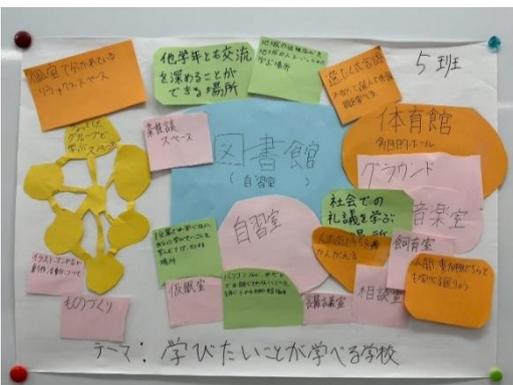
テーマ：快適に過ごせる学校



- 現在の学校をグレードアップしたイメージ
- 体育館と図書室を中心に配置した
- 広い体育館をつくり、これが実質的な交流スペースとなる
- 図書室の横に自習室を配置し、気になった本を自習室に持ち込み、集中して勉強できるようにした
- 1年生と9年生が遊ぶのは難しいと思うので、下級生スペースと上級生スペースを設けて、連絡通路でつなぐ形にした
- 連絡通路は広めにすることで、交流の遮断はしないようにした
- 連絡通路は体育館と図書室をつなぐものであり、そこへ移動する上級生と下級生で混雑することになるので、体育館と図書室への通路に関しては、上級生用と下級生用で分けた
- 下級生スペースでは、授業でよく使用する図工室などの特別教室を配置した
- 上級生スペースでは、勉強も増えてくるので、そういった部屋を配置するなど、階層ごとに配置を考えた
- 体育館と図書館は吹き抜けとして、開放感をもたせる

子どもグループ5班

テーマ：学びたいことが学べる学校



- 大きな図書館を中心に配置した
- 図書館の周囲に自習室やパソコン室を配置し、学びたいことを調べられるようにした
- 一人で勉強していて分からないことがあったら他の人に聞けるように、「他学年とも交流を深めることができる場所」や「地域の方と一緒に学ぶ場所」を配置した
- 休憩も必要になってくるので、雑談スペースや仮眠室を配置した
- 個室で分かれているリラクセススペースを配置し、一人でゆっくり休めるようにした
- 「ちょっとしたグループで学ぶスペース」では、小さなまとまりの部屋をいくつか配置し、細い通路でつなぐことで、どの部屋にも移動しやすいようにした
- このスペースの近くには、イラストや漫画、ものづくりなどの創作活動に関連した部屋があり、スペースを利用してグループ活動ができるようにした
- 自分で選んで外国語を学べる部屋を配置した
- 人間、動物どちらの医療についても学べたり、人の気持ちを考えることについて学ぶといった場所も図書館の周囲に配置することで、調べやすくなるようにした
- 周囲の人に話にくいことが相談できる相談室を配置した

子どもグループ6班

テーマ：学びの探究～調べる場所から広がる学び～



- 調べる場所（図書館）を中心に配置した
- 周囲に社会コーナーや音楽室、サイエンスラボを配置した
- 「くつろぎテラス」、「自然の本コーナー」、池や庭などのリラックスできるスペースを配置した
- 中心には複数の通路が接続されていて、地域の人も自由に使える場所をイメージした
- 屋上（体育館）があり、体を動かすことができる
- 調べる場所（図書館）は吹き抜けで2階に繋がっている
- 音楽室の近くには「音楽系の本コーナー」を配置するなど、調べたいことがすぐに調べられるようにした

大人グループ1班

テーマ：地域の中心となるような学校



- 地域交流スペースを中心に配置し、地域と学校をつなげる
- 地域交流スペースの中には公民館機能をもたせる
- グラウンドにはサッカー用、野球用、テニス用、陸上用など多様なものを配置した
- 図書室や美術館を配置し、それぞれのプロフェッショナルとなることを期待したい
- 3Dプリンタ等の最新設備を配備し、美術館と連携させる
- 大きなホールを配置し、学校の行事はもちろん、市の行事も行えることを想定
- 室内温水プールを配置（周辺の温泉施設から温泉水を利用）
- 学校の周囲を城壁で固め、行田市らしさ（忍城らしさ）を表現
- 子どもたちが遊べるスペース＝災害時に強い施設となる
- オープンキッチン等を配置し、給食センターなどを入れて誰もが利用できる食堂を設ける
- これらを利用するために、共通の管理システムを導入し、施設の空き状況等が分かるようにする

大人グループ2班

テーマ：「えん」でつなぐ学び舎



- オープンスペース（吹き抜け）を中心に置き、それを挟むように小学校教室と中学校教室を配置することで、気配は感じつつもゾーニングを行う
- オープンスペースにシンボルツリーがあると見た目もよい
- オープンスペースを囲むように廊下があり、そこに本棚を設置して図書スペースとする
- 「えん」とは「円」であり「縁」でもある
- 地域の方はエントランスとして交流スペースが利用できる
- 来校した人は、結構トイレに迷うことがあるので、エントランスには誰もが分かりやすく利用しやすいトイレを配置する
- グローバルゾーンとして、理科室、図工室、科学室、パソコン室、音楽室など技術的な教室をまとめ、回廊をまわって移動する形になる
- リラックススペースを設け、多目的に利用できるようにする
- 体育館は多層構造とし、1階が武道場など、2階が体育館として利用できるイメージで、災害時の利用も想定する

大人グループ3班

テーマ：のぼうの学校
～インクルーシブ的な場所～

- 「様々な経験ができる」というのがコンセプト
- 城のように学校の周囲を堀で囲むイメージ
- 堀の内側は学校空間、堀の外は公共の空間というように空間を区切り、セキュリティを高める
- 堀の外には、寺子屋（学童保育室）などがあり、習い事ができたり、カフェやドッグランを併設する
- 子どもたちが利用できる畑を設け、収穫した作物を併設したキッチンで給食を調理したり、子ども食堂に利用するといったことを想定
- 災害時にも役立つ機能にする
- 体育館には天守閣のようなものを設け、「行田っぼさ」を表現
- 中には柔道、剣道、茶道にも利用できるような和室（畳ルーム）を配置
- スクールロープウェイによって、新校3校や市役所といった要所を接続し、交通問題を解決
- 子どもたちや先生が利用できるメンタルケアができる場所やプライバシーを守る部屋を配置
- 内側に入っただけ、全体の中央に大きな吹き抜けのホールを設置
- ホールには椅子としても利用でき、図書や防災道具を収納できる階段を設ける
- ホールでは階段部分を利用した自習スペースや、コンサートや発表会での利用を想定

大人グループ4班

テーマ：自分の興味・やりたいことを
発見・追及できる学校



- 吹き抜けのある図書館を中心に配置し、興味の発見ができるようにする
- 野菜を作る農園や、収穫物を保存する倉庫、それらを調理できる調理室を設置し、栽培から収穫、調理までを子どもたちだけで完結できるイメージ
- 図書室の横にはリラックスマームを併設して、子どもたちが適宜休めるようにする
- 音楽室やものづくり室の付近に、「展示場・ホール」を配置し、作品の展示や演奏の発表ができる
- 「展示場・ホール」では郷土の歴史や芸能なども、気軽に演じたり鑑賞できることを想定
- 体育館には、柔道場や剣道場、器械体操場など、それぞれの種目に特化した設備を用意
- 運動場には、パルクールや SASUKE ができるような設備を配置
- 野球やサッカー、テニスなどコートが豊富なグラウンドも配置
- 階段なども、通常の階段だけでなく、消防署にあるようなロープを伝って降りてこられるような仕組みや、ボルダリングができる仕組みを構築
- 屋外にはビオトープを作る

大人グループ5班

テーマ：地域社会へ開かれた学校



- 概念的な内容だが、学校をハブとして地域と連携していく
- 行田人としてのアイデンティティが育つような学校を目指したい
- 地域企業・団体と連携できるようなコミュニティスペースを配置
- 明るく開放的な図書館で、児童生徒が知りたいことをどんどん探究できるようにし、地域の方とも連携して知識を深められるラボを配置
- 「スポーツを楽しむスペース」は、クラブチームのようなイメージで、プロや実業団の方を招いてスポーツを学ぶことができたり、専門性の高い方と部活を深められるような場所
- 「プロジェクト・ベースド・ラーニング」という、テーマを持って学んでいくことで、様々なことが身についていく考え方がある
- 「英語を学ぶ」のではなく、「英語を使って何かを調べる、発信する」といったように、自分が知りたいことを自分のスキルや知識を使って学んでいく
- それらを基本にしながら、ここでしか学べない地域に根差したことや専門的なことは、地域全体が応援団となって、子どもたちはやりたいことや興味をもったことを、開かれた学校のコアの中で学んでいく
- 「行田市全体が学びの場」となるような形にしていきたい

大人グループ6班

テーマ：成長し続ける学校



- 成長し続けるのは子どもたちだけでなく、学校も地域も
- CR=クラスルーム=教室の色分けは、成長に応じた空間ということ
- 小学校、中学校と区切るのではなく、それぞれの成長に合わせた教室づくり
- 中心に全体の交流場所として、ラーニングスペースや職員室、カフェなどを配置
- カフェは今後子どもたちで運営したり、利用したりマナーリテラシーの醸成に寄与
- その周囲に回廊を設け、様々な教室がつながることで、様々な学年の子が交流できる
- ラーニングスペースでは、Zoom等を利用して英語での国際交流ができる
- 会話ができるスペースと、静かに利用する場所とでゾーニングする
- 交流スペースの壁際周りにソファを設置し、全体をリビングのような雰囲気とし、子どもたちがリラックスしながら利用できる
- 入口に近いところは、大きな部屋に椅子や机の出し入れが可能な地域の方も使える交流スペースを配置
- 交流スペースではランチルームや学童での利用も想定
- 体育館に温水プールも併設
- 学校で習わない暮らしや生活について学べる場所や、「ジオラマ」「放送局」といった場所も配置（「ジオラマ」は行田市を中心に、埼玉県の地形などが分かるようなものをイメージ）
- 畑を設け、地域の方々に教えていただきながら野菜作りを学ぶ
- 「ゲーム」とは、廃材等を用いて工作をすることであり、SDGsに関わる学びをする
- CRから体育館への導線上に保健ルームや更衣室、シャワールームを設ける

〈第2回ワークショップのまとめ〉

子どもグループ、大人グループそれぞれの傾向として、子どもグループについては、学び・交流・安全・快適さを意識した空間構成を提案し、大人グループは学校・子ども・地域が一体となって、共に学びを深めていく施設として、新しい学校を整備していくといった提案をいただきました。

(3) DAY 3 令和8年2月11日 @行田市商工センター401 研修室

時 間 午前10時～午後0時30分ごろ

テ ー マ みんなが考えたイメージを発表しよう

(子どもグループ、大人グループ共に同テーマ)

〈子どもグループ〉

〈大人グループ〉

参加人数 30人

参加人数 25人

- 内 容**
- ・この日のワークショップは、子どもグループと大人グループが一堂に会して合同で開催し、2回目のワークショップでイメージした新しい学校の諸室の構成や備えるべき空間や機能について、子どもグループ、大人グループがお互いに発表した上で、感想を述べ合いました。(写真⑪・⑫)
 - ・その後、学校建築の第一人者である東洋大学名誉教授の長澤悟氏より「みんなで作ろう未来の学校」と題した講演を実施し、国内外の先進的な事例の紹介とともに、未来を見据えた学校施設のあり方について分かりやすく解説していただきました。(写真⑬)
 - ・講演を踏まえ、参加者は一斉に掲示した各班の成果物を確認した上で、気に入った部分や良かったポイントに「いいね！」シールを貼り、評価し合いました。(写真⑭)

〈ワークショップの様子〉



写真⑪



写真⑫



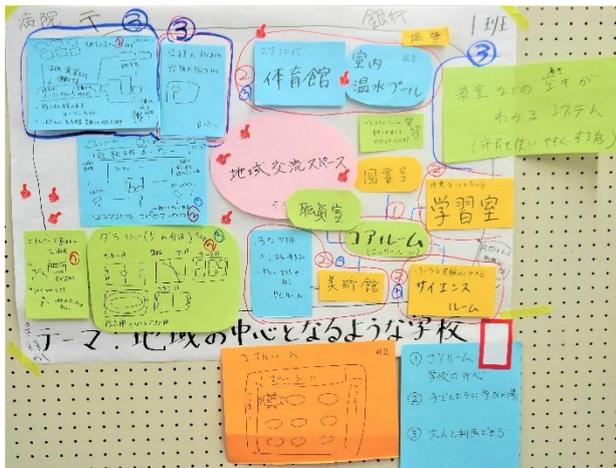
写真⑬



写真⑭

○ 大人グループ

1班



2班



3班



4班



5班



6班



〈第3回ワークショップのまとめ〉

新しい学校について、これまでの固定概念にとらわれない柔軟な発想による提案をいただきました。全体的な傾向として、学校の中心にみんなが集い学習できる空間を配置し、その周りに学びを深めていくことができる諸室を置くといった提案が多く出ました。

また、子どもも大人も地域社会とつながる開かれた学校というコンセプトや交流というキーワードのもと諸室の構成を考え、それぞれのイメージを発表していました。

子どもグループ、大人グループそれぞれの新しい学校への思いを共有することができ、大変意義のある機会でした。

ワークショップでいただいたアイデアを踏まえ、引き続き、皆さんと一緒に新しい学校づくりに取り組んでいきます。

発 行 令和8年●月

行田市教育委員会 学校教育部 教育総務課

〒361-0052 埼玉県行田市本丸2-20

TEL:048-556-8311

E-mail:kyouiku-s@city.gyoda.lg.jp